

石川県埋蔵文化財情報

第 53 号

巻頭図版（高堂二反田遺跡、中ノ江遺跡）

令和6年度の発掘調査から 所長 中屋克彦 … (1)

発掘調査略報

高堂二反田遺跡（小松市） (5)

中ノ江遺跡（能美市） (7)

令和6年度下半期の出土品整理作業 (11)

令和6年度環日本海文化交流史調査研究事業の記録

北部九州の高地性集落再考 山崎頼人 … (16)

山口県における日本海沿岸地域の高地性集落 田畑直彦 … (24)

山陰地方にみる弥生時代遺跡の動態－大山北西麓における遺跡の増減と立地傾向－ … 濱田竜彦 … (32)

丹後・但馬・北丹波の弥生時代の山城的な遺跡について 加藤晴彦 … (40)

福井県の「高地性集落」について 深川義之 … (48)

石川県における弥生時代集落動態－「高地性集落」抽出を目的として－ 鈴木静華 … (56)

富山県の弥生時代比高差のある集落と環濠のある集落について 細辻嘉門 … (64)

新潟県における弥生時代の集落について 滝沢規朗 … (73)

『高地性集落～日本海沿岸地域を中心として～』討論の記録 若林邦彦・林 大智 … (81)

調査研究報告

木製塔婆造立文化の基礎的研究 垣内光次郎 … (87)

2025年10月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

高堂二反田遺跡

調査区遠景（北西から）

遺跡は小松市高堂町の集落西側に広がる水田地帯に位置しており、東側に弥生～中世の複合遺跡である高堂遺跡が隣接する。八丁川右岸の沖積平野にあり地下水に恵まれる。

調査区北西で遺構が顕著に見受けられたことから、さらに北側へ遺跡は広がっている可能性が高い。

古墳時代後期以降に耕作された水田跡の掘削作業（東から）

表面に見える無数の小穴は植採痕とみられ、水田などの遺構であると考えられる。手前にある2条の溝は水田に付随する水路の可能性がある。

調査区東側では近世以降の耕作痕（足跡）を確認しており、古来より現在に至るまで断続的に耕作地として用いられたことがわかる。



調査区遠景（北西から）



古墳時代後期以降に耕作された水田跡の掘削作業（北西から）

写真解説

中ノ江遺跡

調査地遠景（北東から）

能美市中ノ江町と小松市蛭川町にまたがる遺跡で、梯川の支流である八丁川右岸の沖積平野に位置している。平成 28 年度と令和 2 年度に北陸新幹線建設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期～古墳時代と中世の集落が確認されている。

今回の調査範囲は遺跡の北東部分にあたり、主に弥生時代後期～古墳時代の集落跡と奈良・平安時代の自然流路を確認した。

周溝をもつ平地式建物（南東から）

調査区中央付近を中心に平地式建物と周囲をめぐる周溝を確認した。周溝の配置から、平地式建物は同じ場所で複数回にわたり建て替えがおこなわれていることがわかる。

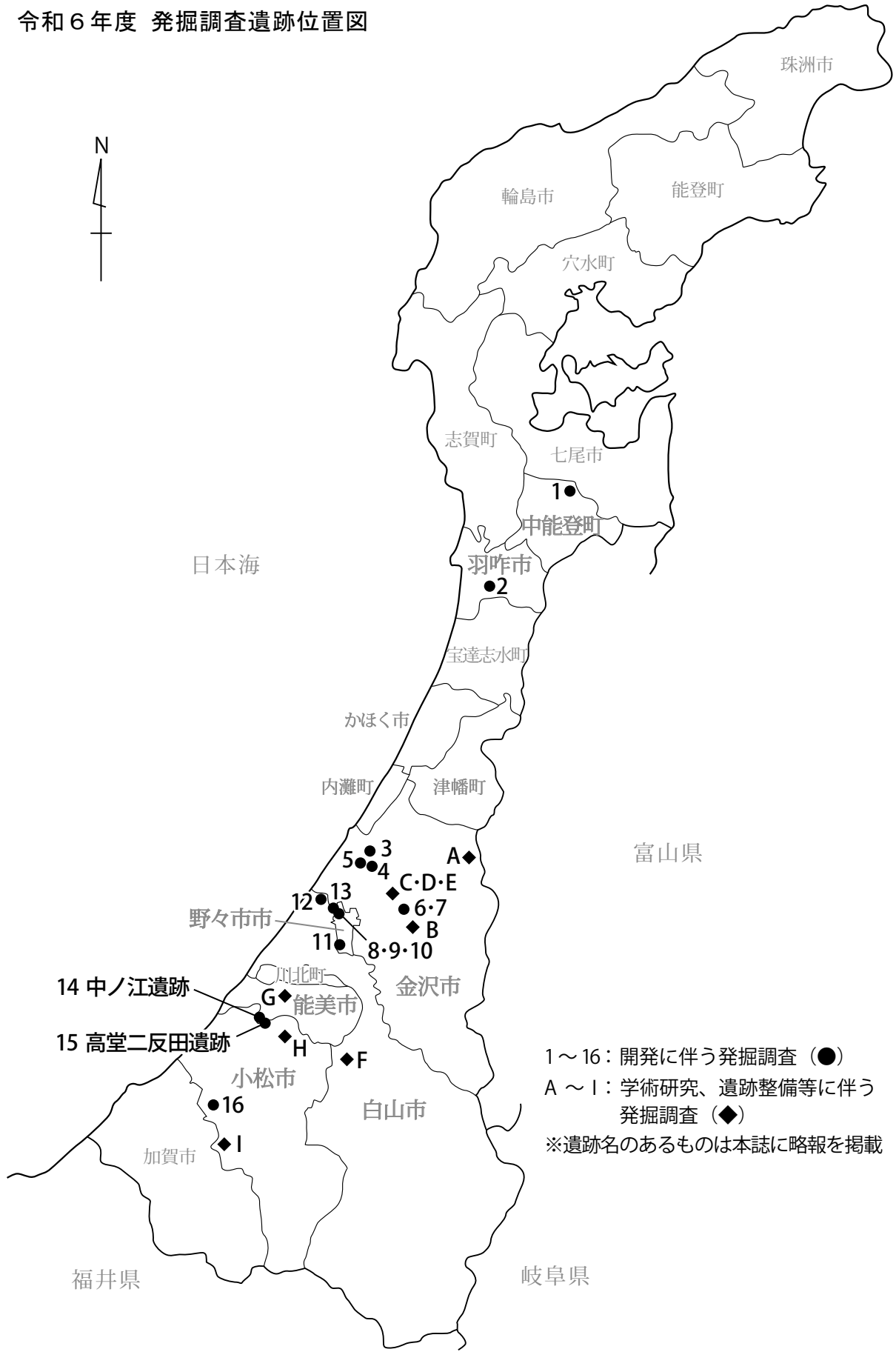


調査地遠景（北東から）



周溝をもつ平地式建物（南東から）

令和6年度 発掘調査遺跡位置図



1～16：開発に伴う発掘調査（●）
 A～I：学術研究、遺跡整備等に伴う
 発掘調査（◆）
 ※遺跡名のあるものは本誌に略報を掲載

令和6年度の発掘調査から

所長 中屋克彦

はじめに

令和6年度に県内では、開発に伴う緊急発掘調査16件35,627㎡と、学術調査、保存目的の発掘調査8件2,606㎡が、それぞれ実施された（令和7年3月2日現在）。令和5年度と比較すれば、緊急発掘調査は11件の減（面積4,742㎡減）、学術調査、保存目的の調査が4件の減（同696㎡減）となる。令和6年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」の影響により、通常の開発事業が中断もしくは実施できなくなるなどしたことが、調査件数・面積減の主な要因と考えられる。

緊急発掘調査を地域別でも、北加賀地域、特に区画整理事業が多い金沢市、野々市市、白山市に集中する状況が顕著で、調査件数で11件と全体の約7割を占める。一方、能登地域では羽咋市、中能登町で各1件が実施されたのみで、奥能登地域では学術調査、保存目的の調査を含め、発掘調査は実施されなかった。この他、南加賀地域では小松市で2件、能美市で1件と、北加賀地域以外の調査は低調に推移している。

学術調査、保存目的の調査は、金沢市、白山市、能美市、小松市で6機関が実施している。

なお、現地説明会は、県民が発掘現場で調査担当者の説明を聞きながら、調査成果に直接触れる大切な機会であり、令和6年度は、No.4・10・14・C・D・Hなどで実施されている。

1. 石川県埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査

令和6年度に県教委から当財団に委託された発掘調査は、2件5,550㎡で、平成10年の財団設立以降、最少の調査面積となった。これは、継続的に実施していた国交省関連事業の調査要望が一旦途切れている状況の中、能登半島地震の発生により、全県的に様々な事業の計画に変更が余儀なくされたことにより、要望が出されなかったことが大きな要因である。前号にも記したが、実際に宅田上野山遺跡（輪島市）の発掘調査依頼が取り下げられ、令和7年度においても調査依頼は見送られている。そうした中で発掘調査を実施した遺跡は、いずれも加賀地域の中ノ江遺跡（能美市）及び高堂二反田遺跡（小松市）である。

中ノ江遺跡は、梯川の支流である八丁川の右岸に位置する遺跡で、北陸新幹線建設に伴う発掘調査により、弥生時代から中世にかけての集落跡が確認されている。今回の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物や布掘り建物、平地式建物など30棟以上の建物を検出し、丸木舟を井戸枠に転用した井戸も確認した。これらの遺構からは弥生土器のほか、石鏃・管玉などの石製品、柱などの木製品が出土しており、集落の広がりや内容がより明らかとなった。また、奈良・平安時代の川跡も確認し、9世紀後半を中心とした、墨書土器を含む多くの須恵器や土師器などのほか、石帯の飾

令和6年度発掘調査遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	調査面積	事業者	事業名
1	中ノ江遺跡	能美市中ノ江町	弥生～中世	集落跡	3,600㎡	県土木部	一般県道粟生小松線
2	高堂二反田遺跡	小松市高堂町	古墳～平安	集落跡	1,950㎡		
					2件	5,550㎡	

り具（巡方）も出土している。

高堂二反田遺跡は、中ノ江遺跡から東へ500mほどの位置にある。今回の発掘調査では、9世紀頃を中心とする数棟の掘立柱建物や水路とみられる溝を検出したほか、古墳時代後期以降の水田（畑）跡を確認した。また、墨書土器を含む須恵器や土師器などのほか、寺院など宗教関連施設に用いられることが多い八角形に加工された木柱が出土している。

高堂二反田遺跡の東には、一般国道8号小松バイパス建設に伴う発掘調査で、9世紀頃を中心とする多数の掘立柱建物や銅銭を埋納した土坑などが見つかるとともに、墨書土器や「金光明最勝王経四天王護国品」銘木簡などが出土し、能美郡衙や寺院に関連するとみられる高堂遺跡が隣接する。中ノ江遺跡、高堂二反田遺跡とともに、高堂遺跡との関連がうかがわれる調査成果となった。

2. 市町等が実施した緊急発掘調査

市町等が調査主体となった緊急発掘調査は、14件30,047㎡である。令和5年度より件数は7件減少したが、面積は微増している。市町別では、金沢市が5件14,927㎡、白山市が2件7,388㎡、野々市市が4件6,047㎡、小松市、羽咋市、中能登町が各1件で合わせて1,715㎡である。調査面積の比較的多い3市は、区画整理事業等に起因するところが多い。

金沢市南新保C遺跡（No.4）では、弥生時代中期後半～後期の方形周溝墓や平地式建物、古墳時代前期の前方後方墳などが確認された。前方後方墳は、平成8・9年度に当センターが行った発掘調査で検出した前方後方墳の後方部の一部で、全長が32mとなることが明らかとなり、北加賀地域最大規模の古墳であることが判明した。また、金沢市小立野モトツルママチ遺跡（No.6）では、近世の武家屋敷跡や近代の金沢監獄跡の遺構が検出された。白山市横江ゴクラク寺遺跡（No.10）では、中世前半（鎌倉時代）の掘立柱建物や溝、井戸などを検出した。掘立柱建物の1棟は、南北28m、東西4.5mの建物で、一般的な集落では見られない長大なものである。出土遺物は12世紀後半～13世紀前葉が中心で、存続期間が短い遺跡であったと考えられる。小松市念仏林南遺跡（No.16）では、堅穴建物5棟が検出され、古墳時代中期の居住域の展開が明らかとなった。

3. 学術調査、保存目的の発掘調査

学術調査または保存目的の発掘調査は9件で、うち6件は継続事業である。能登半島地震の影響もあり、加賀地域のみでの実施となっている。

金沢市涌波遺跡（土清水塩硝蔵跡）（B）は、加賀藩の黒色火薬製造施設であり、国史跡辰巳用水附土清水塩硝蔵跡の指定地内における史跡整備を目的とした調査である。発掘調査では、火薬の原料を保管していた建物である硝石御土蔵跡の礎石や周辺に廃棄された瓦などを確認している。

石川県金沢城調査研究所は、国史跡金沢城跡二ノ丸御殿復元整備に伴う確認調査（C）、二ノ丸御殿に付属する庭園・馬場などの屋外空間についての遺構を確認するための調査（D）の2件のほか、先の能登半島地震により崩落した石垣の応急保全に伴う立会調査を実施した。

能美市西山古墳群（G）では、5基の円墳について周溝確認のトレンチ調査を実施した。また、令和3年度から継続して調査していた23号墳については、埋葬施設の底部が残存していることが確認され、鉄剣・鉄刀・鉄鏃・鏡片・短甲などの副葬品が出土している。

また、金沢学院大学は、小松市等と連携して、河田山9号墳（H）のトレンチ調査を実施し、周溝の可能性のある土層の堆積を検出し、墳丘上では石室石材とみられる凝灰岩の露出を確認している。今後も官学の連携が進むことが期待される。

令和6年度県内遺跡発掘調査一覧

◎開発に伴う緊急発掘調査

No.	遺 跡 名	所 在 地	主 な 時 代						面積 (㎡)	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	在江ドウコダ遺跡・廿九日ヒガシゲ遺跡	中能登町在江・廿九日地内			○	○			85	町
	土坑・ビット・溝状遺構を検出し、土師器や須恵器等が出土した。本遺跡は近接する集落跡の在江遺跡と関連するものと考えられる。									
2	深江遺跡	羽咋市深江町地内				○	○		400	市
	柱穴状遺構、溝状遺構を検出。へぎ板（中世）を伴う土坑を検出。奈良・平安時代の須恵器・土師器が中心、墨書土器が数点あり。中世の土師皿・陶磁器も出土。									
3	直江北遺跡	金沢市直江南地内	○	○	○	○	○		450	市
	海側環状道路側道の雨水貯留槽設置に伴う発掘調査。現代の耕作時に行われた天地返しによって多くの遺構が破壊されているものの、各時代の溝や土坑が少数検出されている。									
4	南新保C遺跡	金沢市南新保町地内		○	○	○			3,350	市
	H8・9年度県埋文センター調査時に検出された前方後方墳の周溝の延長を確認、北加賀最大の規模をもつことが判明。その他、弥生時代中期後葉～後期の平地式建物、方形周溝墓、時期不明の木棺墓などを検出。									
5	南新保ゴマヂマチ遺跡	金沢市大友地内		○	○	○	○		7,650	市
	昨年度調査区に隣接する箇所への調査。弥生時代末～古墳時代初頭の溝からは多数の土器のほか容器型木製品や刀形木製品などが出土している。									
6	小立野モトツルママチ遺跡	金沢市小立野地内						○	2,795	市
	武家屋敷跡（近世）及び金沢監獄跡（近代）の発掘調査。金沢監獄のレンガ基礎のほか、近世土坑・溝・井戸を検出。近世陶磁器・近世土器・近代陶磁器が出土した。									
7	経王寺遺跡	金沢市小立野地内						○	682	市
	令和7年2月から調査予定。調査地は近世において横山家下屋敷と経王寺の境界に該当し、敷地境界を示すと思われる大規模な溝が検出されている。									
8	長池ニシタンゴ遺跡	野々市市長池地内	○	○	○		○	○	554	市
	弥生時代後期後半の小穴や方形周溝墓とみられる溝を検出。									
9	横江古屋敷遺跡	野々市市長池地内		○	○	○			801	市
	弥生時代後期後半の小穴や流路などを検出。									
10	横江ゴクラク寺遺跡	野々市市郷二丁目地内	○		○		○		1,654	市
	中世前半（鎌倉時代）の掘立柱建物や溝、井戸などを検出。掘立柱建物は一般的な集落ではみられない南北に長大なもの。									
11	末松遺跡	野々市市小林三丁目地内	○	○	○	○	○		3,038	市
	古代及び中世の集落を確認した。古代の竪穴建物1基、古代・中世ともに掘立柱建物1棟以上検出。									
12	八田中遺跡	白山市八田町地内	○	○	○	○	○	○	7,320	市
	川跡を確認した。縄文時代から近世にかけての土器が出土。									
13	横江古屋敷遺跡	白山市横江町地内		○	○				68	市
	川跡を確認した。弥生土器が出土。									
14	中ノ江遺跡	能美市中ノ江町地内		○	○	○	○		3,600	県
	弥生～古墳時代の集落跡と奈良・平安時代の川跡を確認し、掘立柱建物や平地式建物、井戸、土坑、溝などを検出した。遺構からは弥生土器、土師器、須恵器などの土器をはじめ、石鏃や玉作り関連遺物、井戸枠・柱などの木製品が多く出土した。									
15	高堂二反田遺跡	小松市高堂町地内			○	○			1,950	県
	平安時代前期頃を中心とした集落跡を確認した。古墳時代後期の水田跡、平安時代の掘立柱建物や溝、江戸時代以降の耕作痕（足跡）などを検出し、土坑から須恵器や土師器がまとまって出土した。									
16	念仏林南遺跡	小松市月津町地内	○	○	○				1,230	市
	古墳時代中期の竪穴建物、炉状遺構を検出した。土師器などが出土した。									

【調査担当】市・町：市・町教育委員会等 県：県埋蔵文化財センター

◎学術研究、遺跡整備等に伴う発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積 (㎡)	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
A	松根城跡	金沢市松根町地内					○		9	市
	大堀切の復元工事に伴い、堀切の斜面および斜面下端の地山深度を確認するための発掘を実施。斜面の天端と底部で平坦面を検出。遺物は出土していない。									
B	涌波遺跡（土清水塩硝蔵跡）						○		68	市
	史跡整備に伴い硝石御土蔵の礎石配置および搗蔵の西端部を追加調査。硝石御土蔵付近では釉薬瓦が大量に出土している。									
C	金沢城跡（二ノ丸）	金沢市丸の内					○		2,300	城
	二ノ丸御殿復元整備に伴う確認調査。近世後期の御殿建物の礎石根固め、くぐり抜け階段（胎内）、石組拵、石組溝、便所遺構を確認。また、前期御殿の礎石等を確認。陶磁器、土師器、瓦等が出土。									
D	金沢城跡（御居間先）	金沢市丸の内					○		110	城
	二ノ丸御殿に付属する庭園・馬場などの屋外空間について遺構を確認するための調査。近世後期とみられる白色粘土貼りの池を新旧2基確認。									
E	金沢城跡 兼六園	金沢市丸の内					○		-	城
	金沢城と兼六園では、石垣の崩落または変形が30箇所で見つかった。崩落石垣の応急保全対策に伴い、崩落石材の撤去等を行うことから、立会調査を行った。									
F	鳥越城跡附二曲城跡	白山市三坂町地内					○		73	市
	石垣を確認した。陶磁器が出土した。									
G	西山古墳群	能美市徳久町			○				19	市
	古墳の埋葬施設・周溝を確認。土器・鉄製品が出土。									
H	河田山9号墳	小松市国分台3丁目地内			○				5	大学
	古墳東辺のトレンチ調査を実施し、周溝の可能性のある土の堆積を検出した（断ち割りは未実施）。昨年度に続き、墳丘上では石室石材とみられる凝灰岩の露出を複数確認した。									
I	那谷寺遺跡	小松市那谷町地内					○		90	市
	中世（15世紀代）の焼礫群や瑪瑙を伴う土坑、礎石建物を検出しているが、現在、掘削途中。青磁碗や越前等の中世陶器が出土している。									

【調査担当】 市：市教育委員会等 城：県金沢城調査研究所 大学：金沢学院大学

※本データは「令和6年度発掘報告会」（令和7年3月2日）の当日資料を転載（一部改変）。

たかんどうに たん だ
高堂二反田遺跡

所在地 小松市高堂町地内
調査面積 1,950 m²

調査期間 令和6年7月29日～令和6年12月18日
調査担当 川畑 誠 安中哲徳 正田悠馬 水田 勝 井島大地



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 9世紀頃を中心とする数棟の掘立柱建物や水路とみられる溝を検出した。
- ・ 古墳時代後期以降の水田(畑)跡を検出した。
- ・ 側面を成形し八角形に加工された木柱を検出した。
- ・ 同時期には周辺の高堂遺跡などで活動が活発化しており、これらに関連する遺跡と考えられる。

高堂二反田遺跡は梯川支流である八丁川右岸の沖積平野に位置し、一般県道粟生小松線の改築(延伸)事業に伴う分布(試掘)調査により新たに発見された遺跡である。西側700m先に存在する中ノ江遺跡とともに令和6年度に発掘調査を実施した。調査区は小松市高堂町の集落西側に広がる水田地帯の一角で、東側に国道8号改築事業で昭和54～56年に調査が行われた高堂遺跡が隣接する。

調査は住宅地に隣接する東半区(A・B・C区)から行い、西半区(D・E区)へ移行した。東半区では、A区で平安時代の掘立柱建物(2×2間)、B・C区で南北軸の溝を確認し、そのほかに近世以降の耕作痕(足跡)を検出した。西半区では、D区で古墳時代以降の水田跡とそれに付随する水路とみられる溝、E区で平安時代の数棟の掘立柱建物群や土器が集積した土坑を確認した。またD区とE区にまたがる溝(小路か)を検出している。

遺物は「万呂」を記した墨書土器など9世紀頃を中心とする須恵器や土師器が大部分を占めており、遺跡の中心的な年代を反映しているものと想定される。さらに、横断面をおおよそ八角形に加工した多角形の木柱を2本確認した。八角形柱は寺院など宗教関連施設に用いられることがあることから、関連がうかがわれる。周囲からこの木柱と同一施設になりうる柱穴は検出されなかった。

東に隣接する高堂遺跡は弥生～中世の複合遺跡であるが、9世紀頃を中心とする約20棟の掘立柱建物群や皇朝銭埋納土坑が確認されたほか、約180点の墨書土器や「金光明最勝王経四天王護国品」銘木簡が出土し、能美市中庄町に比定される能美郡衙や寺院に関連する遺跡とみられる。周辺の中ノ江遺跡や松梨遺跡などでも同時期の活動がうかがえることから、高堂二反田遺跡もこれらの遺跡と関連した動向を示していると言えよう。



調査区遠景 (東から)



E区全景 (南から)

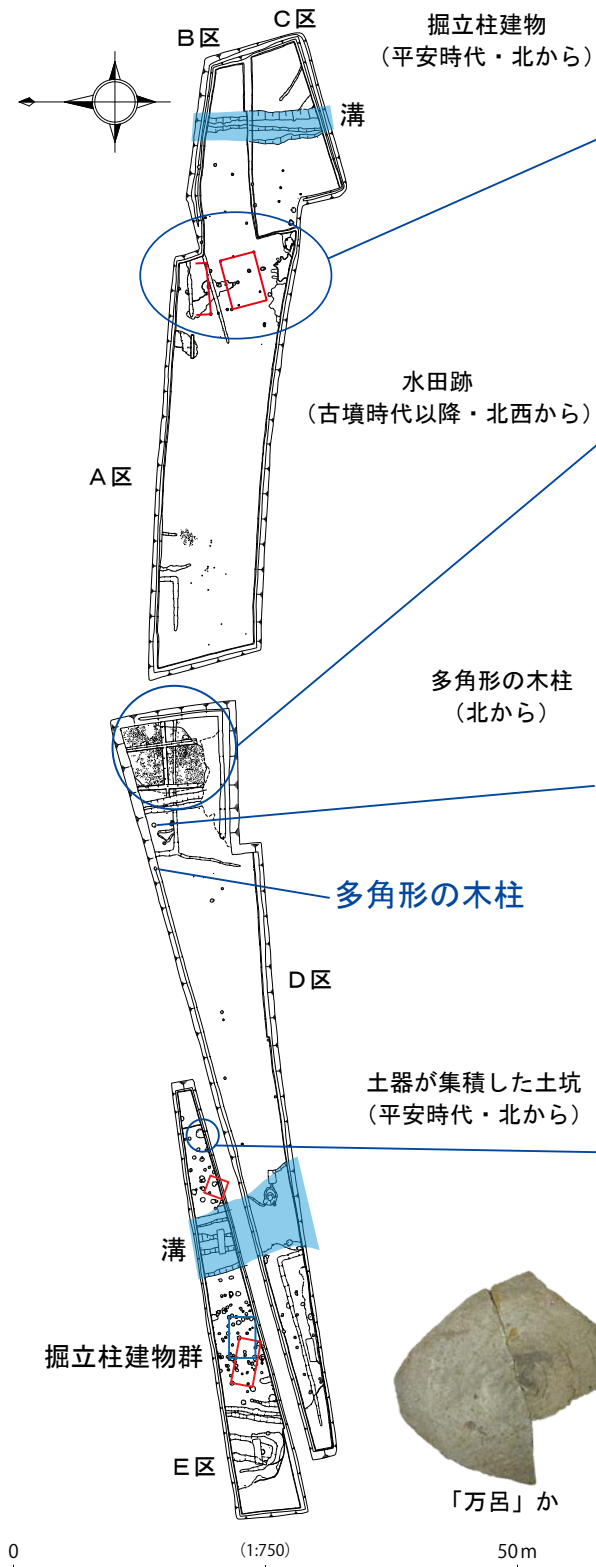


図1 調査区全体図



出土した墨書・墨痕をもつ土器 (平安時代)

なかの 江遺跡

所在地 能美市中ノ江町地内
調査面積 3,600 m²

調査期間 令和6年5月20日～同年12月26日
調査担当 青山 晃 松山和彦 岩城栄淳 歌代若菜
鈴木静華 知田真幸 上村顕太郎 井島大地



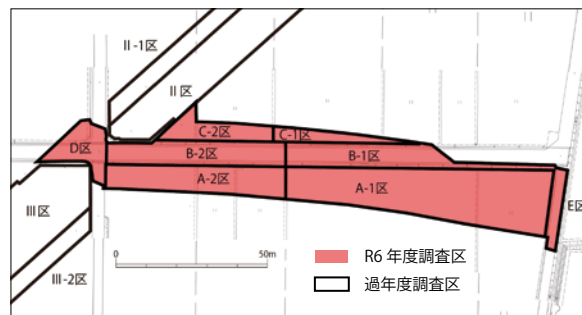
遺跡位置図 (S=1/25,000)



掘削作業風景 (北西から)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代後期から古墳時代の集落と奈良・平安時代の自然流路を確認した。
- ・ 弥生時代後期から古墳時代の掘立柱建物や平地式建物、布掘り建物などの建物跡を検出した。また、素掘りや丸木舟を転用した井戸などを確認した。
- ・ 弥生土器、土師器、須恵器などの土器、石鏃・管玉などの石製品、井戸枠・柱などの木製品が出土した。



調査区区割 (S=1/2,500)

中ノ江遺跡は、能美市中ノ江町と小松市蛭川町にまたがり、梯川の支流である八丁川右岸の標高約4.0mの沖積平野に立地している。平成28年度と令和2年度に北陸新幹線建設に伴う発掘調査がおこなわれ、弥生時代後期から古墳時代と中世の集落を確認したほか、集落全体を囲むような二重の環壕を検出している。今回の調査は地方道改築事業に伴うものである。

今回の調査地は遺跡の北東部分にあたる。遺構検出面の標高は約3.6～3.8mを測り、調査区西端がわずかに低くなっている。現地調査では調査区をA～E区に区分し、さらにA～C区を東西に二分して調査をおこなった。

調査の結果、弥生時代中期の土坑、弥生時代後期から古墳時代の建物や井戸、溝、土坑、小穴、奈良・平安時代の自然流路(NR01)を検出した。遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代が中心である。以下では各時期の遺構・遺物について概観する。

弥生時代中期の土坑を調査区の中央から西側にかけて確認した。土坑からは、土器片のほかに緑色凝灰岩の原石や管玉未製品、石鋸などが出土しており(SK273・281)、集落内で玉製作がおこなわれていたと考えられる。なかでもSK281は直径4.2m、深さ0.8mの大型土坑で、その性格について不明であり今後の検討課題である。

弥生時代後期から古墳時代の遺構は東半部で比較的密度が高いことから、集落の中心が東半部に存在していたことがわかる。建物は、掘立柱建物、平地式建物、布掘り建物などの形態が確認でき、30

棟以上を想定している。掘立柱建物は1×1間や1×2間のものがみられ、多くの柱穴から柱根や礎板が出土した。平地式建物は1棟以上が想定でき、周溝をもつことを確認している（建物1-SD30）。また、周溝の配置から複数回にわたって建て替えられていると考えられる。布掘り建物は4棟を想定している。建物規模は、全体がわかるもので、1×3間の建物が3棟（例：建物2）確認でき、そのうちの1棟（建物3）は独立棟持柱建物である。井戸は素掘りのもの（SE02）や井戸枠に丸木舟を転用したもの（SE05）などを5基確認した。その中でもSE04は、削り抜き材の外側に縦板が配置してあり、県内では類例がほとんどみられていない。また、井戸から出土した土器や木製品は、祭祀に使用された後に廃棄されたものと考えられる（SE02・04）。D区では、新幹線調査の際に検出した二重の環壕の一部を確認した（SD94・95）。この環壕より西側では遺構の密度が希薄であり、弥生時代における集落の境界を示すものと考えられる。

奈良・平安時代の自然流路（NR01）を調査区中央で検出した。深さは検出面から約1mを測り、須恵器や土師器などが多数出土している。須恵器や土師器の中には墨書土器が確認でき、時期は9世紀後半が中心とみられる。墨書には、「万昌」、「昌」、「益」、「得」、「隆」、「里」、「大」、「三」などの文字があり、「益」、「隆」、「得」は小松市高堂遺跡や浄水寺跡、「得」は能美市小長野C遺跡で出土事例がある。特に高堂遺跡は、中ノ江遺跡から東へ約1.2kmの場所に立地しており、墨書土器の中に共通した文字がみられることから、両者の関係性も今後の検討課題として挙げられる。そのほか、朱墨痕が残る転用硯（須恵器坏蓋）や石製の巡方が出土している。これら古代の遺物は、自然流路以外からほとんど認められず、調査区外から流入したものと考えられる。そのため、今回の調査区の比較的近い場所に古代の遺構が存在する可能性がある。また、墨書土器や石製の巡方などから、遺跡周辺に古代の役所や寺院と関係性のある施設の存在がうかがわれる。

次年度以降も調査は継続する予定である。今後の調査によって、本遺跡の様相が一層明らかになるものと期待される。
（知田真幸）



玉製作関連遺物（弥生時代中期）



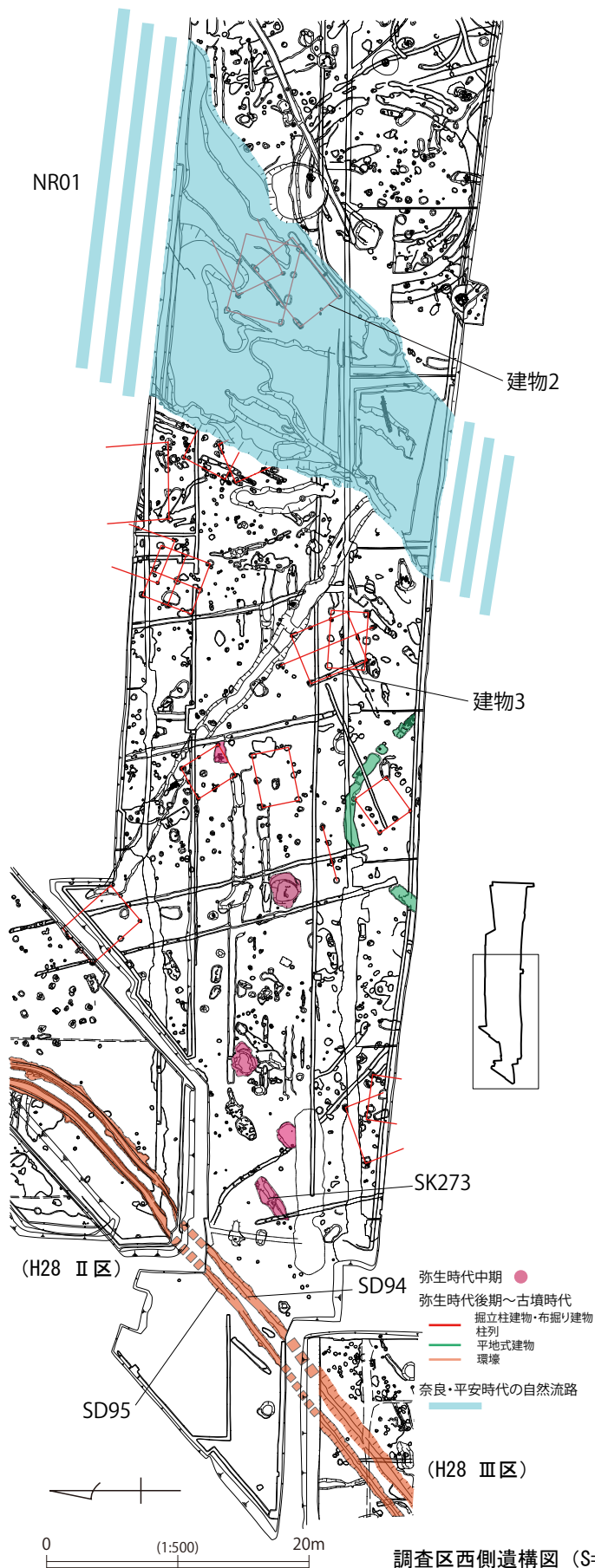
弥生土器（弥生時代後期）



自然流路出土遺物（奈良・平安時代）



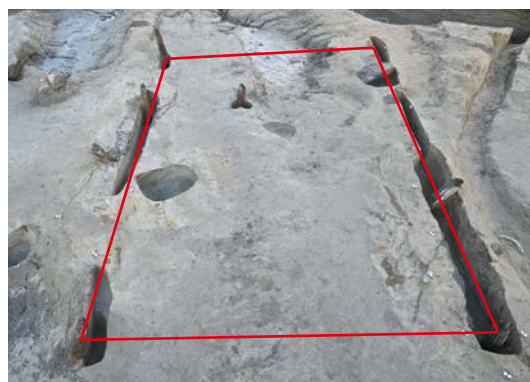
墨書土器「昌」



調査区西側遺構図 (S=1/500)



自然流路 (NR01、北東から)



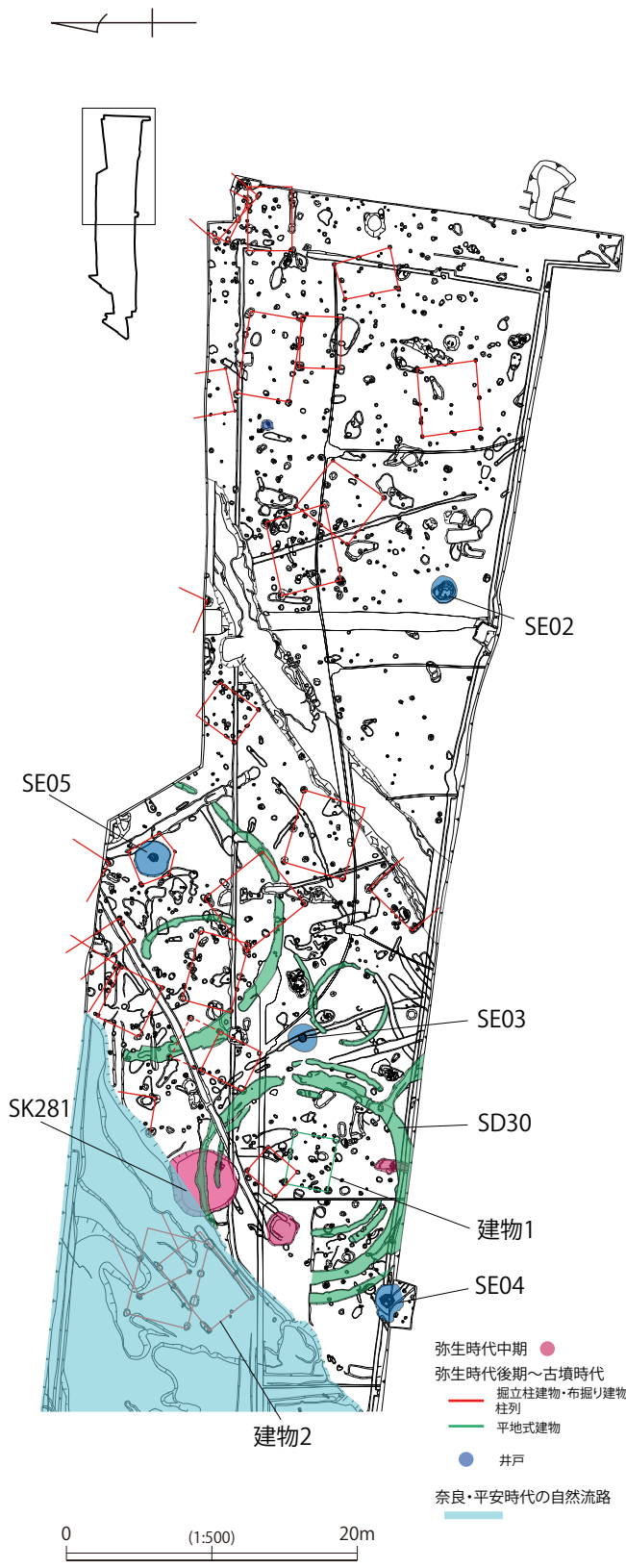
布掘り建物 (建物2、南西から)



石鋸出土土坑 (SK273、南東から)



環濠完掘状況 (SD94・95、北東から)



井戸遺物出土状況 (SE02、南から)



井戸遺物出土状況 (SE04、北から)



丸木舟転用井戸 (SE05、西から)



大型土坑完掘状況 (SK281、南から)

調査区東側遺構図 (S=1/500)

令和6年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は宅田上野山遺跡（輪島市 令和4年度調査）の土器・石器の記名・分類・接合と土器の実測・トレースを行った。

宅田上野山遺跡は谷部と平地部分に分かれており、谷部は縄文時代（後期から晩期）、平地部分には古代、近世の遺物が出土している。遺物の多くは縄文時代のものであり、全体の90%以上を占める。

遺物の中でも縄文時代の石器の多さは目を引くものがある。ケース数では土器と同量ほどあり、石冠、石棒、玉類、磨製石斧、打製石斧、石鏃、スクレイパー、石錘、磨石、たたき石、砥石等と種類も多様である。磨製石斧では外来のものも確認されている。また、未成品の数も多く、中でも磨製石斧の未成品は群を抜いて多い。素材となる石材も出土しており、石器の生産工程を窺うことができる。

(横山そのみ)



土器の記名・分類・接合



石器の記名・分類・接合



土器の接合



土器の実測

県関係調査グループ

令和6年度下半期は、観法寺ヤッタ遺跡（金沢市 平成30年度調査）、庄・西島遺跡（加賀市 平成29年度調査）、倉垣遺跡（志賀町 令和4年度調査）の整理作業を行った。

観法寺ヤッタ遺跡は上半期に引き続き実測・トレースを行った。土器は高坏、長胴甕、柑塙、須恵器の双耳瓶、珠洲焼の転用硯、木製品は柱根、下駄、漆椀、金属は飾り金具、火打ち金、銅銭、軒平瓦（重弧文）も実測した。

庄・西島遺跡は実測・トレースを行った。甕、壺、鍋、行火、横瓶、墨書土器7点、刻書土器1点、井戸枠、隅柱、柱根、下駄、石帯、硯、帯金具等多種多様な遺物を実測した。隅柱は加工の残りも良く書きごたえがあった。

倉垣遺跡は、記名・分類・接合作業を行った。甕、壺、高坏、器台、手づくね、かまど等があり中でも手づくねは集中して出土しており多く接合した。（小島紀子）



木製品実測（観法寺ヤッタ遺跡）



木製品実測（庄・西島遺跡）



出土品接合（倉垣遺跡）



鏡型の土製品（倉垣遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は、矢田遺跡（七尾市 令和4年度調査）、古府シマ遺跡（小松市 平成30年度調査）の出土品整理作業を行った。

矢田遺跡は、上半期に引き続き記名・分類・接合を行った。昨年度に整理した出土品の破片が見つかり大きくなった物も数点あった。今年度は、約400箱と今までに整理したことのない箱数で、期間内に整理出来るか不安だったが、国関係グループの手も借り、約1,200点の出土品の補強を行い、整理作業を終えることが出来た。

古府シマ遺跡は、土器、石器、金属器の実測・トレース作業を行った。大小様々な大きさの土師皿が多かった。底部に綺麗に糸切り痕の残っている物もあった。羽釜や須恵器の甕、珠洲焼瓦器碗や白磁碗などもあった。石器では、火打ち石や石墨、砥石などがあった。

(土生久美子)



選別済みのテンバコ（矢田遺跡）



土器の補強作業（矢田遺跡）



土器の実測（古府シマ遺跡）



金属器の実測（古府シマ遺跡）

令和6年度 環日本海文化交流史調査研究事業の記録

環日本海文化交流史調査研究事業は、日本海沿岸地域の歴史的理解を深め、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、テーマに基づき沿岸各地域の方々と調査・研究を行い、交流を図るものである。令和5・6年度は「高地性集落－日本海沿岸地域を中心として－」をテーマに、近年様々な角度から高地性集落をとらえ直す研究が進められている中で、日本海沿岸地域の様相を明らかにしていくことを目指した。

平成12年度から始まった研究事業は当初1年単位のものであったが、平成29年度から1年目を基礎研究、2年目に調査・研究を深化させまとめの年とする2年単位の事業となった。1年目の令和5年度は、日本海沿岸7地域の方々に共同研究者となっていただき、各地の高地性集落の概要報告を中心とした研究集会を開催した。また高地性集落を考える上での着眼点を得るため、同志社大学の若林邦彦さんにご講演を賜り、その後共同研究者会議で、高地性集落の様相を探るための方法を検討した。高地性集落の性格・定義を考えるというより、周囲の遺跡との関係、遺跡動態のあり方などから、地域ごとに何が言えそうかとらえてみよう、という方向性が話合われた。

共同研究者の皆様には、2年目の研究集会に向け、任意に選択した地域について、縄文時代晩期から古墳時代前期の集落遺跡を取り上げ集成していただいた。遺跡の標高や比高を時期ごとにグラフ化することと、継続期間や遺構・環濠の有無などを加味した消長表の作成をすることになった。また国土地理院の陰影図や地形分類図など、地形が視覚的にわかりやすい地図に遺跡位置を示し、立地環境なども考慮することとなった。その中から比高などに着目してとりあげる遺跡を抽出し、さらに情報を追加した一覧表を作成していただき、研究集会を迎えることができた。この間、8月7日、12月19日と2回の共同研究者会議をオンラインで開催し、作業を進める中で見えてきたことや問題点、グラフ作成の方法などを検討していった。

令和7年2月13日、14日に、石川県埋蔵文化財センター研修室を会場に、県内の埋蔵文化財関係者や当法人職員、オンライン参加の方を含め120名の参加者を得て、環日本海文化交流史調査研究事業最後となる研究集会を開催することができた。始めに、当方職員の林が趣旨説明を兼ね、高地性集落研究の現状、北陸での研究の歩み、課題を示し、今回の研究集会での分析方法と視点を説明した。集落数の増減、高所進出の時間的・空間的傾向を地域間で比較する中で何が見えてくるのか、各地の報告の後、14日午後に若林邦彦さんをコーディネーターに迎え討論が行われた。各地の報告と2時間に亘る討論について、共同研究者の皆様から賜った玉稿を通し、触れていただければ幸いである。なお、ご多忙の中、共同研究者の皆様には、大変な作業量となってしまった資料のとりまとめや当日のご発表など様々な面でご協力いただき、有意義な討論を行うことができたことを感謝申し上げます。

(山川史子)



会場の様子



コーディネーター（左：若林氏、右：林氏）

○共同研究者（所属は令和6年度研究集会当時のもの）

【九州北部】山崎 頼人（京都府京都文化博物館）

【山口県】田畑 直彦（山口大学埋蔵文化財資料館）

【鳥取県・島根県】濱田 竜彦（鳥取県立青谷かみじち史跡公園）

【近畿北部】加藤 晴彦（与謝野町教育委員会事務局 社会教育課 文化財保護係）

【福井県】深川 義之（鯖江市教育委員会文化課）

【石川県】鈴木 静華（（公財）石川県埋蔵文化財センター）

【富山県】細辻 嘉門（富山市教育委員会 富山市埋蔵文化財センター）

【新潟県】佐藤 慎（妙高市教育委員会）

滝沢 規朗（新潟県観光文化スポーツ部文化課 世界遺産登録推進室）

○令和5年度基調講演「長期変化からみた高地性集落顕在化の条件」講師

令和6年度・討論コーディネーター 若林 邦彦（同志社大学歴史資料館）

* 基調講演の概要は、『石川県埋蔵文化財情報』51号（2024年11月刊行）に掲載。

○研究集会日程

2月13日（木）14：00～16：40

挨拶：土屋宣雄（公財）石川県埋蔵文化財センター所長、趣旨説明：林大智（研究集会担当）

報告：九州北部、山口県、鳥取県・島根県、近畿北部

2月14日（金）9：00～15：00

午前・報告：福井県、石川県、富山県、新潟県

午後・討論：コーディネーター 若林邦彦・林大智、登壇者 共同研究者

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載 （石川県埋蔵 文化財情報）
第1回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落 - 生業の視点で考える	第11号
第5回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通 - 甕・壺・摺鉢を中心に -	第15号
第7回	H18.10.27	縄文時代の装身具 - 漆製品・石製品を中心に -	第17号
第8回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀 - 木製祭祀具を中心として -	第19号
第9回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塩 - その系譜と伝播を探る -	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通 - 肥前磁器から探る -	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標 - その出現と展開 -	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26.10.24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相 - カワラケを中心に -	第39号
第19回	H31.2.23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相 - 城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に -	第41号
第20回	R2.2.26	古代・中世の木製容器	第43号
第21回	R3.2.19	古代の木の器（うつわ）-その2	第45号
第22回	R4.2.24	古墳時代の祭祀～水のマツリを中心として～	第47号
第23回	R5.2.24	古墳時代の水のマツリ	第49号
第24回	R6.2.21・22	高地性集落-日本海沿岸地域を中心として-	第51号
第25回	R7.2.13・14	高地性集落-日本海沿岸地域を中心として-	本号(第53号)

北部九州の高地性集落再考

山崎頼人（京都府京都文化博物館）

はじめに～北部九州における高地性集落の研究史～

令和5年度は、今日的な高地性集落像を描く前に、北部九州における高地性集落の研究史を振り返り、防御集落の展開と受傷人骨を用いて、弥生時代後半期の緊張関係や社会変化について検討した。北部九州では、高地性集落の動向と軍事的緊張関係（倭国乱）を結びつける動きは当初より強くなかった。「高地性集落跡の研究」プロジェクトでは、北部九州の縄文時代晩期から古式土師器時代までの様々な高地性集落が抽出され、福岡県4、長崎県7、佐賀県8、大分県17カ所を数えた（小野1979）。小田富士雄はこれらを縄文時代晩期後半、弥生時代中期、弥生時代後期の3時期に大別し、いずれも瀬戸内・近畿地方で指摘されているような古代国家成立をめぐる戦闘状態を第一義として考えることは難しく、特に大分県の事例は畑作などの生業に関連する可能性を考えた（小田1979）^{（註1）}。

1980年代には、高地性集落として著名な北九州市黒ヶ畑遺跡や唐津市湊中野遺跡の発掘調査が行われた（宇野1982、田島・中島1985）。また、轟次雄は踏査により、北九州市域の高地性集落が響灘沿岸・洞海湾沿岸に分布することを示し、周防灘沿岸の高地性集落との関係について言及した（轟1985）。

「高地性集落」の存在について肯定的に考えられる遺跡の調査例は少なかったが、朝倉市西ノ迫遺跡の調査は具体像を示した点で大きな画期となった。中間研志は、西ノ迫遺跡が弥生時代後期後葉のごく短期間営まれ、比高90mで筑後平野東半部へ見渡しがきく、竪穴建物数軒と環濠・門柱だけの施設で、軍事的緊張時の「砦」を想定し「見張り台」、「のろし台」の機能を考えた（中間1993）。

吉留秀敏は標高37～42m、比高30mの福岡市三苦永浦遺跡J地区を高地性集落として、博多湾・玄界灘をはじめ、周囲の島々を見渡す眺望に着目し、玄界灘沿岸部の山塊を介して、通信網を構成す

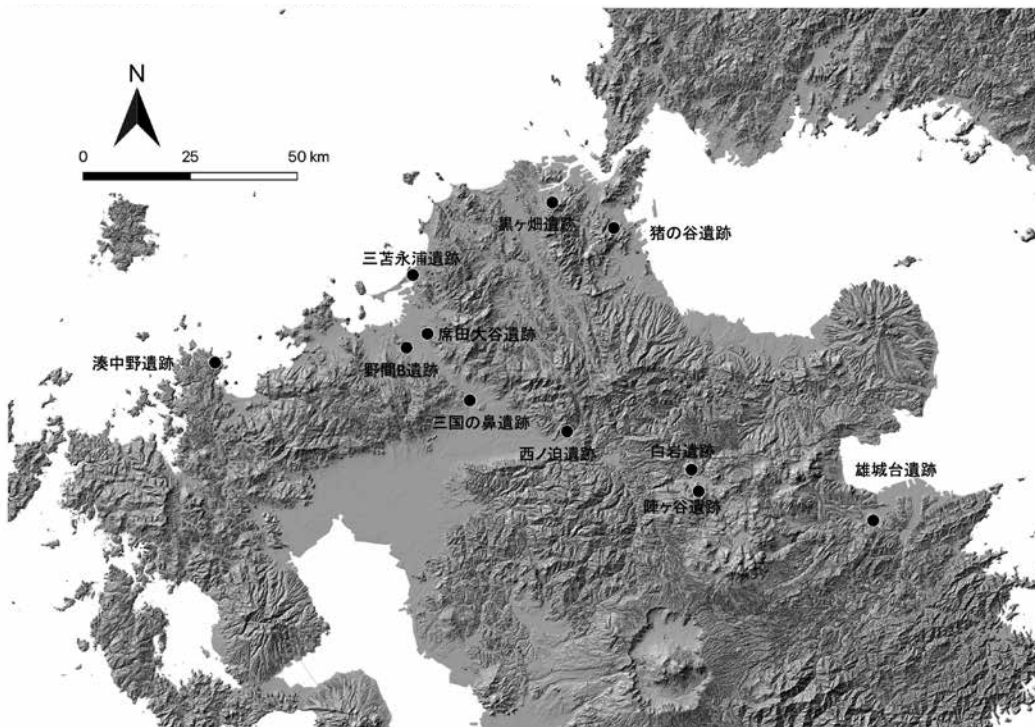


図1 「高地性集落」とかつて言及された主な遺跡

る可能性を考えた（吉留 1996）。その後、弥生時代中期中頃以降に出現する特殊な集落として、「大規模集落」と「高所立地型集落」の2種をあげて、その関係性を説いた。

前田義人は九州の高地性集落を比高 50 m 以上の同時期の標準的集落と異なる高地に営まれ、単一の集団により維持・継続できない集落とした。低地での耕作が可能な比高 50～60 m の A 類、集落の維持に母村の援助が必要な 70～90 m の B 類、自営が不可能な 100 m を超える C 類に分類し、狭義の高地性集落は B 類と C 類で、唐津湾、北九州市域、筑後川上流域に分布する。低地の拠点集落が周辺の集落と一体となって防御システムを構築し、中期後半以降、中枢集落から衛星集落が形成され、その外端に B・C タイプの高地性集落が位置すると考えた（前田 1999）。

小澤佳憲は高地性集落概念が内包する問題を整理し、地域における集落群総体で検討を行うことで、高地性集落の背景や役割について考察した。中期の高地性集落は他の集落と消長が共通しているが、立地が他と隔絶しており、貝塚などの遺構、出土石器などに特殊性が認められることから、背景に生業の特化を想定した。一方、後期の環濠を持つ高地性集落はその構造や規模など同時期の低地集落と明確な差が指摘できず、高地への立地についても明確な特化を示さないことから、高地性集落として他の集落と区別することに否定的な立場を示した（小澤 2006）。

なお、弥生時代の抗争についての研究を牽引した橋口達也は、甕棺墓が衰退する弥生時代後期段階に受傷人骨からのアプローチは難しいが、弥生時代後期後葉（橋口 K V c 式相当）には倭国大乱の時期に該当する高地性集落が出現する。福岡県西ノ迫遺跡、大分県白岩遺跡の存在は当該期の政治的・軍事的緊張関係が東九州、北部九州にも及んでいることを示すものの、北部九州では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては低地における集落が爆発的に増加しており、戦場になった可能性は少ないと集落動向から考えている（橋口 1995）。

1. 環濠の掘削と高地性集落の出現と受傷人骨

受傷人骨の認定は、（中川ほか 2019）を参考に、①武器が骨に嵌入しているもの、②切創・刺創が観察できるもの、それ以外の暴力により加えられた傷である可能性が高いもの。防御痕跡（橈骨骨折、前腕骨折）や鈍器損傷、首を切り取った可能性が高いもの、③武器に骨片が付着するもの、④出土状況から武器が失われた軟部組織・骨に嵌入していたと考えられる（切先片のみが遺っている）ものに限定した。棺内出土の鎌や武器切先例を含めずに上記の「受傷人骨」に限定した場合、これまでとやや異なる傾向を示し、甕棺型式の K III a 式、須玖 II 式古段階（弥生時代中期後半）をピークに増加することがわかる（平 2004）。「受傷人骨」を対象を限定して再検討すると、弥生時代中期中頃から後半代にかけての「受傷人骨」の増加は拠点集落の形成、環濠掘削契機、高所立地型集落と関連付けられる可能性が出てきた（山崎・三津山 2020）。

北部九州の高地性集落は①中期後半（沿岸部中心の動き）、②後期後半（内陸部中心の動き）の時期で出現し、環濠集落は①前期後半～前期末、②中期後半～後期初頭、③後期後半～終末の盛行期がある。これらの集落と受傷人骨の様相がどのように対応するのか、総合的な集落論が期待される。ただ、受傷人骨が集中する地域とそうでない地域も

表 1 受傷人骨数の推移

時期（甕棺型式）	基数	内訳（細分型式）	その他の墓	日常土器との併行関係
～K I 式	2		土壙墓 1	
K II 式	21	K II a 式	中期前半代 土壙墓 2・箱式石棺墓 1	
		K II b 式		須玖 I 式新段階
		K II c 式		須玖 II 式古段階
K III 式	36	K III a 式		須玖 II 式新段階
		K III b 式		須玖 II 式新段階
		K III c 式		須玖 II 式新段階
K IV 式	6	K IV a 式		須玖 II 式新段階～高三瀬式古段階
		K IV b 式		高三瀬式新段階
K V 式	1	K V e 式		

*受傷人骨の集成は橋口2007をもとに追加・修正して算出

*甕棺型式は橋口1979、甕棺と日常土器の併行関係は平2004を参考に作成

あり、「たたかい」の範囲や主体も考えておく必要がある。中期中頃以降の通信機能を持つ高所立地型集落の出現は政治・経済の主体がより広域化した結果とも考えられる（吉留 2004）。

2. 各地域の集落動態

令和6年度は、令和5年度研究集会での協議をふまえ、遺跡動態のなかで高所に立地する集落を検討した。北部九州地域の当該期の集落は膨大な数に及ぶため、日本海沿岸地域と瀬戸内地域に接する豊前・北九州市の集落と古くから弥生時代集落の展開や首長層への階梯の説明に用いられてきた三国丘陵地域の集落動態を比較検討する。時期の分かる遺構が調査された遺跡、特に竪穴住居が検出された遺跡を抽出してその時期変遷・集落動態をみることを心掛けた（散布地等は除く）。

(1) 北九州市域（図2・3）

当地域では縄文時代晩期から弥生時代前期に低地帯に比較的小規模な集落が分散してみられる。弥生時代前期前半には環濠を有する集落も出現する。これまでいわれているような「前期末・中期初頭時期の丘陵上への集落一斉進出」（橋口 1987・小澤 2000）は比較的緩やかに前期後半段階から進行する。グラフからは前期後半以降に段丘や丘陵上へ集落が移動していることが見て取れる（図3）。弥生時代前期までの集落は紫川流域や周防灘沿岸の竹馬川流域等で活発化しており、遠賀川流域やその周辺では顕著な集落活動がみられない。遠賀川東岸と洞海湾、金山川流域の集落活動はやや遅れて前期末・中期初頭以後活発化する。

周防灘沿岸の貫川流域では、かつて「高地性集落」と考えられた猪の谷遺跡が前期後半には出現し、

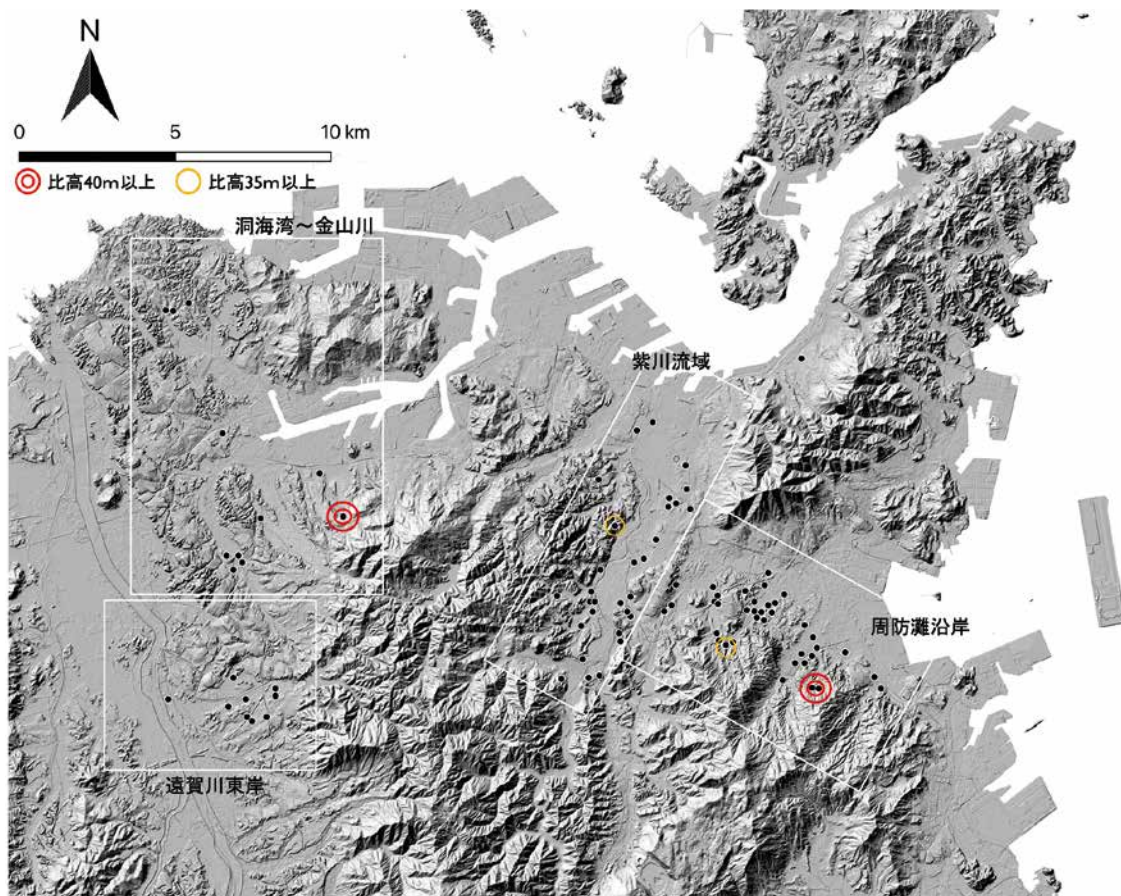


図2 北九州市域の弥生時代遺跡分布

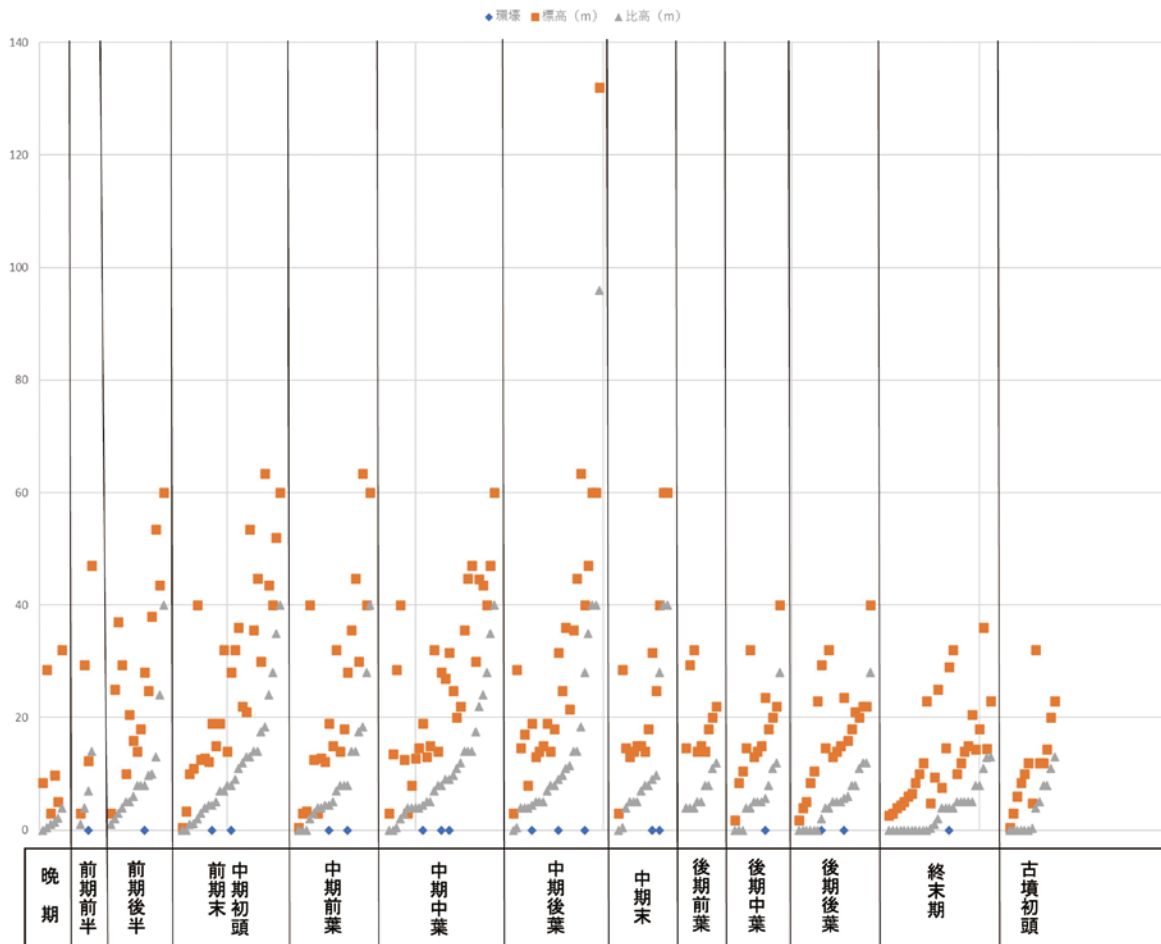


図3 北九州市域の弥生時代遺跡の時期別比高・標高値 (m)

中期末まで継続する。中期後半の11号住居跡から鑄造鉄斧片3点が出土していることが特筆される。集落は中期末に猪の谷東遺跡へ拡大した後に廃絶するが、下流域の長野川流域曾根平野でも後期後半まで遺跡が確認されない。なお、この時期、土石流に伴う災害があったことが、長野尾登遺跡でも確認されている(宇野2005)。

前期末・中期初頭以後、集落が段丘や低丘陵部の比較的高位へ占地し、中期前葉まで小規模な集落が分散傾向にある。中期前葉には、いったん集落数が減少し、中期中葉から後葉には、段丘から低丘陵部で大規模な中心集落が成立し、周辺には新たな小規模集落も多く成立する。中期後葉には、洞海湾付近で高地性集落の黒ヶ畑遺跡が出現し、柱穴と貯蔵穴、貝塚が確認されている。後期前葉(中期末も一部含む)には、多くの集落が衰退して低地の集落も見られなくなる。その後、後期中葉以降は集落の低地志向が顕著に窺え、集落立地が大きく変わる。特に、弥生時代終末期には、低地への進出が顕著で、遺跡数が大幅に増加する。

なお、グラフ化は墓域を除外しているが、比高35m、標高47mの蒲生石棺群は高所に立地する周辺集落の墓域として、前期末以降終末期まで継続する。時代は異なるが、いわゆる「山の古墳群」(菱田2013)と同様の位置づけが可能かと思われる。

北九州市域では、前期後半から進行する高位への集落立地、中期前葉にみられる集落数のやや減少傾向、中期中葉から後葉における拠点集落の成立、後期前葉における集落数の減少、後期中葉以降の顕著な低地への集落進出傾向がうかがえる。高所に立地する集落も、長期継続する遺跡、集落群変

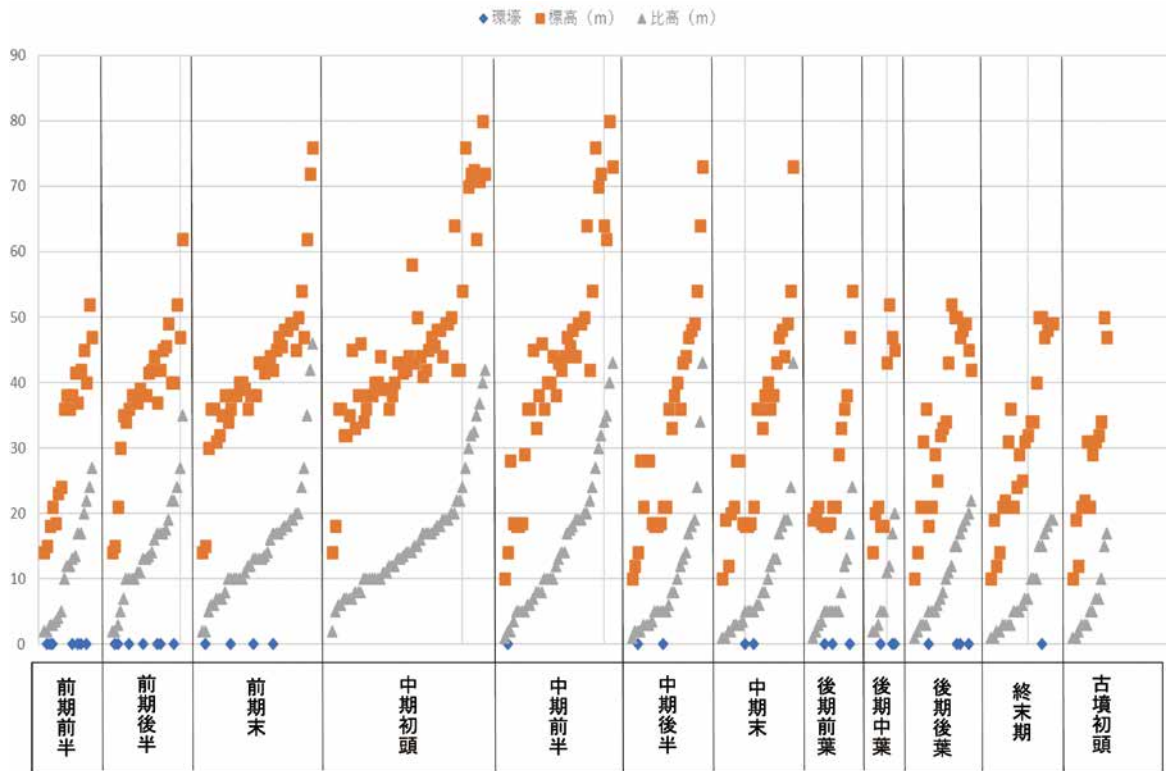


図4 三国丘陵の弥生時代遺跡の時期別比高・標高値 (m)

遷の中で捉えられる遺跡、特徴的な生業を持つ遺跡など多様であることがうかがえた。

(2) 三国丘陵 (図4・5)

三国丘陵では、古くから丘陵上の居住域と周辺の谷部には水田といった集落景観が想定される (西谷 1971)。橋口達也は福岡平野や三国丘陵の集落動態をもとに、板付Ⅰ式までに低地の可耕地が飽和状態となり、板付Ⅱ式以降、狭隘な谷水田を控えた低丘陵部へも集落が進出せざるを得ない状況が生まれたと考えた (橋口 1987)。中期以降の低地への集落移動は、自然条件の好転によって低地の可耕地がさらに拡大したと想定した。その後の研究でも、「低地環境の悪化と爆発的な人口増加の相互作用・前期社会の揺動により、前期末～中期初頭に一斉に集落が丘陵上へ進出するものの、丘陵奥地では谷水田の開発のみでは集落経営が立ちゆかず、低地域が安定すると同時に、より広範な可耕地を求めて進出したこの地域における大規模集落は基本的に広い居住域・可耕地面積を持つ低地域への進出を待って初めて成立する (小郡・大板井遺跡群)」と追認された (小澤 2002)。また、三国丘陵で見られる環濠は全てが前期後半 (片岡氏は前期Ⅱ a 期 (板付Ⅱ a 式) とする) に掘削され、前期後半に爆発的に集落が増加するとの見解が席卷していたが (橋口 1987、片岡 2003 ほか)、筆者らは、横隈山遺跡 7 地点、横隈山遺跡 5 地点、三沢北中尾 1 地点の 3 環濠の時期差を指摘し、集落の変遷に伴い順を追って環濠が掘削される状況を明らかにした。これにより、当地域における環濠掘削は一時的な社会緊張関係を反映したものではないことも理解できるようになった (山崎・杉本・井上 2005)。弥生時代前期後半に爆発的に集落が増加するといった従来の三国丘陵遺跡群の評価は、近年の調査を基にした検討とは乖離しつつある。当地域において、弥生文化は水田稲作を付近で行える段丘裾に着床し、順を追って丘陵上へと進出、集落を選地していく様子が窺える。

当地域では、縄文晩期の集落様相がはっきりしていないが、力武遺跡群や津古土取遺跡の低地部分で遺物の出土がみられることから、縄文晩期の集落は、丘陵上ではなく低地帯に想定される。

グラフでは、比高 10 m 未満（標高 15～24 m）の段丘上立地集落と比高 10 m 以上 30 m 未満（標高 30～49 m）の低丘陵立地集落、比高 30 m 以上（標高 50～80 m）の高丘陵集落に大きく分かれる（図 4）。

三国丘陵地域では前期前半段階より丘陵上への進出がみられ、比高 30 m・標高 60 m 以上の、より高位の丘陵への進出は前期後半以降中期初頭から中期前半をピークに進んでいる。高位の丘陵に立地する集落は中期末を最後に見られなくなる（図 4）。これについては、森林資源獲得を目的とした丘陵部の開発と関係した集落変遷と考えている（図 5）。

環濠については、前期前半から前期末にかけて段丘上から低丘陵部でみられ、居住域を囲む環濠は段丘や自然堤防上の低地帯にあり、丘陵部では貯蔵穴群を囲む環濠が多い傾向にある。中期初頭から中期前葉の環濠空白期において、中期中頃以降段丘部の集落が大型化し、環濠を持つようになる。後期中葉以降は丘陵部でも環濠を持つ集落がみられる。

3. 集落動態と生業～開発と森林資源の獲得～

森貴教は弥生時代前期末から中期初頭に、集落が沖積地から丘陵上へ進出する時期（小澤 2000）に活発な伐採活動を想定し、今山系石斧が同時に極めて大量に必要となり、それらの開発に伴い、今山系石斧の大量供給・大量消費が認められることを示した（森 2011）。この時期、木工具としての鑄造鉄器片が内陸部へ集中する現象も指摘されている（比嘉 2011）。

筆者は三国丘陵地域で、「集落群」^(註2) が丘陵に進出し、次の段階ではその集落を放棄し、より高位へと移動を続ける現象を明らかにした（山崎ほか 2005）。この現象を理解するために、三国丘陵の特徴でもある今山系石斧や鑄造鉄器片の集中からうかがえる森林の伐採活動や木工活動に着目し、考察したことがある（山崎 2020）。集落変遷では、段丘～丘陵先端部の開発（力武遺跡・津古土取遺跡）から丘陵部の開発（三沢北中尾遺跡・一ノ口遺跡）へ移行する段階があり、森林資源に近い集落に高機能で耐久性のある今山系石斧が集中する現象が看取できた（図 5）。

これまで三国丘陵では、一ノ口遺跡が中心的に伐採石斧の入手と分配を行うモデルが提示されていたが（柏原 2002）、新しい発掘調査成果や詳細な時期変遷の検討により、異なるモデルが考えられた（山崎 2020）。すなわち、三沢北中尾遺跡の集落群が先行して三国丘陵の森林開発を主導し、そこから派生して、さらに森林資源獲得に特化した（させた）集団が一ノ口遺跡の集落群で、三国丘陵の集落群全体が質の高い今山系石斧を森林資源に近い好立地の一ノ口遺跡周辺に集中させている様相がうか

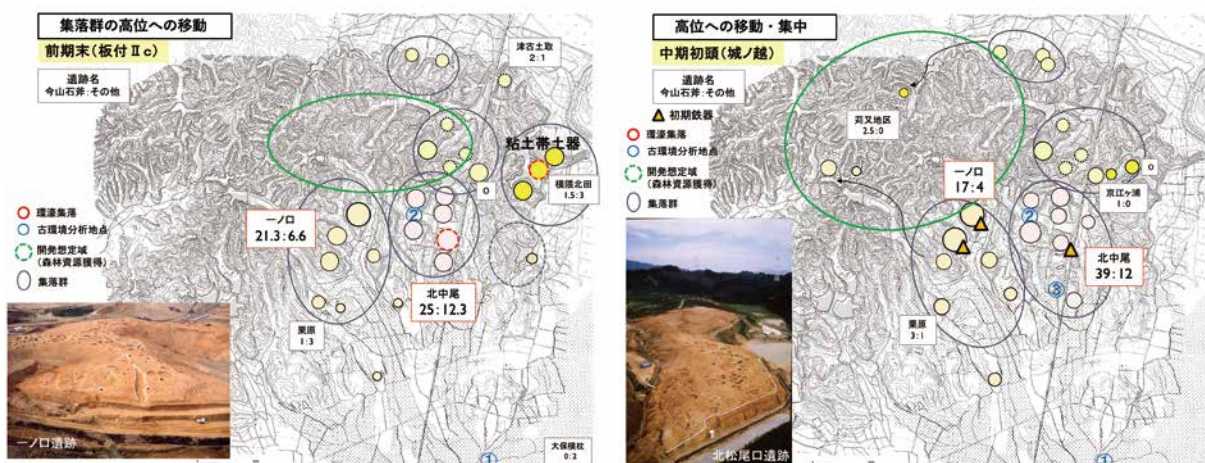


図 5 三国丘陵集落群と今山系伐採斧の保有率（山崎 2020 から前期末・中期初頭段階を抜粋）

がえる。一ノ口遺跡は加工斧の割合も高く、伐採から加工までの一連の活動を担う集団であった。伐採石斧の総量は三沢北中尾遺跡の保有率が高く、次いで一ノ口遺跡が高いが、一ノ口遺跡では今山系石斧の割合が最も高く、三沢北中尾遺跡を上回っている（図5）。

剥片石器石材は各遺跡で普遍的に確認され、石材の入手・製作が規模の大小はあるものの、それぞれの集落で行われている。それとは異なり、今山系石斧の入手には偏りがあり、三国丘陵でも山よりの集落群が偏って保有する。地域構造では、三沢北中尾遺跡も含めた一ノ口遺跡周辺が、森林開発を主に担っていた。大地域構造では、今山系石斧の入手にあたって北部九州の地域間ネットワークの整備とも関わっている。伐採石斧の流通は土地開発や木器製作ともかかわる事象で、剥片石器とは性質的に大きく異なる。特に今山系石斧の流通は質の高い石斧の流通であり、その集中には平野では入手できない大径木獲得の要請など外部からのインパクトも想定できる。

三国丘陵は、丘陵立地集落の動態と生業としての森林資源獲得とが相関する良好な事例である。

おわりに

北部九州では、弥生時代早期から前期初頭には、小規模な水田稲作が可能な微高地や水田可耕地周辺の段丘先端に集落が立地する。その後、北部九州弥生時代集落の特徴とされてきた前期末・中期初頭の「爆発的な人口増加」による「一斉的丘陵への進出」とまでは言えないが、前期後半段階から比較的時間をかけて段丘・丘陵上への集落進出が進んでいる。丘陵上への進出は開発・森林資源獲得との関係でも理解ができるだろう。九州では古くから畑作などの生業と関連づけて、高所に立地する集落が位置付けられもした（小田 1979）。地域特有の地形環境も大きく影響する。

弥生時代中期前葉には、集落数の減少があり、中期中葉から後葉には、段丘上における拠点集落の成立の動きがみられた。再び、後期前葉における集落数の減少が生じ、後期中葉以降には、顕著な低地への進出がみられた。それぞれの地域差が存在するものの、大きくは前期後半から中期にかけての丘陵進出傾向と後期における低地への志向がみられた。

集落動態から検討すると、九州地域ではこれまで言われるように、高地性集落も標準的な立地・変遷で考えられるものが多い。北部九州では高位と低位に立地が明確に分かれるのではなく、全体傾向として高位変遷、低位変遷がうかがえる（図3・4）。気候や河川氾濫との関係も大きいと考えられる。一方で、中期後半の博多湾沿岸地域では周囲への眺望が良く、通信機能が伺える焼土坑などを持つ集落も出現しているので、これらは社会の変化や社会基盤整備とも関係する集落立地の可能性が伺える。北部九州では、「受傷人骨」が示す「たたかい」や緊張関係が生じていることは確かであるが、それらと「高地性集落」が端的には接続しないように感じられ、難しい問題である。

「高地性集落」の研究は多様な側面で理解することができる。本研究会のように、地域特性を示す研究が行われ、それが西日本規模や列島規模で共通することなのかという議論が肝要かと思う。

註

（註1）高地性集落研究に先鞭をつけた小野忠熙も、①見張台説、②防砦説、防御施設を備えた農耕村落説、④狩猟村落説、⑤兼業村落説、⑥畑作村落説 など多様な性格を想定している（小野 1959）。

（註2）三国丘陵では、弥生時代の初めに丘陵最南端の段丘裾に着床した集落が谷筋に沿って丘陵上に進出し、独立丘陵上に立地する集落遺跡が一定のまとまりを持ちつつ変遷する（山崎ほか 2005、山崎 2010）。この一連の変遷が追える集落のまとまりを「集落群」と呼称する。

【参考文献】

- 宇野慎敏 1982『黒ヶ畑遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 宇野慎敏 2005『猪の谷遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第330集
- 小田富士雄 1979「北部九州の弥生系高地性集落」『高地性集落跡の研究 資料編』学生社
- 小野忠熙 1959「瀬戸内地方における弥生式高地性村落とその機能」『考古学研究』第6巻2
- 小野忠熙 1979『高地性集落跡の研究 資料編』学生社
- 小澤佳憲 2000「集落動態からみた弥生時代前半期の社会」『古文化談叢』第45集
- 小澤佳憲 2002「弥生時代における地域集団の形成」『究班Ⅱ』埋蔵文化財研究会
- 小澤佳憲 2006「北部九州の高地性集落—集落動態からの検討—」『古代文化』58(2)
- 柏原孝俊 2002「北部九州における弥生時代磨製石斧の一樣相—集落出土の「今山系石斧」とその供給形態—」『環瀬戸内の考古学—平井勝氏追悼論文集—』上 古代吉備研究会
- 片岡宏二 2003「水田稲作農耕の定着と展開—三国丘陵における弥生時代前期社会の諸問題—」『三沢北中尾遺跡1地点 環濠編』小郡市教育委員会
- 田島龍太・中島直幸 1985『湊中野遺跡』唐津市文化財調査報告書第14集
- 轟次雄 1985「高地性集落」『北九州市史 先史・原史編』
- 中川二美・中尾央・田村光平・山口雄治・松本直子・松木武彦 2019「弥生時代中期における戦争—人骨と人口動態の関係から—」『情報考古学』24
- 中間研志 1993「西ノ迫遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』25 福岡県教育委員会
- 西谷正 1971「結語」『福岡県三沢所在遺跡の予備調査概要』福岡県教育委員会
- 橋口達也 1987「集落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史』中 岡崎敬先生退官記念事業会
- 橋口達也 1995「弥生時代の戦い」『考古学研究』第42巻1
- 橋口達也 2007『弥生時代の戦い—戦いの実態と権力機構の生成—』雄山閣
- 比嘉えりか 2011「鑄造鉄斧片の分布からみた弥生時代の日韓交渉」『七隈史学』第13号
- 菱田哲郎 2013「7世紀における地域社会の変容—古墳研究と集落研究の接続をめざして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集
- 平 美典 2004「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係—発表要旨集』第53回埋蔵文化財研究集会
- 森 貴教 2011「弥生時代北部九州における両刃石斧の消費形態—今山系石斧を中心として—」『考古学研究』57巻4号
- 前田義人 1999「北部九州における高地性集落—研究の現状と課題—」『古代文化』51(7)
- 山崎頼人 2010「環濠と集団—筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生前期環濠の諸問題—」『古文化談叢』第65集(2)
- 山崎頼人 2020「今山系石斧の流通・保有率からみた地域構造」『遺跡学研究的地平—吉留英敏さん追悼論文集—』同刊行会
- 山崎頼人・杉本岳史・井上愛子 2005「筑後北部三国丘陵における弥生文化の受容と展開—三国丘陵南東部遺跡群をケーススタディとして—」『古文化談叢』第54号
- 山崎頼人・三津山靖也 2020「九州地方における防御集落の展開—弥生集落・社会からみた「たたかい」の実像—」『古代武器研究会』16 古代武器研究会・山口大学考古学研究室
- 吉留秀敏 1996「三苦永浦遺跡の弥生時代資料」『三苦永浦遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第476集
- 吉留秀敏 2004「集落・居館・都市的遺跡と生活道具—九州—」『考古資料大観』10 小学館

山口県における日本海沿岸地域の高地性集落

田畑直彦（山口大学埋蔵文化財資料館）

1 はじめに

本報告では、高地性集落を含めた弥生時代の集落遺跡について検討を行う。現状の遺跡の分布から、24の小地域を設定した。暦年代を踏まえた時代区分は下記の9段階である。1. 縄文時代晩期前半（紀元前13世紀後半～紀元前10世紀前半）、2. 縄文時代晩期後半（紀元前10世紀後半～紀元前8世紀）、3. 弥生時代前期前葉～中葉（紀元前7世紀～紀元前5世紀第1四半期）、4. 弥生時代前期後葉～中期前葉1（紀元前5世紀第2四半期～紀元前4世紀）、5. 弥生時代中期前葉2～中期中葉（紀元前3世紀～紀元前1世紀第1四半期）、6. 弥生時代中期後葉～中期末（紀元前1世紀第2四半期～紀元1世紀第1四半期）、7. 弥生時代後期前葉～中葉（紀元1世紀第2四半期～紀元2世紀第1四半期）、8. 弥生時代後期後葉～終末期（紀元2世紀第2四半期～紀元3世紀第2四半期）、9. 古墳時代前期前葉（紀元3世紀第3四半期～紀元4世紀第1四半期）。暦年代は国立歴史民俗博物館による北部九州のデータ等を援用した仮定値であり、併行関係を踏まえてさらに詳細に検討する必要がある。また、詳細な時期比定が困難な遺跡もあるため、今後の調査を踏まえ、随時改訂することが求められる。

集落は、遺構・遺物の分布に基づき直径200m前後の範囲を単位としたため、遺跡とは一致せず、遺跡内で複数の単位が認められる場合や複数の遺跡にまたがる場合がある。また、範囲認定が困難な場合は上記より広い範囲を単位とした。今回の対象数は105である。

2 集落の動向

山口県域では、他の時代との比較等から比高20m以上の集落を高地性集落として捉えている（田畑2024）。ただし、雨乞台遺跡については、標高230～280m、比高約220～270mを測るものの、標高250m以下は緩傾斜の台地、さらに丘陵斜面と続く特異な地形で、他と様相が異なることから高地性集落には含めていない。また、比高20m程度の古墳の墳丘に土器が混入している事例（仁馬山古墳、上ヶ原古墳）等も除外した。山口県の高地性集落はA：比高20～69m、B：比高70～99m、C：比高100m以上に分類している。今回はAを比高20～49m、50～69mに細分する。

集落数を見ると、縄文時代晩期前半から弥生時代前期中葉にかけては漸増し、弥生時代前期後葉～中期前葉1にかけて急増する。標高300m前後の山口市阿東地域にも分布が認められるほか、高地性集落が出現する。人口増加と可耕地が限定されていたことが出現要因と考えられる。中期前葉2～中期中葉にかけては集落数が増加するが、年単位指数は低下する。また平野や盆地の中央部に立地する集落がなくなり、縁辺部に移動するとともに高地性集落数が増加し、比率も約11%と最も高くなる。比高約170mを測る城山遺跡もこの段階に出現する。こうした状況から、低地が不安定な状況になったため、集落や生産域を平野や盆地の縁辺部、丘陵や台地上に求めたことや、上記に伴い地域社会内で緊張が生じたことが推測できる。中期後半～中期末は集落数が減少するが、年単位指数は上昇する。後期前葉～後期中葉は集落数が減少し、年単位指数も低下する。この間、平野や盆地の中央部には再び集落がみられるようになり、高地性集落は減少傾向にある。後期後葉～終末期は集落数が急増する。比高19m以下の集落の増加が顕著だが、高地性集落は減少する。古墳時代前期前葉になると高地性集落は消滅するが、これには集落の小規模分散化が関連すると考えている（田畑2024）。集落数は減少するが年単位指数は上昇する。地形の比率をみると、縄文時代晩期前半から弥生時代中期末にかけ

て平野の比率が低下し、台地・丘陵等の比率が上昇する。後期前～中葉に平野の比率がやや上昇するが、その後は再び低下し、台地・丘陵等の比率が上昇する。なお、長期にわたって継続する遺跡にも注目したい。これらの遺跡は下関市伊倉遺跡（延行条里遺跡 伊倉H・B・G地区）のように、前面に平野、背後に丘陵地（標高100～200m）を擁している。遺構を伴わず遺物包含層出土土器により判断している事例が多く、詳細に不明な点が多いが、低地が不安定な状況下においても畠作を行い、堅果類、動物資源などの多様な食料資源を確保できる環境にあったと考えられる。

3 高地性集落について

高地性集落は前期後葉～中期前葉1に出現し、中期前葉2～中期中葉に増加してピークを迎えるが、その後は減少傾向にあることから、後述する比高50m以上の集落を除くと、中期前葉2～中期中葉に生じた環境変動に帰因するものが主体と考える。また、いずれも小規模で環濠は確認されておらず、遺構・遺物に特異な点はない。比高20～30mの集落では比高20m以下でも遺構が確認されており、高所へ向かう土地利用の拡大が看取できる。一方、比高50m以上の集落では遺構・遺物が低所に広がる状況は確認されていない。また、中世城館（城山遺跡、天長山遺跡）、近世城郭（勝山御殿跡）とも重複した例もあり、眺望に優れている。

このうち、萩市大井に所在する天長山遺跡について触れておきたい。同遺跡は中期古墳、中世城館と重複しており、日本海と集落（宮の馬場遺跡）がある大井の低地を見通すことができる。この立地条件が高地性集落、中期古墳、中世城館が設けられた要因であろう。天長山遺跡では弥生時代終末期とみられる竪穴住居跡が2棟検出され、山陰系土器が出土している。当該期の下関市域では概ね豊前と共通した北部九州系土器が分布しており、長門市～萩市付近で両者の境界があると推測される。一方、山陰地方では後期後葉～終末期にかけて北部九州からの搬入品と見られる土器が多数出土している（中川2023）。また、近年、土井ヶ浜遺跡では遺物包含層から日本海沿岸地域でも特筆される鉄製品（鉄鎌、素環頭刀子、鉄斧、大形棒状鉄器等）が出土していたことが判明した（村上2023）。これらの鉄製品が出土したのは、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺物包含層である。当該期の土井ヶ浜遺跡では埋葬は行われておらず、祭祀の場として利用されていたとされる（松下・小林編2014）。上記の遺物包含層で主体となるのは弥生時代終末期の土器であり、鉄製品も弥生時代終末期のものが主体であったとみられる。以上から、弥生時代終末期の日本海沿岸地域における北部九州系土器や鉄製品の流通において、山口県の日本海沿岸地域に分布する集落の関与が想定できよう。その意味で土器分布圏の境界域に位置する天長山遺跡は、物資の流通・交通を監視する場であった可能性を指摘したい。

4 研究集会を終えて

今回の研究集会は、日本海沿岸地域で縄文時代晩期から古墳時代前期までの集落遺跡を対象として、標高・比高を検討するという、実に画期的な試みであったと思う。筆者は科研費（20K01074）で山口県の集落遺跡を集成して同様な検討を行っていたので、今回研究集会に参加でき、時宜にかなう機会を得たことを関係各位に改めて御礼申し上げたい。

上記で述べたように、山口県では比高20m以上の集落を高地性集落としているが、他にも、比高20～30m付近で区分される地域が複数みられたことは大きな成果であろう。しかし、全体の動向を詳細に評価するには、土器編年の併行関係と実年代に則した検討が必要である。

いっぽうで、今回の研究集会では、かつて松木武彦氏が述べたように（松木2011）、高地性集落が時期を追って西から東へ展開していくことが明確に示されたことも注目される。この状況をどう評価

するのが大きな課題であろう。筆者は、その一因として、近畿地方以東における弥生時代後期後葉～終末期の高地性集落の出現背景には、臨海平野の堆積過程（高橋 2003）が関連しており、とりわけ大規模な平野を有する地域で顕著であったと推測している。高橋氏によると、当該時期は瀬戸内海沿岸の臨海平野で後背湿地の埋積（平野部の平坦化）が進行するほか、平野部の拡大が認められる時期である。河内平野南西部では河川氾濫が起きていたとされ（大庭 2022）、詳細は今後の発掘調査による検証が必要であるが、若林氏（若林 2022）によると、大阪平野における当該期の集落遺構検出地点数・指数は増加しており、全体的な動向としては、平野部の平坦化や拡大に伴う可耕地の拡大を認めてよいのではないだろうか。また、石川県でも、本書の鈴木氏報告によると当該時期の集落数は増加しており、日本海沿岸地域でも近似した状況が想定される。つまり、平野部の平坦化・拡大による可耕地の拡大に伴い、人口が増加し、集団間に緊張関係が生じたことが、当該期の近畿～北陸で高地性集落が出現した一因となった可能性を指摘したい。

なお、紙幅の都合により、高地性集落を除く集落遺跡については、参考文献と研究集会時の資料（田畑 2025）に掲載した位置図、遺跡消長表を割愛させていただいた。ご寛恕願いたい。

本報告は科研費（20K01074）の研究成果を含む。

主要参考文献

- 大庭重信 2022『弥生・古墳時代の農耕と集団構造』同成社
- 高橋 学 2003『平野の環境考古学』古今書院
- 田畑直彦 2022「土井ヶ浜遺跡と周辺の集落遺跡の謎」『第7回古代史シンポジウム in しものせき 資料集』古代史シンポジウム実行委員会 2-11 頁
- 田畑直彦 2024「(8) 弥生時代高地性集落研究の原点を見直す」『一般社団法人 日本考古学協会第90回研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会 27 頁
- 田畑直彦 2025「山口県における日本海沿岸地域の高地性集落」『令和6年度 環日本海文化交流史調査研究集会資料 高地性集落-日本海沿岸地域を中心として-』公益財団法人石川県埋蔵文化財センター 25-48 頁
- 中川 寧 2023「北部九州と山陰の交流-土器と漆塗り木製品-」『古墳出現期土器研究』第10号 古墳出現期土器研究会 71-90 頁
- 松木武彦 2011「高地性集落と弥生中～後期の社会変化」『弥生時代の考古学3 多様化する弥生文化』同成社 147-159 頁
- 松下孝幸・小林善也編 2014『土井ヶ浜遺跡第1次～第12次発掘調査報告書』下関市文化財調査報告書35 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 第1～第3分冊
- 村上恭通 2023「日本海沿岸地域における土井ヶ浜遺跡出土鉄製品の意義」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第18号 1-6 頁
- 若林邦彦 2022「大阪平野における弥生時代以後の集落移動頻度の検証-弥生時代高地性集落理解の前提として-」『古代文化』第74巻第2号 古代学協会 76-82 頁

遺跡文献（高地性集落関連）

- 向日山・東原遺跡群・戸川城跡
- 富士埜勇編 1987『向日山遺跡』豊浦町教育委員会 中国電力宇部発電所
- 村岡和雄編 1987『向日山遺跡』豊浦町教育委員会 宗教法人関一心不動尊会
- 城山（金怡城）
- 富士埜勇編 1986『城山遺跡』豊浦町教育委員会
- 湯町（宝蔵寺）
- 富士埜勇 1992『豊浦町史三 考古編』豊浦町史編纂委員会

- 宝川昭男編 1993『宝蔵寺遺跡』豊浦町教育委員会
- 河田 聡編 1998『湯町遺跡群Ⅰ』豊浦町教育委員会
- 蓋井島下り
- 中原周一編 2004『蓋井島下り遺跡』下関市埋蔵文化財調査報告書 36 下関市教育委員会
形山
- 吉村次郎 1965「弥生文化」『下関市史 原史－中世』下関市市史編修委員会 123-177 頁
- 勝山御殿跡
- 中原周一編 2010『勝山御殿跡』下関市文化財調査報告書 29 下関市教育委員会
- 雨乞台（参考）
- 小野忠熙・河本芳久・中野一人・林芙美夫・山本一朗ほか 1979「2 中国・四国地方 山口県域」『高地性集落跡の研究 資料篇』
学生社 149-207 頁
- 湯免 C（周田川山）
- 小野忠熙・河本芳久・中野一人・林芙美夫・山本一朗ほか 1979「2 中国・四国地方 山口県域」『高地性集落跡の研究 資料篇』
学生社 149-207 頁
- 天長山・天長山城跡
- 谷口哲一編 1992『天長山城跡』山口県埋蔵文化財調査報告第 146 集（財）山口県教育財団 山口県教育委員会

図・表出典

以下の図を除く出典の記載のない図表は各文献等に基づき田畑が作成した。図 1 ②集落数年単位指数：若林 2022 を参考に作成。図 2：基盤地図情報（数値標高モデル 10 m メッシュ）（国土地理院）(<https://fgd.gsi.go.jp/download/mapGis.php?tab=dem>)、国土数値情報（行政区域データ 平成 7 年）（国土交通省）(https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-N03-v2_3.html#prefecture35)、国土数値情報（河川データ）（国土交通省）(<https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/jpgis/datalist/KsjTmplt-W05.html#prefecture35>) を QGIS で加工して作成。

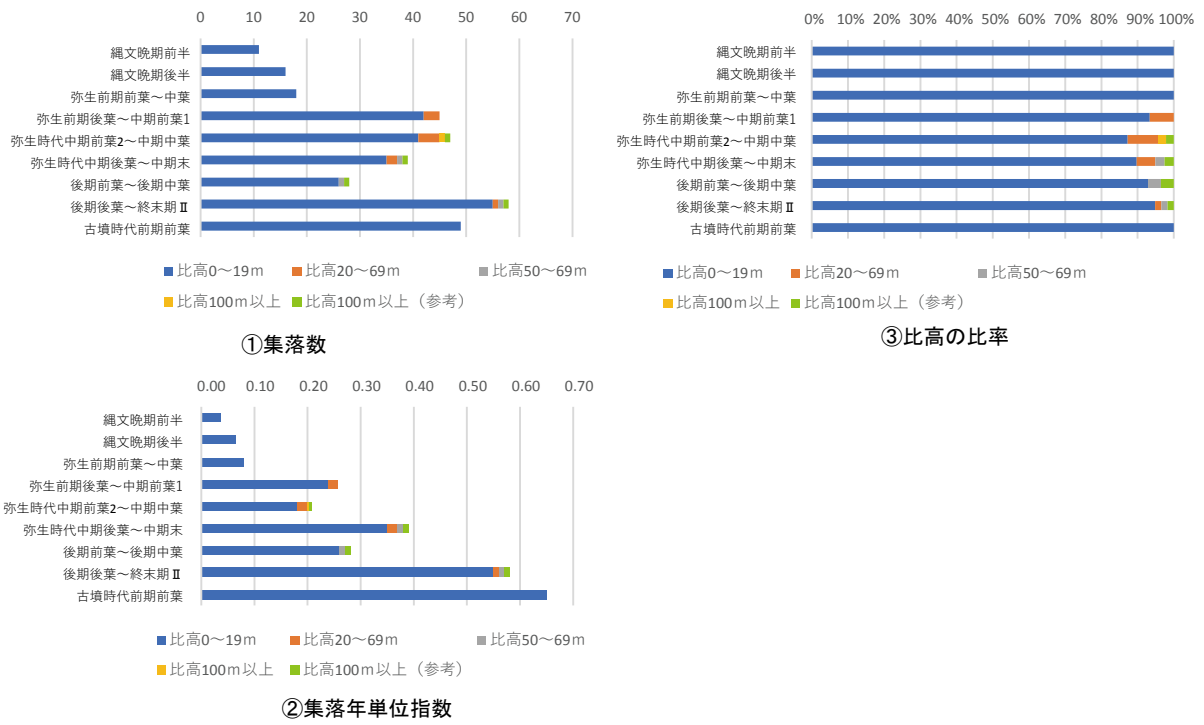


図1 各時期の集落データ (検討中)

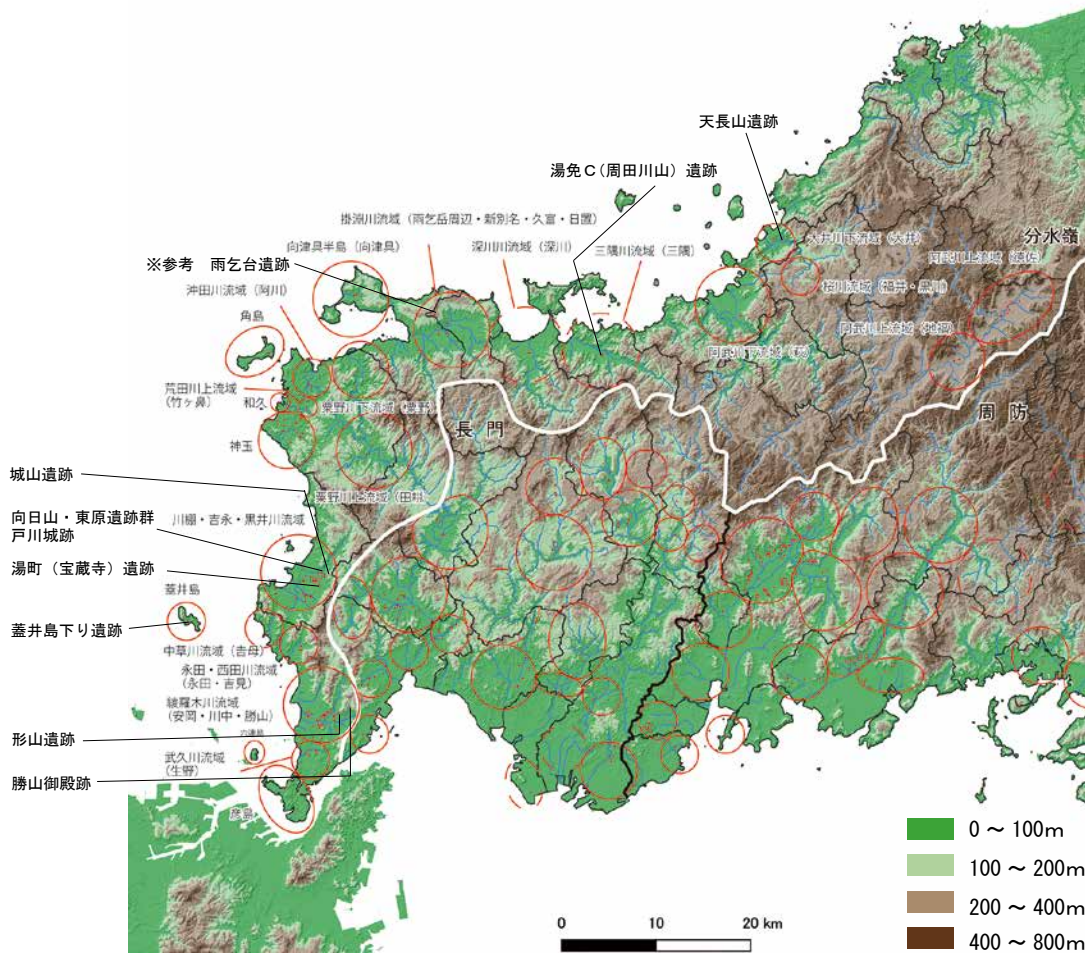


図2 地域区分

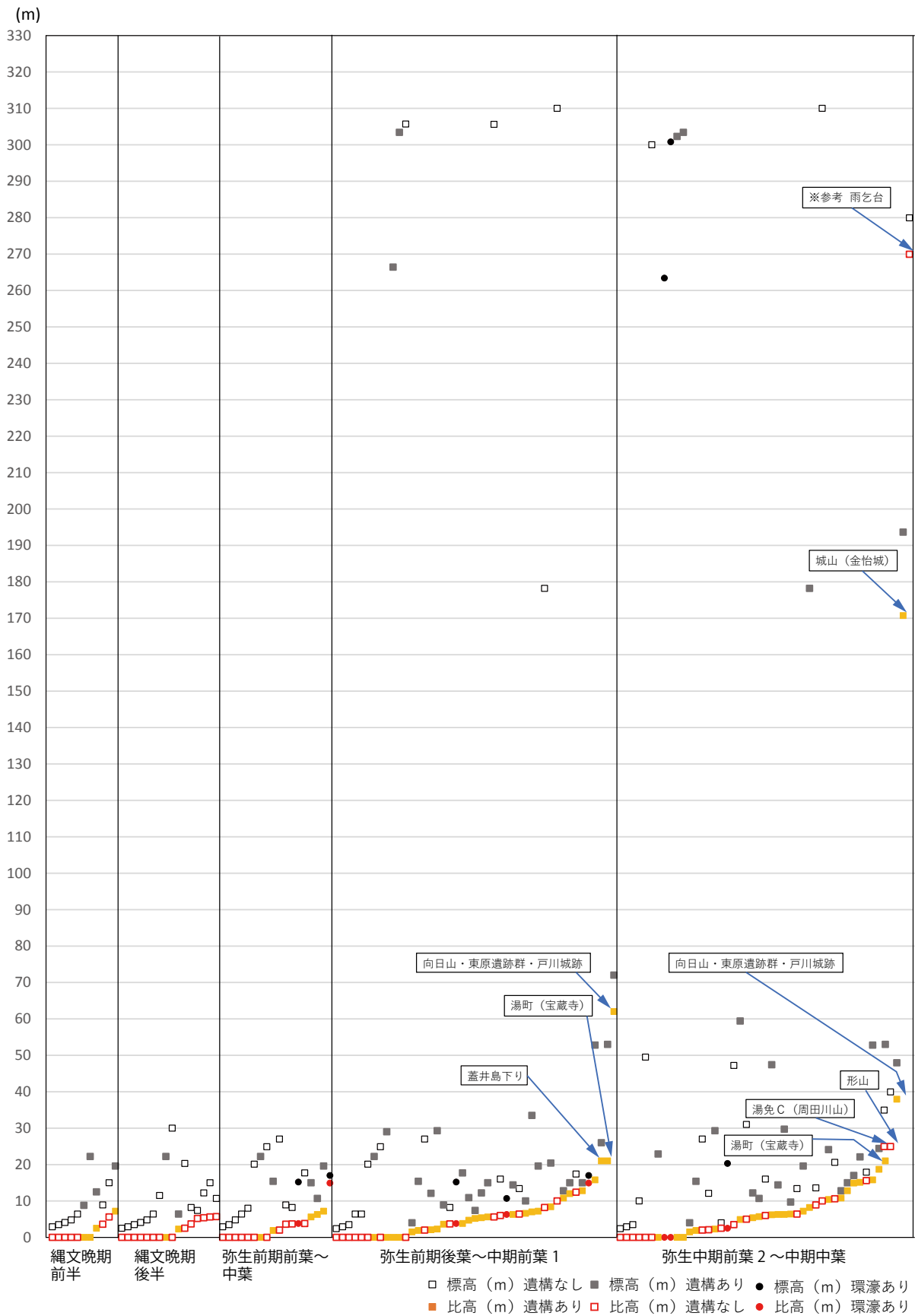


図 3-1 山口県の日本海沿岸地域における集落遺跡の標高と比高 1

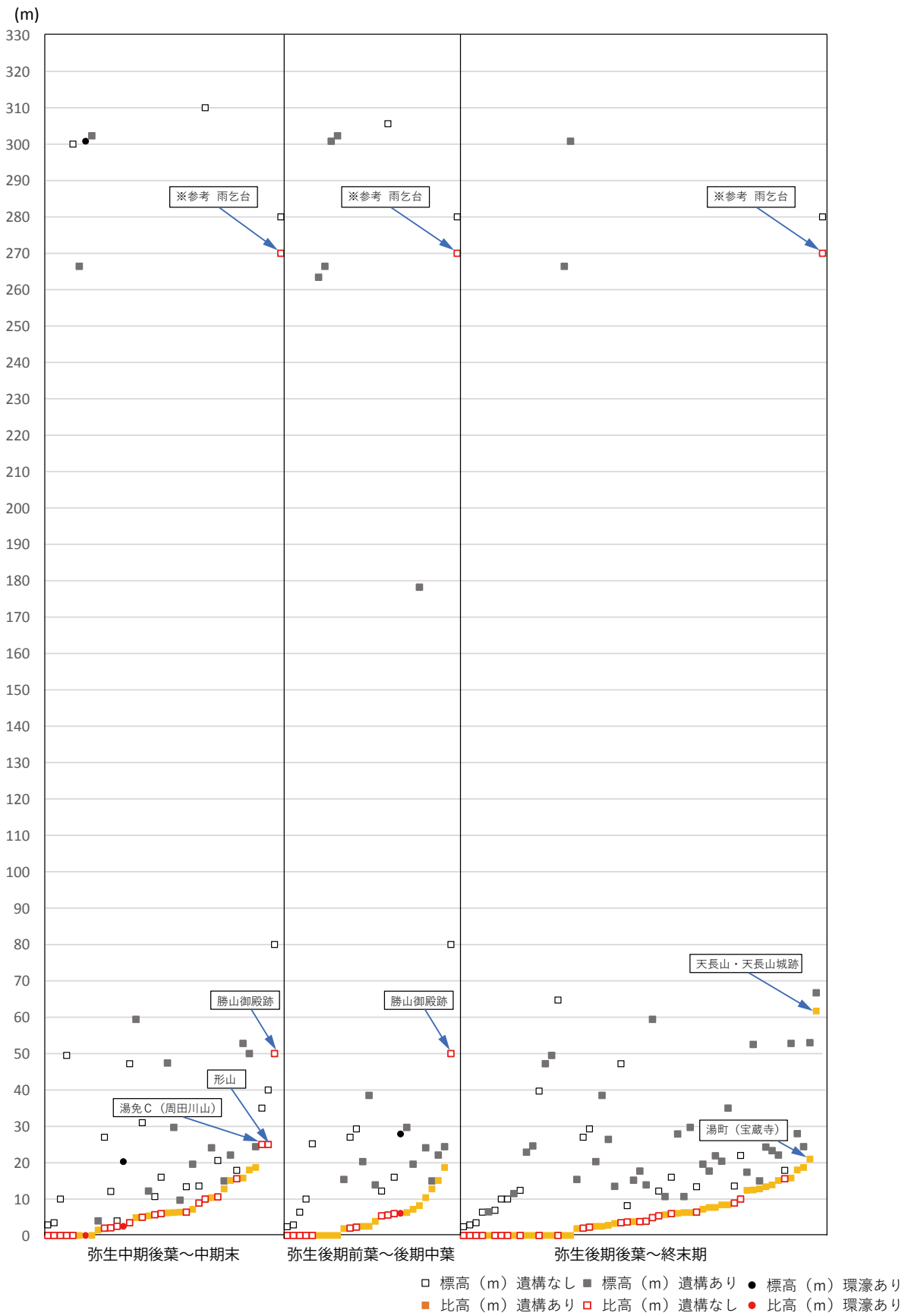


図 3-2 山口県の日本海沿岸地域における集落遺跡の標高と比高 2



□ 標高 (m) 遺構なし ■ 標高 (m) 遺構あり ● 標高 (m) 測線あり
 ■ 比高 (m) 遺構あり □ 比高 (m) 遺構なし ● 比高 (m) 測線あり

図3-3 山口県の日本海沿岸地域における集落遺跡の標高と比高

表1 高地性集落・関連遺跡一覧表

遺跡名	所在地	時期	立地	標高	比高	遺構	遺物	墓域の様相	特記事項
向日山・東原遺跡群・戸川城跡	下関市	前期後半～中期中葉・終末期	丘陵地	28～72.8	18～62.8	住居、貯蔵穴、土壘（一部の土壘には焼土を含む）	弥生土器、石斧、扁平片刃石斧、石砲丁	時期不明箱式石棺墓（第II地区）	中世城館（第II地区）
城山（金怡城）	下関市	中期前葉2	小起伏山地	193.5～193.7	170.6～170.8	住居、貯蔵穴	弥生土器、石斧、石剣、砥石		中世城館
湯町（宝蔵寺）	下関市	中期前葉～中期末・終末期後半	丘陵地	48～53	13.2～21	住居、貯蔵穴、土壘（一部の土壘には焼土を含む）	弥生土器、石斧、石砲丁、石鏃、砥石、剥片、管玉、動物遺体		
蓋井島下り	下関市	前期後半～中期前葉1か	丘陵地	24.9～26	19.9～21		弥生土器		
形山	下関市	中期中葉～中期末	山麓地	20～40	5～25		弥生土器		
勝山御殿跡	下関市	中期末～後期前葉前半	中起伏山地	80	50		弥生土器、石砲丁		包含層上面で遺構も確認できたと思われるが、詳細不明。近世城郭（幕末）
雨乞台	長門市	中期後葉～終末期か	小起伏火山地	230～280	220～270		弥生土器		参考（高地性集落には含まれない）
湯免C（周田川山）	長門市	中期中葉～中期末	丘陵地	35	25		弥生土器		古墳・中世城館
天長山・天長山城跡	萩市	終末期	丘陵地	65.7～66.7	60.7～61.7	住居	弥生土器		

山陰地方にみる弥生時代遺跡の動態

－大山北西麓における遺跡の増減と立地傾向－

濱田竜彦（鳥取県地域社会振興部文化財局）

1 はじめに

山陰地方の大山北西麓（米子平野周辺）では、弥生時代遺跡の増減と立地傾向に気候変動との関りもうかがわれる（濱田 2024）。以下、弥生時代後期になって高所に大規模な集落が顕在化する妻木晩田遺跡（米子市・大山町）と敷敷山遺跡群（伯耆町・南部町）を中心に遺跡の動態を検討する。（図 1）

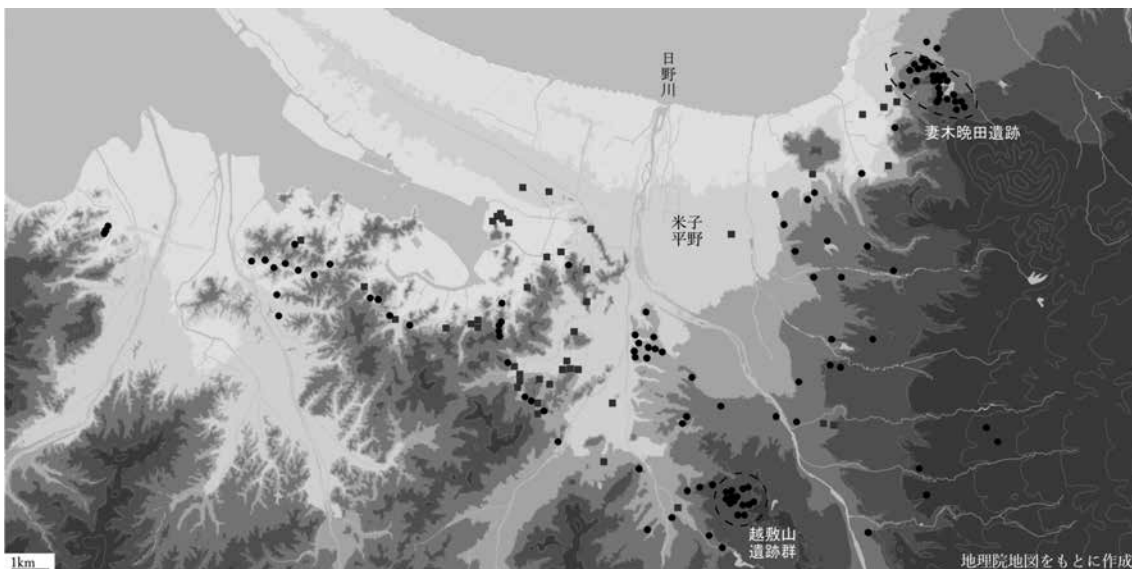


図 1 大山北西麓における主な弥生時代遺跡の分布

I 弥生時代の気候変動と遺跡の増減・立地傾向

弥生時代中期以降の遺跡を検討の対象とし、中期前葉をⅡ期（前 4 世紀）、同中葉をⅢ期（前 3 世紀）、同後葉をⅣ期（前 2 世紀～後 1 世紀第 1 四半期）、後期をⅤ期（後 1 世紀第 2 四半期～2 世紀第 3 四半期）、終末期をⅥ期（後 2 世紀第 4 四半期～3 世紀第 2 四半期）とする。また、Ⅲ期を 2 期、Ⅳ期とⅤ期を各 3 期、Ⅵ期を 2 期に細別する。

1 気候変動

図 2 は樹木年輪酸素同位体比の分析にもとづく弥生時代後半期にみる気候学的成分の変動である。中期には乾燥・温暖な気候がⅣ-2 期まで続き、その後、ゆるやかに湿潤・寒冷な気候となる。そして、後期には、Ⅴ-1 期に数年周期（以下、短周期）、Ⅴ-2 期～Ⅴ-3 期にかけて数十年周期（以下、中周期）で乾燥・温暖、湿潤・寒冷な気候が繰り返されたことが指摘されている（中塚 2002）。

2 遺跡の増減と立地

図 3 は当該地域における遺跡の増減と立地傾向である¹⁾。左のグラフは実数、右のグラフは指数（暦年代を考慮した数的評価）をもとに変化を表した²⁾。実数ではⅤ-3 期、指数ではⅥ-2 期に最も遺跡数が多くなる。どちらが真なのかは分からないが、遺跡数がⅣ-3 期とⅥ-1 期に減少し、その直後に遺跡が急増していることは概ね事実と捉えてよからう。

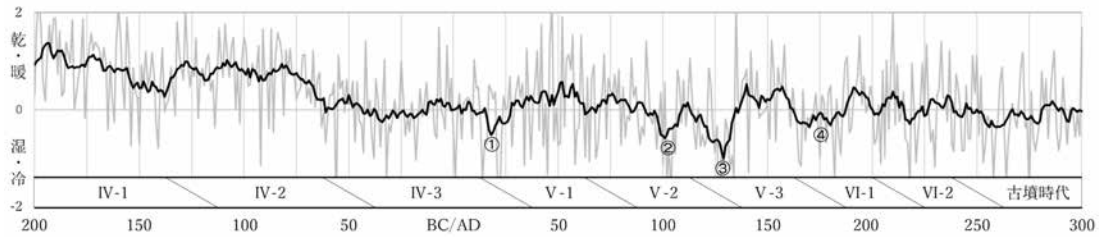


図2 弥生時代後半期にみる気候学的成分の変動（中塚武氏作成データを元に作図）細線：年単位 太線：11年移動平均

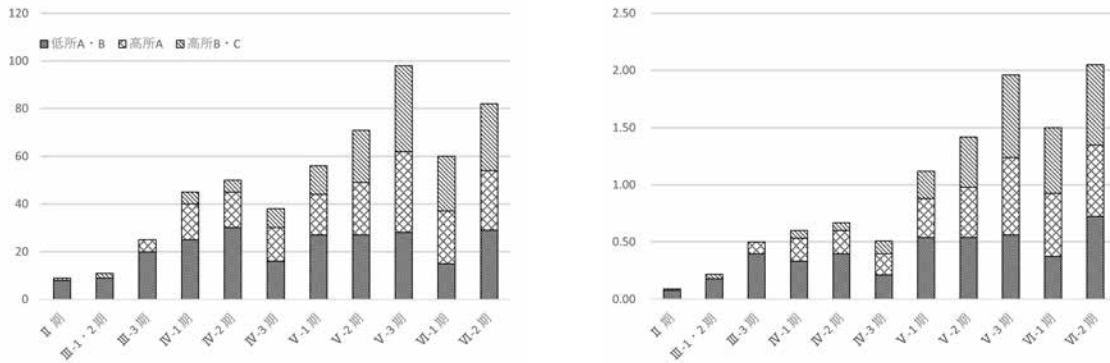


図3 弥生時代中期～終末期に至る遺跡の増減と立地傾向（左：実数 右：指数）

なお、遺跡の立地は、遺跡周辺の水田可耕地との比高差をもとに次のように大別した。

- 低所：水田可耕地と連続する微高地や山裾などに立地
- 高所 A：水田可耕地から比高差 10m 以上（40 m 未満）に立地
- 高所 B：水田可耕地から比高差 40m 以上に立地

以下、IV -2 期まで続いた乾燥・温暖期、IV -3 期の湿潤・寒冷期、V -1 期の短周期気候変動期、V -2 期以降の中周期気候変動期にみる集落遺跡の動態を探る。

II 中期の気候変動と遺跡の動態

中期にはIV -2 期後半に至るまで乾燥・温暖な気候が続いていた（図2）。その間の遺跡数は次第に増加している（図3）。水田稲作に適した環境下で食糧生産力が向上し、人口の増加がうながされたのだろう。III -3 期～IV -1 期には実数、指数ともに高所に遺跡が増えているが、低所の遺跡は実数で微増、指数で微減となっている。このことは、低所に生じた余剰人口による土地利用が高所に拡大したことを示唆している。

そして、IV -3 期に差しかかった頃、気候が湿潤・寒冷化する（図2）。IV -3 期には低所の遺跡数が実数、指数共に半減しており（図3）、湿潤・寒冷期に低所の土地利用は停滞していたようだ。河川氾濫などが発生しやすい環境下で低所を離れる集団もあったと考えられる³⁾。IV -2 期～IV -3 期にかけて高所 B を中心に居住域が形成された妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群の周辺では、IV -3 期に低所に立地する遺跡が少ない（表1 妻木川流域・淀江平野、表2 会見盆地）。IV -3 期にみる遺跡のあり方については環境の変化による説明も可能である。

越敷山遺跡群には比高が 100 m を越える地点に居住域が点在している（表2 越敷山丘陵）。いずれも水田経営に適した低所とは関わりにくい場所にあり、山住み（柴田 2004）を志向していると考えられる。森林資源の利用や畑作への依存度を高めた集団の存在がうかがわれる⁴⁾。

また、Ⅳ-3期には低所から高所に移動した集団があったと推測されるが、Ⅳ-2期～Ⅳ-3期にかけて高所の遺跡数は増加していない。Ⅱ期～Ⅳ-2期に長く続いた乾燥・温暖期にはイネの生産性が向上し、人口が増加した結果、遺跡数が上積みされたとみられるが、イネの生育に不利な環境にあったⅣ-3期には相対的に人口支持力が低下し、地域全体の人口が減少していたと考えられる。

Ⅲ 後期の気候変動と遺跡の動態

1 Ⅴ-1期—短周期気候変動と遺跡動態—

Ⅳ-3期に続いた湿潤・寒冷な気候がⅤ-1期に差しかかる頃に底をつく（図2①）、その後、乾燥・温暖に転じたⅤ-1期には、低所、高所ともに遺跡数が増加している（図3）。この間については短周期で気候が変動していたとみられる。湿潤・寒冷な期間は数年なので、その影響が蓄積、顕在化するまでに乾燥・温暖に転じ、全体としては乾燥・温暖化していたⅤ-1期には低所の土地利用が徐々に活発になっていったのではないかと考えられる。低所における遺跡の増加は、その表われである。越敷山遺跡群ではⅤ-1期に居住痕跡が確認できなくなり（表2 越敷山丘陵）、会見盆地側に遺跡が若干増加している（同 会見盆地）。低所の土地利用に有利な場所に人の移動があったものと推測する。

一方、妻木晩田遺跡ではⅤ-1期にも居住が継続しており、居住単位が増加している（表1 晩田山丘陵）。越敷山遺跡群よりも比高差が少なく、低所との関りを維持しやすい立地環境にある妻木晩田遺跡では、Ⅴ-1期に低所における水田経営の安定、拡大に伴う食糧生産力の向上、人口支持力の高まりを背景に集団規模が拡大していったと理解したい。墳丘墓の造営もはじまることから、首長層の台頭もうかがわれる。首長層を紐帯とする集団規模の拡大によって集約された労働力が水田経営力を高め、次なる集団の成長を支える基盤になったと考えたい⁵⁾。

2 Ⅴ-2期～Ⅴ-3期—中周期気候変動と遺跡動態—

Ⅴ-2期～3期には中周期で気候が変動しており、Ⅴ-2期の後半（図2②）、Ⅴ-3期の前半（同③）、Ⅴ-3期末～Ⅵ-1期前半（同④）に数十年におよぶ湿潤・寒冷期が認められる。この間の遺跡数は低所で横ばい、高所で増加している（図3）。湿潤・寒冷期が数十年続くと、河川の氾濫などのダメージが蓄積される低所の土地利用は縮小するが、乾燥・温暖に転じると再び安定した水田経営が可能になったと推測する。土器編年の精度では中周期の気候変動に応じた遺跡数の増減を把握できないが、この間に低所の遺跡数に大きな変化がないことは、土地利用が停滞と再開を繰り返すために遺跡の増減が相殺されていることを示唆しているのではなかろうか。

一方、高所における遺跡、居住域の増加は、Ⅴ-2期後半（図2②）、Ⅴ-3期前半（同③）の湿潤・寒冷期に高所に移動する集団があったことを連想させる⁶⁾。また、乾燥・温暖に転じると、数十年間は低所の土地利用が活性化する。その間、水田経営が安定、拡大すれば、人口支持力が高まる。人口の増加は集団の分化をうながし、高所の未利用地に新たな居住域が形成された。Ⅴ-3期中頃の乾燥・温暖期（図2③と④の間）には、こうした動きが顕著になった可能性がある。

妻木晩田遺跡はⅤ-2期以降も居住単位が増加しており、Ⅴ-3期には20地点以上に居住単位が確認できる大規模集落となる（表1 晩田山丘陵）。中周期で気候が変動したⅤ-2期～Ⅴ-3期には乾燥・温暖期、湿潤・寒冷期のいずれにも高所に遺跡、居住域が増加する要因があり、大規模集落の成立をうながしたと考えたい⁷⁾。

Ⅴ-1期に人が離れた越敷山遺跡群でもⅤ-2期には再び居住域が形成され、Ⅴ-3期には十数地点に居住単位が確認できる（表2 越敷山丘陵）。Ⅴ-1期に越敷山遺跡群を離れた集団が、Ⅴ-2期以降、中周期で繰り返された湿潤・寒冷期間に高所へと回帰した可能性がある。越敷山遺跡群の周辺では、Ⅴ

- 2) 指数化は、大阪平野における遺跡形成や人口の増減を検討した若林邦彦の論考を参考にした（若林 2022）。
- 3) 越敷山遺跡群周辺の低所にある口朝金遺跡では、この頃の河川氾濫によって堰状の遺構が埋没している（京嶋 2023a）
- 4) 越敷山遺跡群周辺の集落遺跡の特性を検討した京嶋覚は、森林生態系に由来する動植物などの資源需要の高まり、低地での河川氾濫リスクなどの回避や縄文的な生活様式への回帰も視野に入れつつ、「狩猟・採集を本・兼業とする移動性の高い小集団」の集住、定住化を指摘している（京嶋 2023b）。
- 5) 当該地域では水田域の様相が判然としないが、この頃、河内平野などに複雑な灌漑システムによって運用される水田が出現しており、水田経営において耕作集団を統率し、内部の利害調整を担う指導者の役割が重要性を増していることが指摘されている（井上 2020）。
- 6) 米子市の低地にある目久美遺跡では、V -3 期までに幅 5m、深さ 2m を測る大規模な水路が一度の洪水堆積によって完全に埋没している（米子市 1998）。目久美遺跡は縄文時代から営みが続く地域の拠点的な遺跡で、複数の調査地点で弥生時代の水田跡も検出されているが、この水害を機に V -3 期以降は弥生時代の活動痕跡が確認できない。生産域の消失とともに居住地が移動していると考えられる。
- 7) 居住地の移動が頻繁に行われることで、同一時期の遺跡数が増加することもありうる。しかし、当該地域には V -2 期～V -3 期に居住が連続する遺跡や居住単位が多くあるので、当該期の遺跡の増加は新たな居住地の形成によるものが多いと考えられている。

参考文献

- 井上智博 2020 「弥生時代の水田経営と降水量変動」『先史・古代の気候と社会変化』気候変動から読みなおす日本史 臨川書店
- 京嶋覚 2023a 「法勝寺川中流域ににおける弥生時代社会の形成と特質」『鳥取地域史研究会』第 25 号 鳥取地域史研究会
- 京嶋覚 2023b 「越城原台地北部における弥生時代集落の形成と意義」『伯耆文化研究』24 伯耆文化研究会
- 柴田昌児 2004 「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観 10 弥生・古墳時代遺構・遺物』小学館
- 中塚武 2022 「樹木年輪酸素同位体比の周期性からみた「高地性集落」の背景」『古代文化』74-2 古代学協会
- 濱田竜彦 2004 「山陰地方－大江山麓・中海南東岸地域を中心に－」（『弥生社会の群像 - 高地性集落の実態 -』第 18 回古代学協会 四国支部大会
- 濱田竜彦 2006 「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態－大江山麓・中海南東岸地域を中心に－」『古代文化』58-2 古代学協会
- 濱田竜彦 2024 「弥生時代後半期の寒冷化と集落動態 米子平野周辺にみる遺跡の増減と立地傾向」『季刊考古学』第 168 号 雄山閣
- 米子市教育文化事業団編 1998 『目久美遺跡 V・VI』
- 若林邦彦 2022 「大阪平野における弥生時代以後の集落移動頻度の検証－弥生高地性集落理解の前提として－」『古代文化』74-2 古代学協会

なお、表 1・2 に掲げた遺跡に関する文献は紙幅の都合で割愛した。

丹後・但馬・北丹波の弥生時代の山城的な遺跡について

加藤晴彦（与謝野町教育委員会事務局）

はじめに

弥生時代には、いわゆる「高地性集落」と言う形態の集落遺跡の存在が指摘されている。この集落形態は、略奪を伴う集落外勢力との戦闘に備え、耕地から離れた高所に置くことで防御機能を高めた生活施設と想定することができる。この高地性集落は、弥生時代に特徴的な遺構と指摘されており、弥生時代に激しい戦闘があったイメージを印象付けるものとなっている。

ここでは、丹後・但馬・北丹波（以下、「近畿北部」とする。）におけるこの高所型の遺跡について検証を行い、その実像の解明にアプローチしていくこととする。

検証の方法

日本史で戦闘の時代と言えばその名のとおりに「戦国時代」であり、その重要証拠の一つが「山城」遺構である。ここでは当地域の山城遺構の属性を大まかにア～エの4つに捉え、その属性を弥生時代の遺構と比較することで弥生時代における防御性遺構について確認することとする。

山城跡の基本的な属性は、

- ア 高所で眺望の良い山上・丘陵上に位置する。

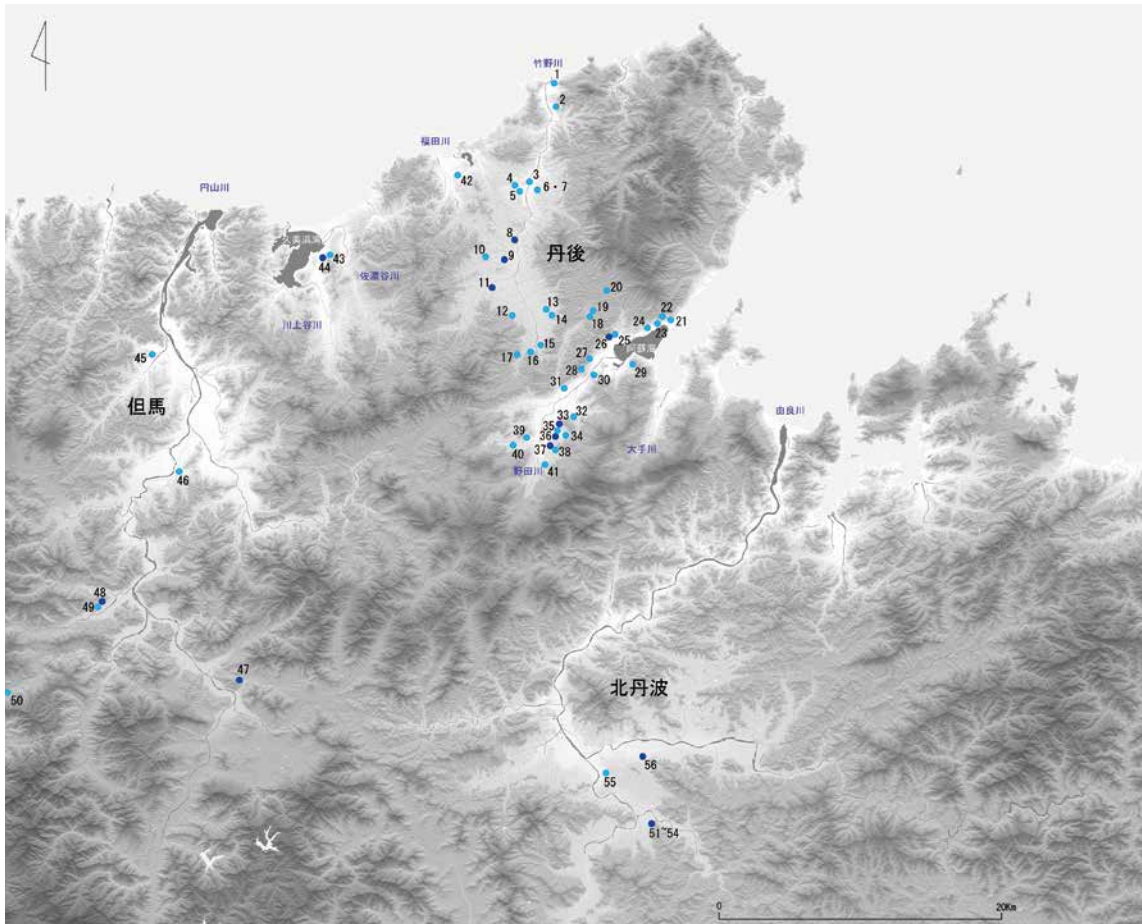
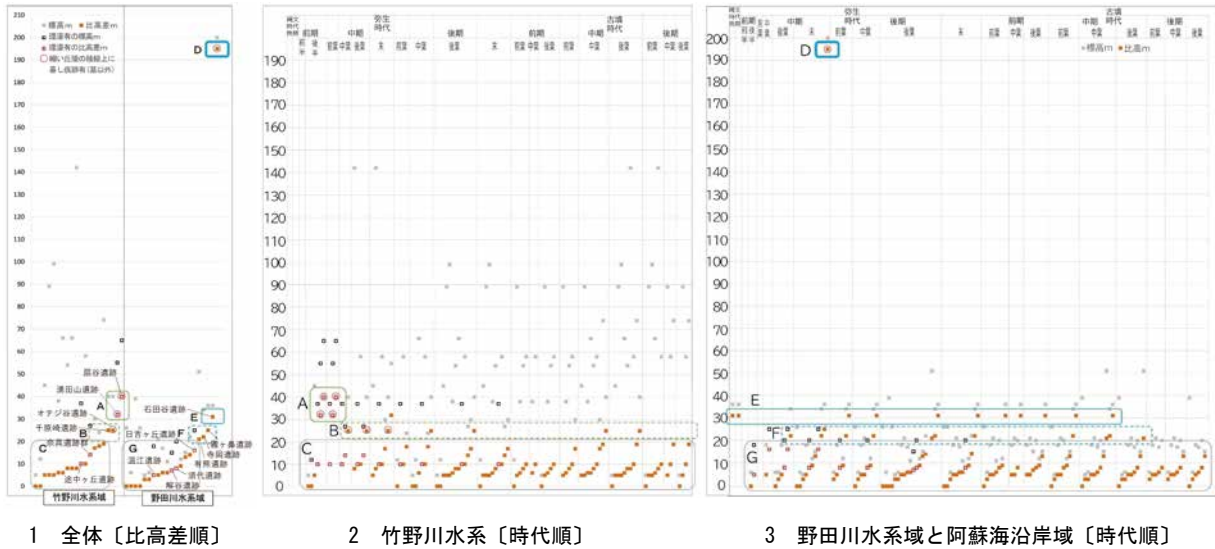


図1 弥生時代の主要な集落遺跡の分布図

表3 弥生・古墳時代の集落遺跡の比高差



南域で高低幅20～410m・偏差値50は90mであり、ミドル数値は低い方でも比高差54mである。なお、比高差領域幅では30m以上が占める割合は北域86%・南域92%であり、山城跡は比高差30m以上を大勢の数値として認めることができる。

山城跡における堅堀と横堀の比率は、旧丹後国域（舞鶴市域・旧大江町域含む）では、全数583基に対して、堅堀157基（27%・うち畝状堅堀74基）・横堀1基（0.002%）。北丹波域では、全数233基に対して、堅堀67基（29%・うち畝状堅堀18基）・横堀9基（0.04%）である。なお、横堀のカウント対象には非全周型も含んでいる。また、横堀には埋没しているものも想定されるため、数値の変動は想定されるが、大枠の方向性には影響のない範囲と想定している。

城郭跡と弥生時代環濠集落の構造を大づかみに比較すると、全周型の環濠（＝横堀）は弥生時代環濠集落に顕著であり、山城跡には少ないことがわかる。戦国時代の山上の防御施設としての横堀（＝全周ないし部分的な環濠）の機能は、切岸・堀切・堅堀よりも低いと認識されていたと思われる。両者の差異の理由として、弥生時代の山上施設の防御概念が未成熟であったのか、あるいは戦乱の緊迫度が低かったためなのか判断は容易ではないが、山上の弥生時代環濠集落は平地の環濠集落をそのまま山上に当てはめたものと言えるであろう。

検証の過程1

弥生・古墳時代の集落遺跡における山城跡の属性ア～エについて確認する（図1、表1～3）。標本は北域20遺跡・南域21遺跡である。なお、山城跡の標本とは異なり、高所以外の集落も含めている。

①属性アの検証 比高差領域は、北域で高低幅0～40m・偏差値50は17m、南域で高低幅0～195m・偏差値50は16mとなる。北域・南域ともに20mを境にやや空白があるため、20m以上を高所性と認めるものとする。また、高低差領域では、北域のA・B・C領域、南域のD・E・F・G領域のグルーピングを認めるものとする。比高差20mからの眺望範囲は広いとはいえないが、概ね良好な立地を認めることができる。

比高差領域で区分した表3-1の北域のA・B・C領域（表3-2）と南域のD・E・F・G領域（表3-3）のグルーピングの各遺跡の存続期間を見ると、北域のA（扇谷・湧田山遺跡）は弥生前期～中期前葉、Bは弥生時代中期中葉～古墳時代中期後葉に断続的に分布するが、細い稜線上にあるオ

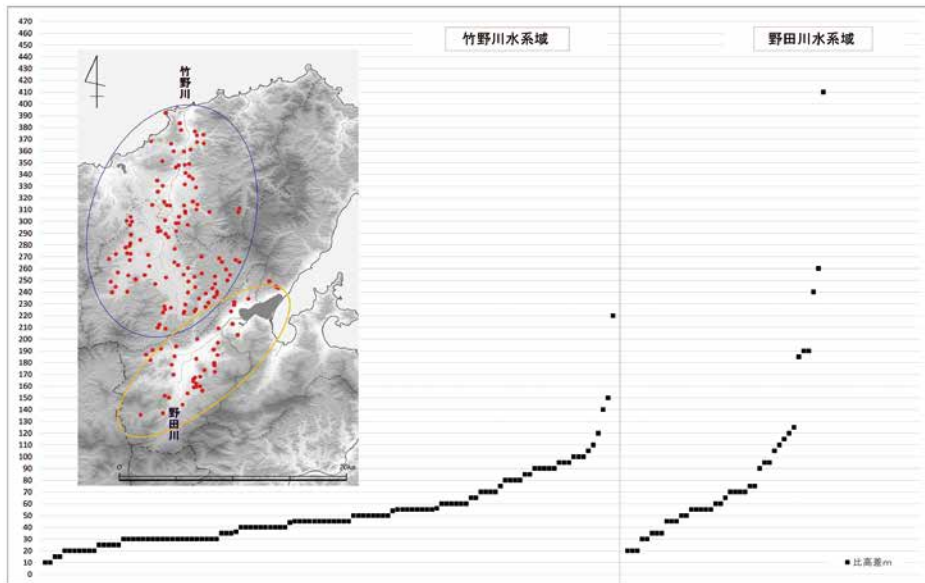


図2 戦国時代の山城跡の分布図（左上） / 表6 戦国時代の山城跡の比高差



図3 山城跡の各部位の名称

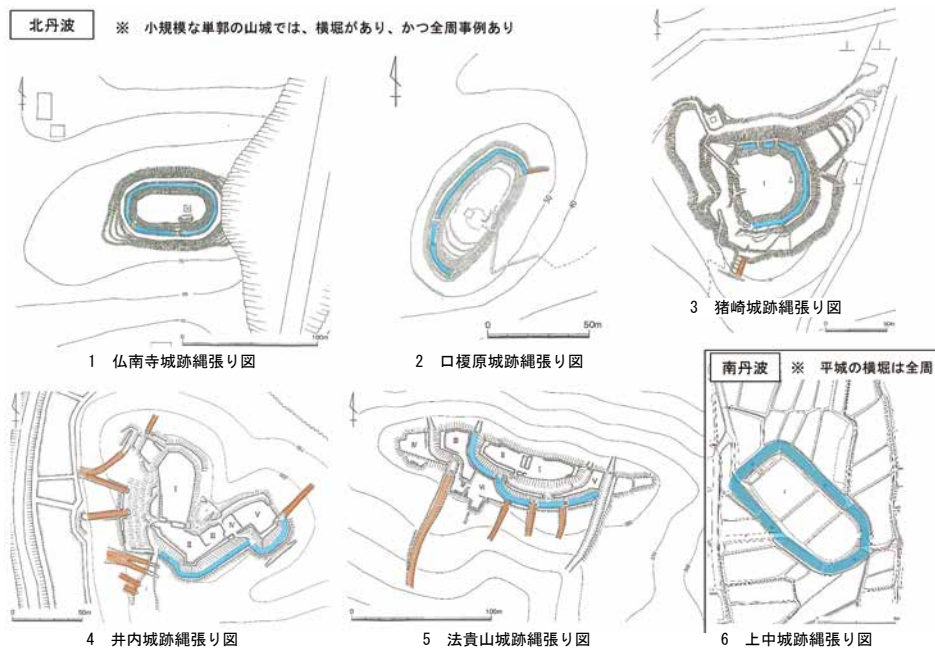


図4 山城跡の横堀の事例〔丹波〕

テジ谷遺跡は弥生時代中期中葉～末に限られる。Cは弥生時代前期後半～古墳時代後期後葉のほぼ全時代に展開し、時代的な偏差は認められない。南域のD（今熊野遺跡）は比高差195mという高所にある突出した存在である。E（石田谷遺跡）は30mの高所に位置するものの縄文時代晩期～古墳時代中期中葉まで断続的に展開する点で他の30mクラスの遺跡と比べて異質であるが、長い緩斜面の上位に位置する遺跡であり、山城要素を欠くものである。F（霧ヶ鼻・寺岡遺跡）は断続的に長い存続期間を示すが、霧ヶ鼻遺跡は弥生時代中期末に限られ、かつ細い丘陵上にあるため注意が必要と思われる。Gは北域のCと同様でほぼ全時代に展開し、時代的な偏差は認められない。

②属性イの検証 山上・丘陵上を切り盛り造成している事例は比高差20m以上の遺跡の大部分で確認することができる。

③属性ウの検証 比高差20m以下の遺跡は、大部分が段丘上や沖積地に位置し、20m以上の遺跡の大部分が山丘に位置する。横堀・堀切は平地・山丘での弥生時代集落の環濠に相当し、比高差に関係なく認めることができる。土塁の有無が確認できる事例が少ないが、扇谷遺跡で確認できる(図5)。なお、弥生・古墳時代に堅堀は未確認であるためその有無は問わない。

④属性エの検証 属性イを有する遺跡の大部分で確認することができる。

検証の過程2

山城的な防御に関する特徴的な遺構・遺物の検証は以下のとおりであり、遺跡構成では属性ア～エを有する。

①投弾的礫 投石による攻撃用の礫と思われる。東家の上遺跡(図9)の環濠内出土(230個・平均13cm・1.27kg)に顕著で、その他に大盛山遺跡の主に環濠内出土(194個・平均580g)、亀ヶ森遺跡の堅穴建物跡床面出土(36個・鶏卵サイズ)がある。今のところ但馬の遺跡のみである。

②単独の堅穴建物跡 オテジ谷遺跡・亀ヶ崎遺跡・深谷遺跡において堅穴建物跡が単独棟として確認されている。その中でも亀ヶ崎遺跡は比高差60mの高所にあり、眺望が良い。見張り施設を想定しておきたい。

検証の結果

丹後における山城的遺跡は、北域では弥生時代前期後半～中期前葉の扇谷遺跡・湧田山遺跡、南域では弥生時代中期末の今熊野遺跡が認められる。

但馬・北丹波の弥生・古墳時代の集落遺跡にもこの属性を適用すると、但馬では亀ヶ崎遺跡・深谷遺跡・大盛山遺跡・東家の上遺跡・赤尾遺跡・田和遺跡(表2-5～50)を認めることができる。北丹波では奥谷西遺跡群(表2-1～54)を山城的な遺跡と認めることができる。ただし、奥谷西遺跡群は断続的に古墳時代後期後葉まで継続するため、同質な遺跡であるか否かは注意される所である。

なお、集落型式として、馬の背的な形状の細い尾根上に展開する扇谷遺跡を典型とする「扇谷型」と亀の背的な形状の丸い山頂に展開する大盛山遺跡を典型とする「大盛山型」の2型式に分類できる。

なお、対外勢力との戦闘は弥生時代に限ったことではないはずであるが、古墳時代に山城的遺跡は顕著ではない。その理由を明らかにすることは容易ではないが、戦闘的衝突の多少が原因なのか、攻防に技術的变化があったのか、前方後円墳に象徴される信仰儀礼を通じた社会制御が統治機能を発揮したのか、追究すべき命題は多い。

むすびに

弥生・古墳時代の山城的な遺跡の有無は下記のとおりで、丹後・但馬では弥生時代でのみ確認できる現象であることが判明した。北丹波では弥生・古墳時代の両方で確認することができた。ただし、どの事例も戦国時代の山城跡よりも低い場所に設置されている事例が大部分であることは戦国レベルに大きな差があったとも推測される。また、山城跡は曲輪として踏査で確認できるが、弥生時代の遺構は発掘調査を実施しなければ認識できないものが多い。そのため、今熊野遺跡のように相当な高所にある山城跡に弥生時代の遺構が重複する事例が今後発見される可能性は想定されるべきであろう。

- 丹 後 弥生時代の前期後半～中期前葉の扇谷遺跡・湧田山遺跡で認めることができる。
- 但 馬 弥生時代の中期前葉～中葉の東家の上遺跡・赤尾遺跡、同後期後葉～末の田和遺跡、同中期後葉～末の亀ヶ崎遺跡、同後期前葉～中葉の大盛山遺跡で認めることができる。
- 北丹波 弥生時代中期末～古墳時代後期後葉の奥谷西遺跡群に認めることができるが、存続期間が長期であり、あるいは山城的遺跡とは異なる背景を想定すべき可能性がある。

引用・参考文献

- 荒木幸治 2021 「高地性集落」の意味と基礎分析－高地性集落の抽出と相対化－』『季刊考古学』第157号 雄山閣
- 加藤晴彦 1999 「丹後の弥生集落遺跡」『第4回加悦町文化財シンポジウム 徹底討論Ⅱ巨大古墳への胎動 丹後の弥生社会を斬る－ムラ・墓・玉・鉄・土器－』加悦町教育委員会
- 加藤晴彦 2000 「環濠集落の規模と構造」『季刊考古学・別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣
- 京都府教育委員会 2012 『京都府中世城館跡調査報告書 第1冊 丹後編』
- 田畑基 2001 「但馬の環濠を伴う高地性集落」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
- 田畑基 2002 「南但馬における弥生集落の動向」『みづほ』37号 大和弥生文化の会
- 表1・2 遺跡データは各々の報告書による。※石川県埋蔵文化財センター 2025『高地性集落－日本海沿岸地域を中心として－』令和6年度環日本海文化交流史研究会資料, p92～94に掲載
- 表3 荒木幸治2021を参考にして作成した。
- 図3・4 京都府教育委員会 2013 『京都府中世城館跡調査報告書 第2冊 丹波編』
- 図5 峰山町教育委員会 1988 『扇谷遺跡発掘調査報告書』
- 図6 京丹後市教育委員会 2008 『網野銚子山古墳・湧田山1号墳発掘調査概報』
- 図7 宮津市教育委員会 1987 『阿弥陀ヶ峰城跡・今熊野城跡・今熊野遺跡 ロープウェイ建設に伴う発掘調査概要』
- 図8 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 「奥谷西遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第10冊』
- 図9 八鹿町教育委員会 1990 『小山古墳群・東家の上遺跡』
- 図10 和田山町教育委員会 1995 『大盛山遺跡』
- 図11 豊岡市教育委員会 1982 『亀ヶ崎遺跡群』

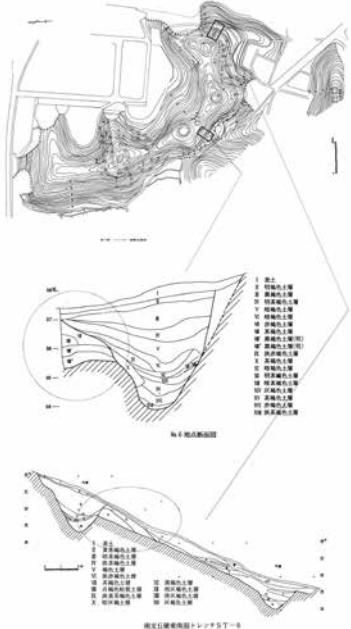


図5 扇谷遺跡



図7 今熊野遺跡

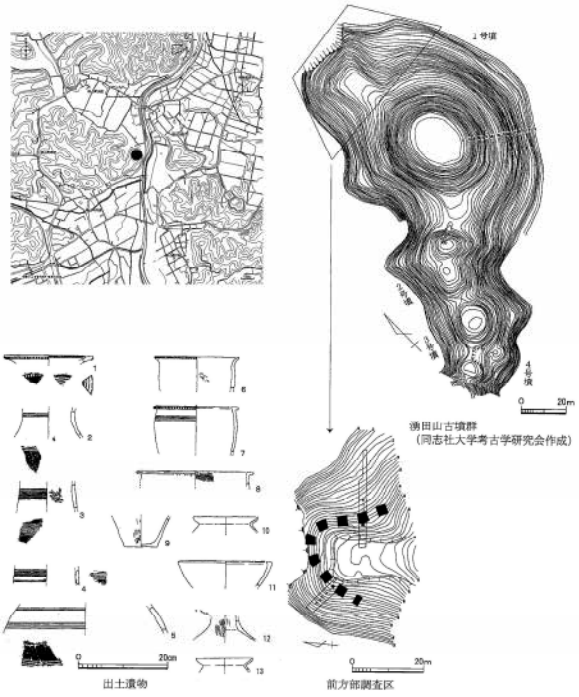


図6 湧田山遺跡

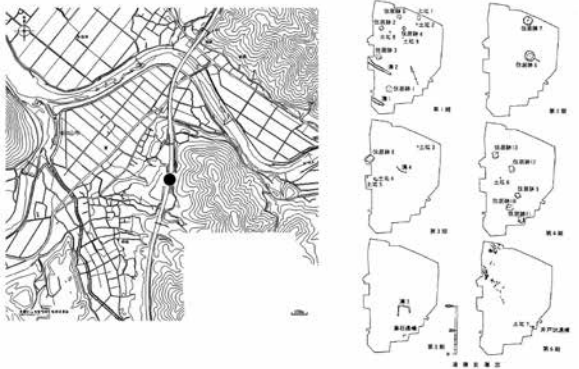
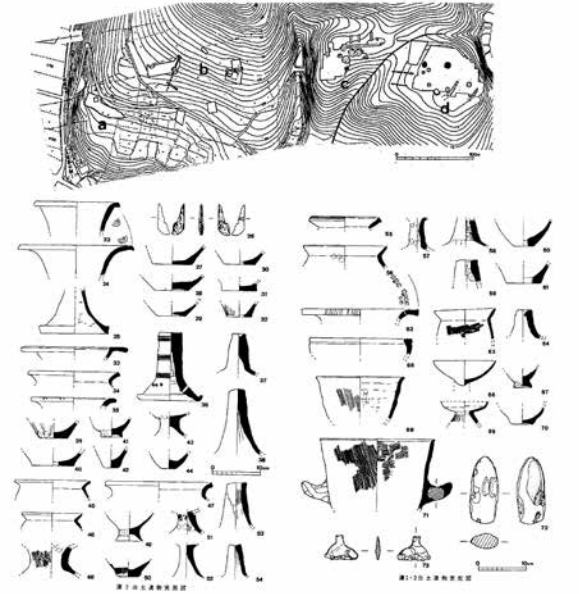


図8 奥谷西遺跡



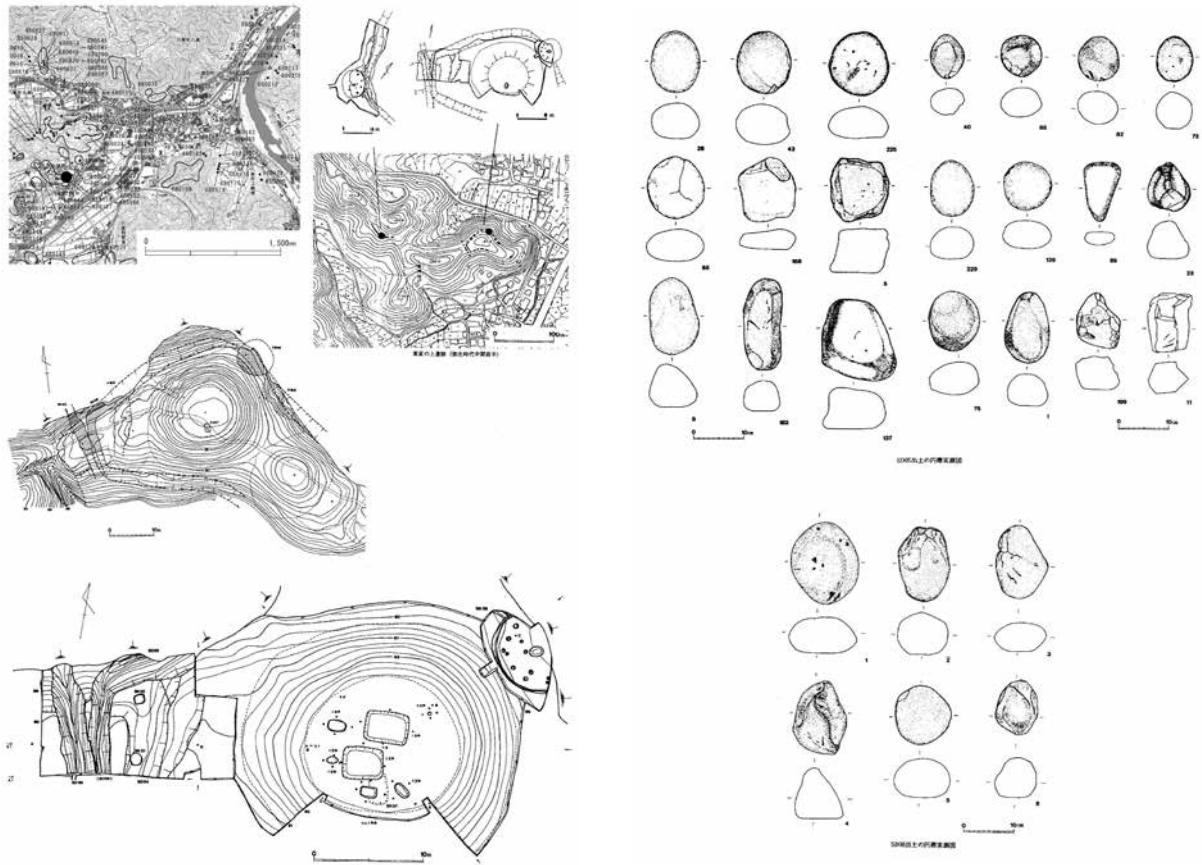


図9 東家の上遺跡

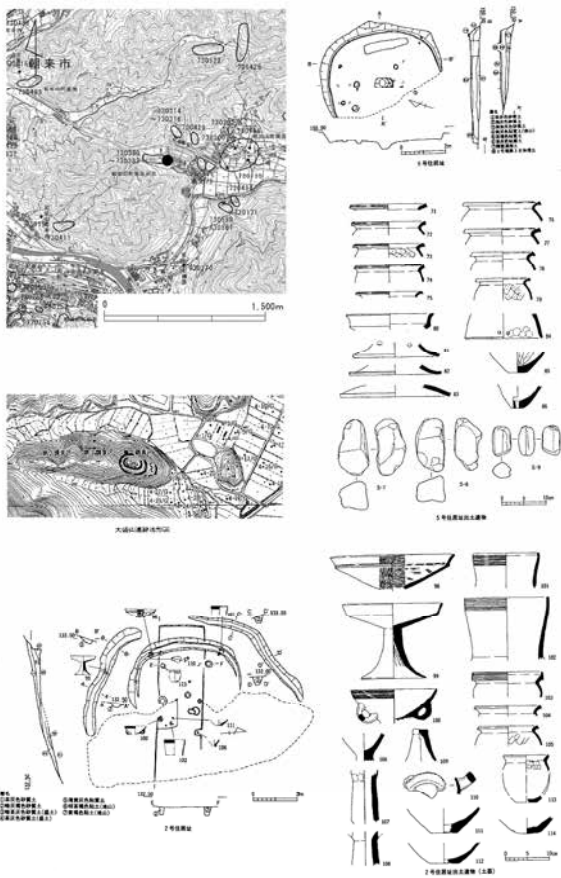


図10 大盛山遺跡

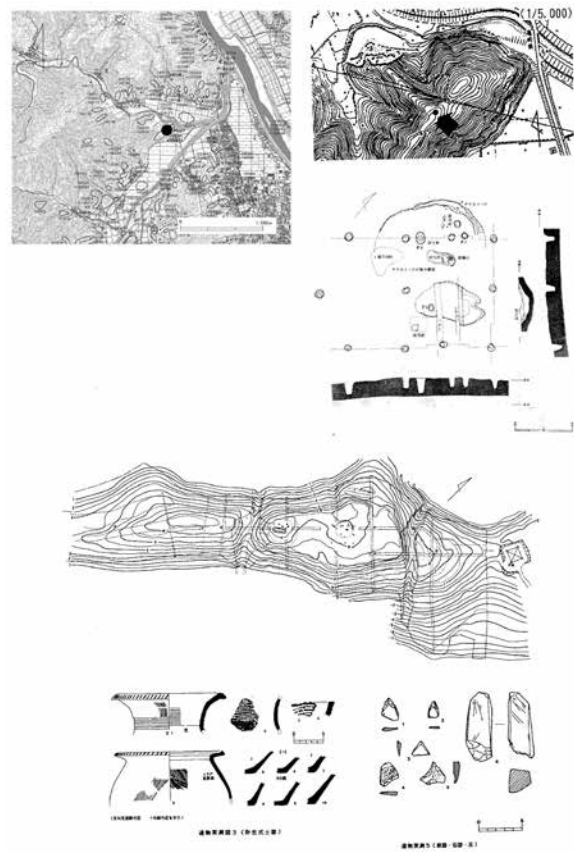


図11 亀ヶ崎遺跡

福井県の「高地性集落」について

深川義之（鯖江市教育委員会）

1 はじめに

本稿では、福井県におけるいわゆる「高地性集落」の現状把握を目的として縄文時代晩期から古墳時代前期までの低地を含む集落遺跡について集成を行い、主に標高と比高の関係をもとに高地性集落としてとらえることが可能な遺跡を抽出しその様相をまとめた。

2 集落遺跡の集成について（表1～3）

本県で確認されている集落遺跡ないし集落の可能性のある106遺跡の標高と比高および消長を別表のとおり整理した。本県では地勢および文化圏の違いから旧若狭国に敦賀市域を加えた県南部域を「嶺南」、旧越前国から敦賀市域を除いた県北部域を「嶺北」と呼び分けている。さらに、嶺北については北部の「福井平野」、南部の「丹南」、東部の「奥越」（永平寺町東部域含）の3地域に細分可能であり、本稿では基本的にこの地域区分を用いる。遺跡の標高を概観すると、嶺北・嶺南問わず沿海部や河口から程近い平野部に立地する遺跡は総じて低く、沿海部から離れた福井平野周縁部や丹南などの内陸部にかけて徐々に上昇し、奥越に至っては平地でも100mを超える。今回、集成を行った結果、概ね比高20m前後を境に分布の偏りが見て取れたことから、比高20m以上の遺跡を高地性集落とした。

3 各時期の集落の様相（表1～3、図1～6）

（1）縄文時代晩期から弥生時代前期

主に福井平野から奥越まで分布するが、全体的に遺跡数が少ないこともあって不明な点が多い。弥生時代中期の分布域の中に収まり、遺跡の密度は相対的に低い。比高が大きな遺跡は1例（藤巻館遺跡）のみ確認された。消長表上では縄文時代晩期から弥生時代前期へと継続する遺跡がないように見えるが、本県において当該期の土器編年が確立されていないことも影響しているとみられる。

（2）弥生時代中期前葉から中期中葉

明確な遺構を伴った遺跡が増加。前代の分布域に加え、丹南や嶺南を含む広範囲に分布するようになる。前代と同じく遺跡の標高や比高の傾向に大きな変化は見られないものの、比高が大きな遺跡は2例（菜山崎遺跡、藤巻館遺跡）確認された。低地で環濠集落が出現する（今市遺跡）のはこの頃である。

（3）弥生時代中期後葉から中期末

前代と比べ分布域に大きな変化はない。この時期の遺跡は、一部の比較的規模の大きな集落遺跡を除き弥生時代中期末までに姿を消し、弥生時代後期後葉以降に再び活動が見られる事例が多い。丹南や嶺南といった県南部域で比高の大きな遺跡が3例（茶谷山城跡、舞埼遺跡、盆山古墳群）確認され、このうち舞埼遺跡は弥生時代後期中葉まで継続する。

（4）弥生時代後期前葉～後期中葉

前代から継続する集落遺跡は規模の大きなものにほぼ限られ、それまで確認されなかった場所に数多く出現する。丹南から福井平野にかけて北流する日野川沿いで増加するほか、嶺南では全域で遺跡数が増加。比高が顕著な遺跡は8例（松尾谷古墳群、舞埼遺跡、弁財天古墳群、安保山古墳群、三尾野古墳群、清水山古墳群、小羽山遺跡、剣大谷古墳群）確認され、他の時期と比べると高い急峻な山上に位置する比高の大きな遺跡が目立つ。これらの遺跡で、後期後葉まで継続するものは確認されていない。

(5) 弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉

県内全域で遺跡数が急増する。加越台地や福井平野東部での増加が目立つほか、丹南、奥越でも顕著な増加が認められる。弥生時代終末期までに活動を終える遺跡も一定数あるが、古墳時代前期前葉まで継続する遺跡が多い。比高が大きな遺跡は6例（杓子谷遺跡、鎗嶺山城跡、菖蒲谷遺跡、寮古墳群、西谷遺跡、茱山崎遺跡、）確認された。いずれも福井平野周縁部のみに分布し、前代のような急峻な山上に位置する遺跡は少なく、いずれも標高40 m以下である。古墳時代前期中葉以降、比高20 mを超える遺跡の確認事例はない。

4 福井県内の高地性集落の様相

時期 縄文時代晩期後半に出現。遺跡数は弥生時代中期後葉に増加し、後期前葉から中葉にピークを迎える。後期後葉には減少に転じ、古墳時代前期前葉を最後に姿を消す。

分布 全期をとおして嶺北に偏りがみられる。出現期（藤巻館遺跡・茱山崎遺跡）を除き、嶺南から嶺北にかけて次々と現れ、日野川水系で集中的に分布した後、福井平野周縁部へ拡散する。

立地 眺望の良い丘陵の頂部や端部を選地する傾向がある。比高の最も大きなもので106 m（弁財天古墳群）、最も小さなもので22 m（西谷遺跡）を測る。その他には眺望のやや劣る丘陵鞍部に位置する（藤巻館跡）ものが認められるほか、比高30 m程の加越台地端部に築かれた遺跡（西谷遺跡・杓子谷遺跡・茱山崎遺跡）がある。

集落形態 明確に環壕をめぐらす遺跡は1例（弁財天古墳群）のみで、これより小規模な溝を有する盆山古墳群を環壕集落としてカウントしても防御的機能を有する遺跡は2例にとどまる。集落内において同時期に営まれた建物は1～2棟の遺跡が大半とみられ、竪穴建物の床面積は、時代を経るごとに徐々に大型化するものの、同時代の低地のものと比較するとやや小さい傾向にある。いっぽう、加越台地上の遺跡は比較的規模が大きく、長期的に営まれた茱山崎遺跡は集落が丸ごと台地上へ移動した印象を受ける。このほか炉跡が認められない建物が複数の遺跡で確認されている。

出土遺物 多くの遺跡で煮炊き可能な器種を含む土器類が確認されており、丹南や嶺南を中心に外来系、とりわけ近江系土器が一定数出土する傾向にある。加越台地上の遺跡では、沖積地の集落と同じように玉作り関連遺物や鉄製品が多く確認されているが、それ以外の遺跡では玉作り関連遺物が出土することは希で、石・鉄製武器類の出土量も少ない。

5 おわりに

本県における高地性集落は縄文時代晩期には出現し、古墳時代前期前葉まで存続することが明らかとなった。加越台地上のものを除きその規模は小さく、集落と呼ぶことに躊躇するような遺跡も含まれる。最も特徴的な動向としては、弥生時代中期後葉から後期中葉にかけての集落が、その前後の時期のものとは比べて立地（比高）だけでなく内容や分布域、継続性などが明確に異なる点にある。紙面を割く余裕はないものの、この動きは同時代の低地の集落の消長、増減、分布域の変化といった動向とも相関しているように思われ、なんらかの社会的緊張状態の存在が想定されるだろう。これ以外の時期については、生業ないしその他の要因（宗教的背景や天災等）に伴う施設である可能性も十分に考えられ、縄文時代晩期から古墳時代前期にかけて高所に集落が造営された背景は必ずしも一つではなかったものと考えられる。

【参考文献】

堀大介 2009「高地性集落の歴史的展開」『地域政権の考古学的研究－古墳成立期の北陸を舞台として－』

敦賀市教育委員会 2001『舞崎前山古墳・舞崎遺跡』 ※これら以外の参考文献は紙面の都合上割愛しました

本稿執筆にあたり県内の文化財行政関係者から資料の提供や貴重なご意見をいただきました。記して感謝を申し上げます

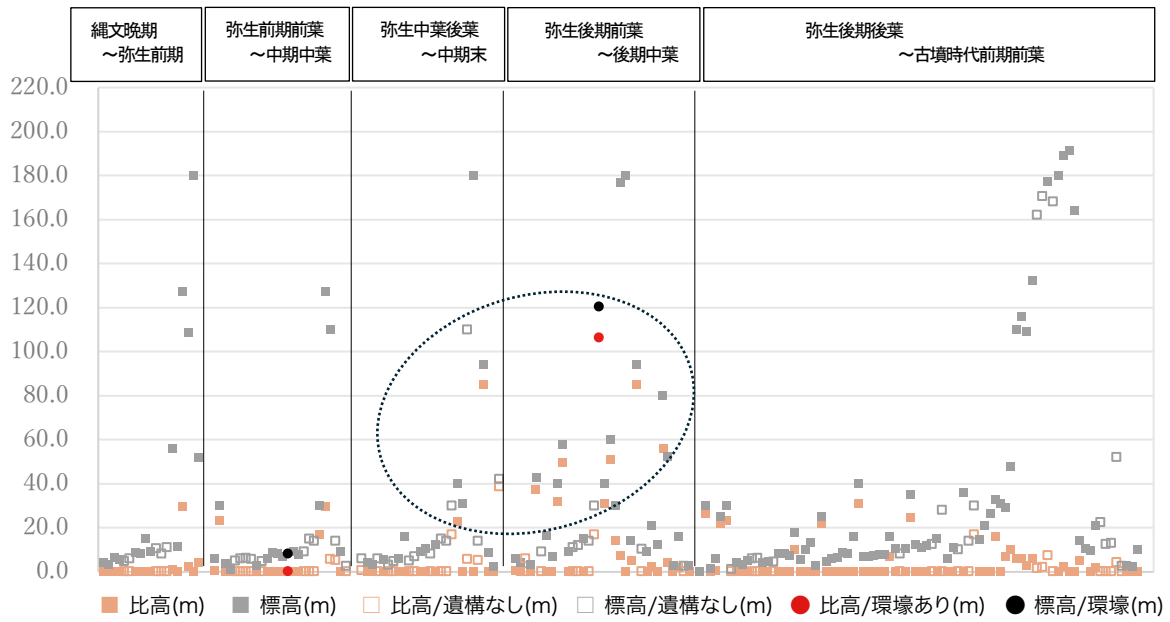


図1 比高と標高（縄文時代晩期～古墳時代前期前葉／福井県全域）

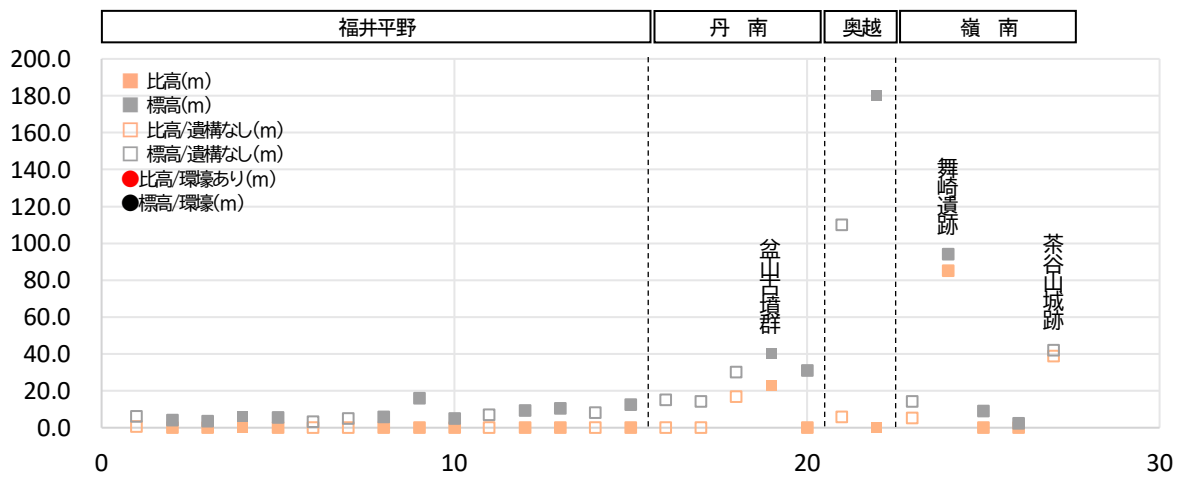


図2 標高と比高（弥生時代中期後葉～中期末／県内地域別）

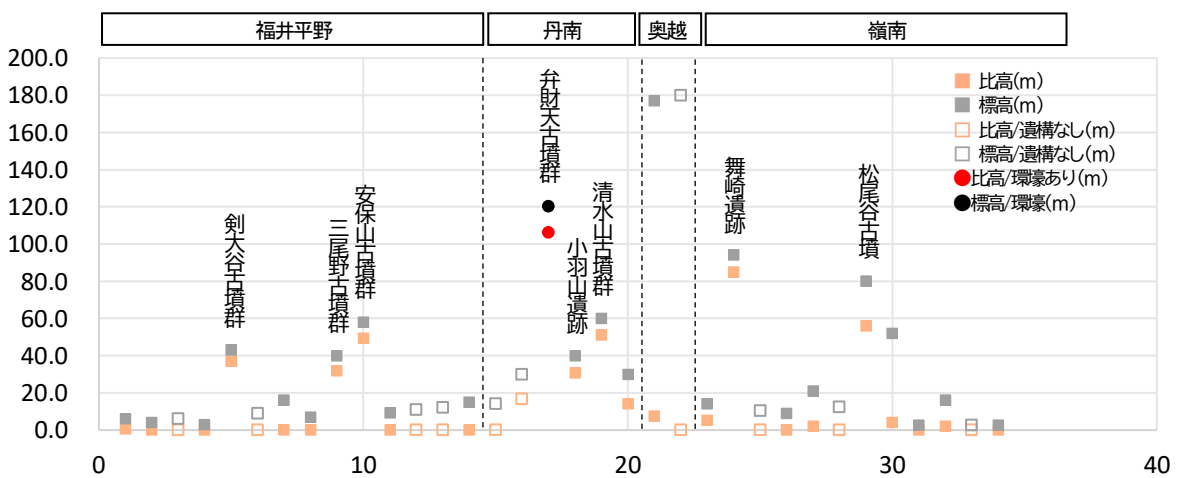


図3 標高と比高（弥生時代後期前葉～後期中葉／県内地域別）

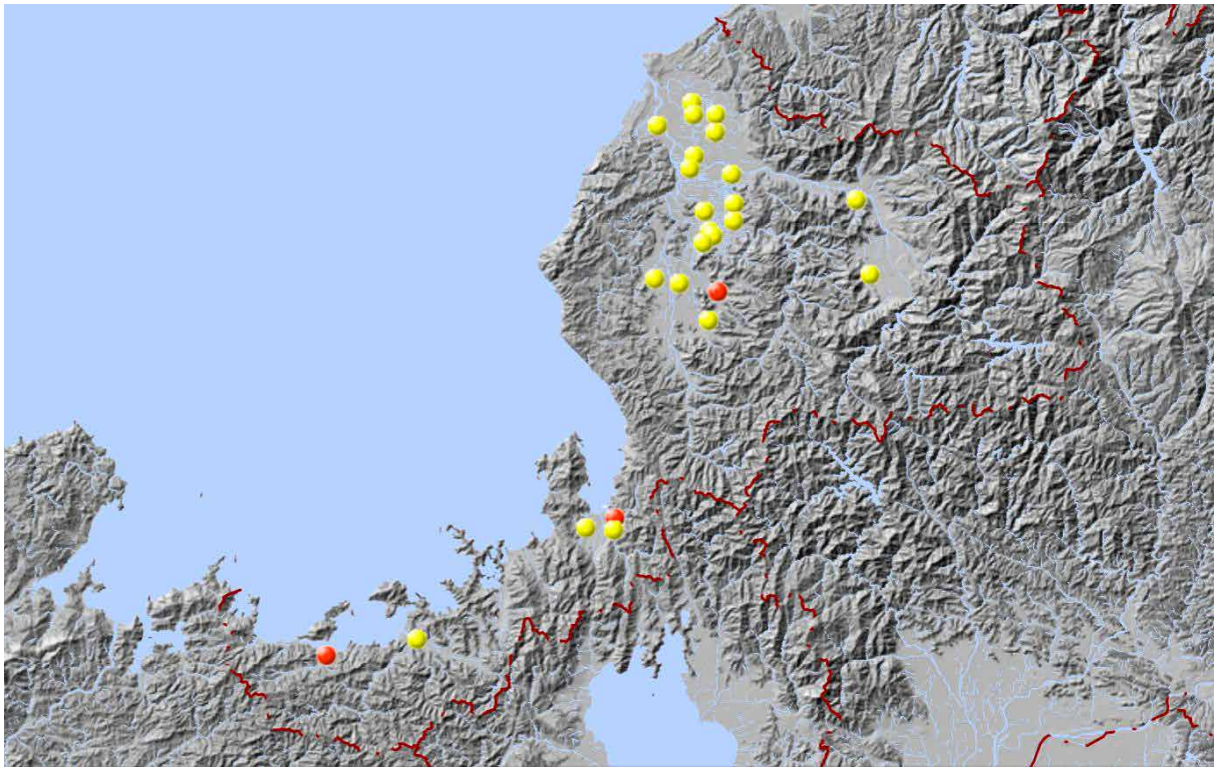


図4 福井県の集落遺跡一覧（弥生時代中期後葉～中期末） ● 高地性集落 ● 低地集落

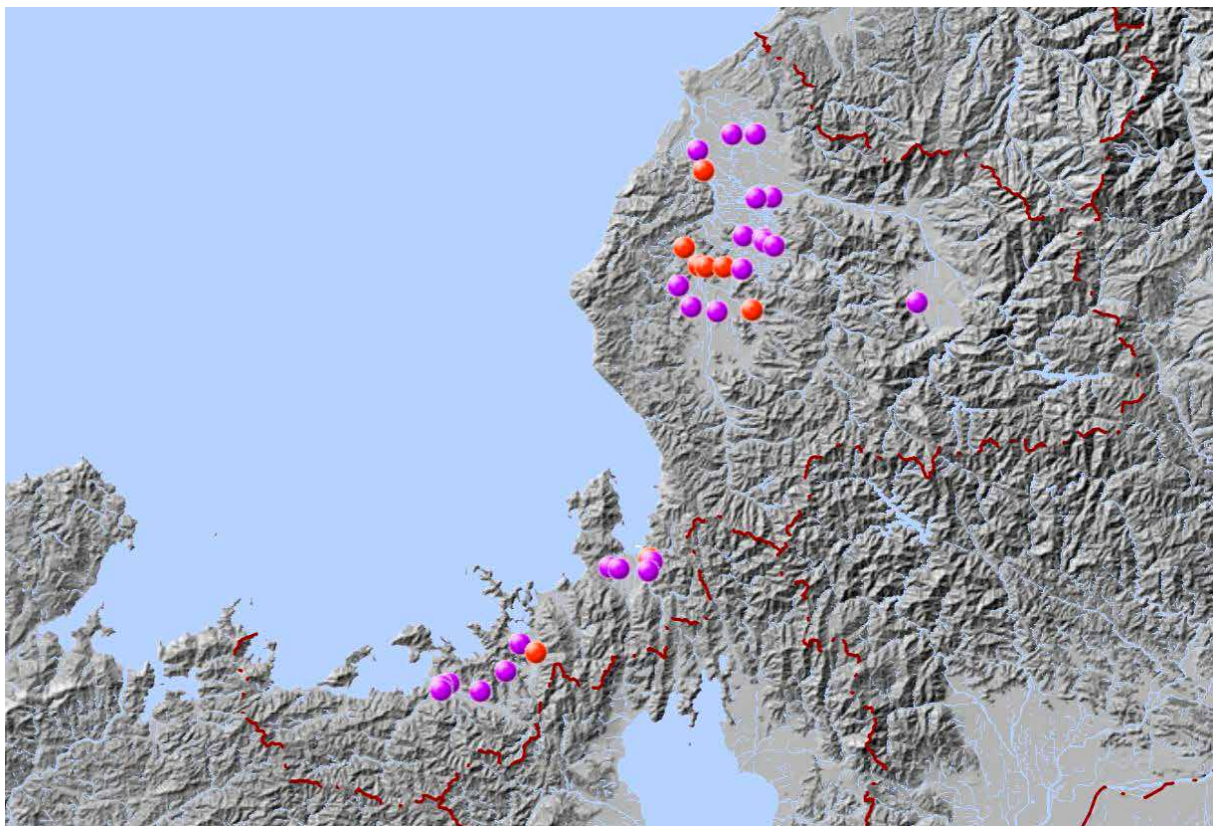


図5 福井県の集落遺跡一覧（弥生時代後期前葉～後期中葉） ● 高地性集落 ● 低地集落

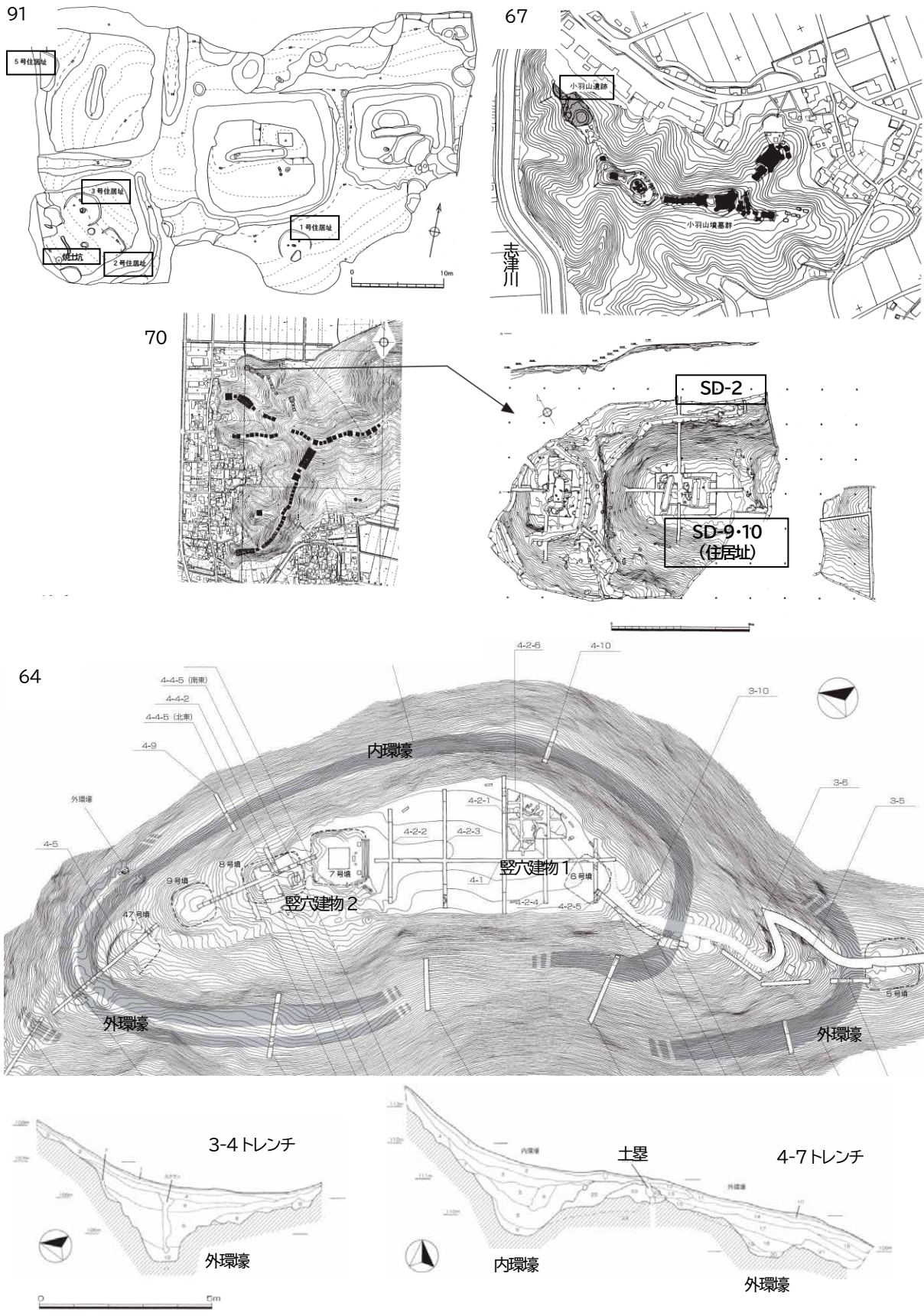


図6 福井県の高地性集落 (弥生時代中期後葉～後期中葉 (64 弁財天古墳群、67 小羽山遺跡、70 盆山古墳群、91 舞崎遺跡))

石川県における弥生時代集落動態

－「高地性集落」抽出を目的として－

鈴木 静華（(公財) 石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

昭和 55（1980）年、石川県かほく市（旧宇ノ気町）で実施された鉢伏茶白山遺跡の発掘調査は、北陸初となる典型的な高地性集落の存在を明らかにした。北陸地域は長らく弥生時代の高地性集落分布が希薄な地域と認識されていたが、この発見を契機として、当該地域の高地性集落研究は急速に発展を見せた。しかし、令和 6（2024）年に行われたシンポジウム『「高地性集落」論のいま—半世紀ぶりの研究プロジェクトの成果と課題—』では、多くの研究者が、従来の「高地性集落」の認識を改め、その定義を再検討する必要があるという立場をとっており、遺跡動態の中に「高地性集落」を位置づけることが求められている。

以下では、石川県内の縄文時代晩期～古墳時代前期前葉の集落遺跡を悉皆的に集成した成果から、石川県域における「高地性集落」動態を中心に考察を試みたい。

遺跡の比高と立地地形からみる集落動態

石川県内の縄文時代晩期～古墳時代前期前葉の集落遺跡 504 遺跡（1249 地点）の比高データと遺跡が立地する地形から、A：低所に立地する集落、B：高所に立地する集落、C：「高地性集落」、の 3 つに大別して検討を行った。なお、本報告の時期区分は、環日本海交流史研究会事務局で作成した編年案（表 1）に準ずる。

設定した 5 つの小地域ごとに検討を行った結果、小地域ごとに集落数に差はあれども、弥生時代後期後葉段階で集落数が急増するというのは、石川県域全体に共通する傾向といえる。また、A：低所に立地する集落・B：高所に立地する集落・C：「高地性集落」を分類する根拠となる数値は小地域ごとに異なり、遺跡数も地域間で大きく差異が生じていることがわかった（図 2～5）。このことから、「小地域ごとの地勢的特徴や環境に対応した立地を選択している」（林 2023）ことを裏付ける結果が得られたといえるだろう。

次に、石川県内の「高地性集落」動態を概観してみる。本報告で「高地性集落」として抽出したのは、25 地点（18 遺跡）である（図 1）。石川県域全体でみると、「高地性集落」の初現は弥生時代中期後葉の中能登町杉谷チャノバタケ遺跡（口・中能登地域）となる。続いて、弥生時代後期前葉の志賀町北吉田フルワ遺跡（奥能登地域）が挙げられる。弥生時代後期後葉になると、「高地性集落」数はピークを見せ、県域全体に分布するようになるが、なかでも、北加賀①地域にやや偏在性を見いだすことができる。同時期の代表的な「高地性集落」の例として、鉢伏茶白山遺跡、かほく市大海西山遺跡、金沢市観法寺墳墓群（北加賀①地域）や小松市河田山遺跡、加賀市吸坂丸山遺跡（南加賀地域）などが挙げられる。弥生時代終末期になると、「高地性集落」の分布の中心は北加賀①地域から南加賀地域に移る。従来、北陸地域の「高地性集落」の受容過程として、弥生時代後期以降に分布域が徐々に東方へと拡大し、終焉時期も東方がより遅くなる、と認識されてきたが、実際には加賀地方より先行して能登地方に「高地性集落」が出現していることがわかる。

遺跡数の増減と「高地性集落」出現

人口（≒本報告では遺跡数）の増減と「高地性集落」の出現の相関関係（図6）を考える。なお、若林邦彦氏が指摘するように、遺跡数の変化を厳密に比較するためには、本来は各相対編年期間の暦年代を考慮し、補正の必要がある（若林 2022）ことを予めことわっておく。

石川県域全体では、集落数急増の画期と「高地性集落」の増加の画期を、ともに弥生時代後期後葉に見いだすことができ、概ね相関関係を示すようにみえる。しかし、小地域ごとにみると、相関関係をみせない奥能登地域、口・中能登地域と、相関関係をみせる北加賀①・北加賀②地域と南加賀地域に大別することができ、必ずしも遺跡数が増加した時期に「高地性集落」が出現・増加するわけではないことがわかる。また、弥生時代後期中葉までは三角州や谷底平野などの低所に形成される集落が全体の大半を占めるのに対して、後期後葉以降になると中位段丘や丘陵上に形成される集落や「高地性集落」が増加する傾向にある。これらは弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉にかけて、集落の立地する地形・地勢が多様化する現象がみられると評価することができる。

遺構・遺物組成からみる「高地性集落」の諸特徴

本報告で「高地性集落」として抽出した遺跡間に共通する特徴は、意外にも少ない。先行研究の中でも早くから指摘されているように、低所立地集落と「高地性集落」間を比較すると、類似する構造をもつものが多いといえる。そこで、以下では、遺構や遺物の組成を主な根拠として、「高地性集落」と低所／高所に立地する集落の相違点をまとめてみたい。

まず、「高地性集落」とした25地点（18遺跡）中8地点に認められる特徴として、環壕を有することが挙げられる。環壕（濠）は、低地の大規模拠点集落にもみられるため、必ずしも「高地性集落」に特有のものではない。しかし、北加賀①地域や南加賀地域では、「高地性集落」が出現・増加する弥生時代後期後葉～終末期に、環壕が高所にやや偏在する現象がみえる（図7）。環壕の機能については諸説あるためここでは触れないが、弥生時代後期後葉に環壕が高所に偏在する現象は、「高地性集落」の増加と相関を示し、環壕の有無は「高地性集落」の機能を考える上で重要な視点であるといえるだろう。

次に、「高地性集落」として著名な鉢伏茶臼山遺跡を例に、「高地性集落」と低所に立地する遺跡の遺構・遺物組成を比較する。鉢伏茶臼山遺跡は、北加賀①地域に所在する、低丘陵腹部から頂部にかけて営まれた弥生時代後期後葉の集落遺跡である。遺跡内では、丘陵高所の環壕がまわるエリアと、丘陵腹部の環壕をもたないエリアの2つの居住域が確認されている。丘陵高所のエリアは、断面V字形の環壕によって囲まれ、竪穴建物の他に土坑や段状遺構が確認されている。丘陵腹部のエリアは調査成果が未報告のため詳細は不明だが、丘陵高所の居住域と同時期とみられる竪穴建物や大型土坑が検出されているようである。また、近隣に営まれた集落として、鉢伏カクチ遺跡が挙げられる。鉢伏カクチ遺跡は、鉢伏茶臼山遺跡と同一丘陵に所在する、弥生時代終末期の集落である。同遺跡では、竪穴建物と円筒土坑が確認されており、居住域からは土器が出土している（表2）。この近接する3つの居住域の様相を比較すると、遺構の組成には大きな差異が認められないが、遺物組成は異なる部分が認められる。鉢伏茶臼山遺跡では、環壕に囲まれた居住域から、磨製石斧などの木工具、石鏃などの武器類（もしくは狩猟具）の出土が確認されており、生業活動や防衛機能との関連性を考えることができるだろう。

おわりに

本報告では、石川県内の縄文時代晩期～古墳時代前期前葉の集落遺跡を悉皆的に集成し、水田可耕地との比高と立地する地形、遺構・遺物の組成という2つの観点から、「高地性集落」の特異性について検討を行った。その結果、各地域で比高や遺跡の立地をもとに集落を類型化することは可能だが、基準となる高さは地域ごとに異なることが明らかになった。また、「高地性集落」全体に共通してみられる特徴はほぼ皆無である点からも、「高地性集落」の性格は多岐にわたるのであろうと推定することができる。今後は、遺跡の立地する地点の微地形も踏まえたより詳細な検討が求められることとなるだろう。今回は事実記載に終始することとなってしまったが、本報告がその礎となればよいと思う。

林大智氏には本報告を構成するにあたってご指導を賜った。末筆にて御礼申し上げる。

主要参考文献 ※紙面の都合上、発掘報告書は「高地性集落」集成に関わるものを除いて割愛

- 石川県立埋蔵文化財センター（編）1993『北吉田遺跡群』
- 伊藤雅文（編）2003『倉見オウラント遺跡』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 萩中正和（編）1990『吸坂丸山古墳群』加賀市教育委員会
- 折戸靖幸（編）1992『高松町大海西山遺跡』高松町教育委員会
- 樫田誠（編）2022『河田山遺跡群 上八里遺跡群』小松市（小松市埋蔵文化財センター）
- 木田清 1997「古墳時代以前の集落」『加賀 能美古墳群』寺井町教育委員会 pp309-328
- 小森秀三・萩中正和（編）1988『小菅波遺跡』加賀市教育委員会
- 竹田学（編）1991『津幡町七野ムカイヤマ遺跡』津幡町教育委員会
- 田嶋明人ほか（編）1987『敷地天神山遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋正和ほか（編）1982『敷地町後方遺跡発掘調査報告』加賀市埋蔵文化財調査報告書 10 加賀市教育委員会
- 田嶋正和・中村準一（編）1984『敷地平野山古墳群－詳細分布報告書－』加賀市埋蔵文化財調査報告書 12 加賀市教育委員会
- 谷口明伸（編）2008『堅田 C 遺跡』金沢市文化財紀要 248 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
- 出越茂和・谷口宗治ほか（編）2006『石川県金沢市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ ～泉本町 7 丁目遺跡、寺中 B 遺跡、堅田城跡、妙国寺門前、二口六丁 B 遺跡～』金沢市文化財紀要 236 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）
- 栃木英道ほか（編）1995『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2021「北吉田フルワ遺跡の高地性集落について」『石川県埋蔵文化財情報』45（公財）石川県埋蔵文化財センター pp49-60
- 林大智 2023「北陸の高地性集落と鉄製武器の普及－集落動態からの位置づけと鉄製武器の保有形態－」『古代文化』74-4 古代学協会 pp63-70
- 藤田邦夫・宮下栄仁（編）1987『宿向山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 松田英博（編）2005『鉢伏茶白山遺跡（Ⅱ）埋蔵文化財分布調査報告書』かほく市教育委員会
- 望月精司・津田隆志ほか 2004『八里向山遺跡群』小松市教育委員会
- 安英樹（編）1998『金沢市額谷遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 安中哲徳・横山誠（編）2006『額谷遺跡』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 安中哲徳 2023a「観法寺墳墓群」『令和 4 年度発掘報告会 いしかわを掘る』（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 安中哲徳 2023b「観法寺墳墓群」『石川県埋蔵文化財情報』49（公財）石川県埋蔵文化財センター pp11-14
- 吉岡康暢・河村好光ほか 1997『加賀 能美古墳群』寺井町教育委員会
- 米沢義光（編）1987『宇ノ気町鉢伏茶白山遺跡』河北郡宇ノ気町教育委員会
- 若林邦彦 2022「大阪平野における弥生時代以後の集落移動頻度の検証－弥生時代高地性集落理解の前提として－」『古代文化』74-2 古代学協会 pp76-82

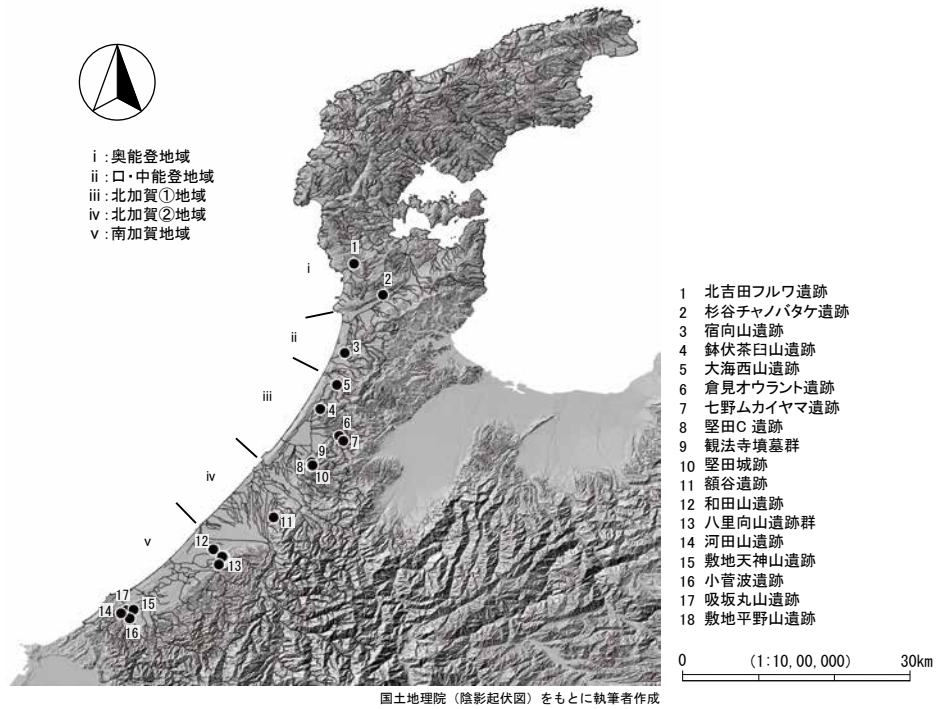


図1 石川県域における「高地性集落」分布

表1 各地の編年対応案（事務局作成）

時代	暦年代	石川県		北部九州	周防・長門	瀬戸内	山陰	近畿	東海	中央高地	越後	東北	
		型式名	小地域編年										
縄文時代	晩期	-600	長竹(古)	夜臼Ⅱa		津島岡大	古市河原田	船橋	五貫森(新)	女鳥羽川	鳥屋1	大洞A(古)	
	弥生時代	前期	-500	長竹(新)	夜臼Ⅱb/ 板付Ⅰa 板付Ⅰb・ 板付Ⅱa	前期Ⅰ-1 前期Ⅰ-2	沢田 津島 南溝手	古海 Ⅰ-1	長原/ Ⅰ(古)	馬見塚	離山	鳥屋2a	大洞A(新)
-400			柴山出村1	八日市地方1	板付Ⅱb	前期Ⅱ 前期Ⅲ-1	高尾	Ⅰ-2 Ⅰ-3	Ⅰ(中)	貝殻山南 樫王	氷Ⅰ(古) 氷Ⅰ(中) ・(新)	鳥屋2b	大洞A'
-350			柴山出村2	八日市地方2	板付Ⅱc	前期Ⅲ-2	門田	Ⅰ-4	Ⅰ(新)	西志賀 水神平	氷Ⅱ	緒立1	砂沢
-300			柴山出村3	八日市地方3	城ノ越(古) =金海	中期Ⅰ	中期Ⅰ-1		Ⅱ-1				
-250		矢木ジワリ	八日市地方4 八日市地方5	城ノ越(新) =KⅡa	中期Ⅱ-1	中期Ⅰ-2		Ⅱ-1・2	朝日 岩滑	新諏訪町	緒立2		
-200		小松式	八日市地方6	須玖Ⅰ(古) =KⅡb	中期Ⅱ-2	中期Ⅰ-3		Ⅱ-3	貝田町1 古井堤	(松節) 境窪	+		垂柳3 杵形(団) 南御山2
-150			八日市地方7 八日市地方8			中期Ⅱ-1 中期Ⅱ-2	Ⅲ-1	Ⅲ-1 Ⅲ-2	貝田町2 瓜郷	栗林1	吹上Ⅰ 下谷地(古)		
-100		磯部運動公園	八日市地方9	須玖Ⅰ(新) =KⅡc	中期Ⅲ	中期Ⅱ-3	Ⅲ-2	Ⅳ-1 Ⅳ-2	貝田町3 古井	栗林2(古)	下谷地(新)		宇津ノ台 十三塚 川原町口
-50		専光寺 養魚場	八日市地方10	須玖Ⅱ(古) =KⅢa	中期Ⅳ-1	中期Ⅱ-4 中期Ⅲ-1	Ⅳ-1	Ⅳ-3		栗林2(新)	吹上Ⅱ(古)		
0		戸水B		須玖Ⅱ(新) =立岩	中期Ⅳ-2	中期Ⅲ-2	Ⅳ-2	Ⅳ-4	Ⅳ-4 Ⅳ-5(高蔵)	栗林3	吹上Ⅱ(新) 山草荷		江俣
50	猫橋	V-1 V-2 V-3	高三瀧(古) 高三瀧(新)	後期Ⅰ-1 後期Ⅰ-2	後期Ⅰ-1 後期Ⅰ-2 後期Ⅰ-3		V-1	V-0 V-1 V-2	八王子古宮 山中Ⅰ-1 山中Ⅰ-2 山中Ⅰ-3	1期(吉田) 2期(古) 2期(新)	シンボ編年1	天王山	
100		法仏	漆町2-1群 漆町2-2群	下大隈(古)	後期Ⅱ-1	後期Ⅱ-1 後期Ⅱ-2		V-2	V-3	山中Ⅱ-1 山中Ⅱ-2	3期(古)	シンボ編年2	屋敷・明戸
150	漆町3-1群		下大隈(新)	後期Ⅱ-2	後期Ⅲ-1 後期Ⅲ-2 後期Ⅲ-3		V-3	Ⅵ-1 Ⅵ-2	廻間Ⅰ-1	3期(中)	シンボ編年3		
200	月影	漆町3-2群 漆町4群	I A	終末期Ⅰ	終末期1 終末期2		V-4 草田4	庄内0	廻間Ⅰ-2 廻間Ⅰ-3	3期(新)	シンボ編年4	赤穴	
250		白江	漆町5群 漆町6群	I B	終末期Ⅱ	終末期3 吉備1		草田5	庄内1 庄内2	廻間Ⅰ-4 廻間Ⅱ-1 廻間Ⅱ-2	4期 (御座敷)	シンボ編年5	土師器Ⅰ-1
300	古府クルビ		漆町7群	Ⅱ A Ⅱ B	前期Ⅰ-1	前期Ⅰ-1 吉備2		草田6(古) 草田6(新)	布留0(古) 布留0(新)	廻間Ⅱ-3	5期(古)	シンボ編年6	土師器Ⅰ-2

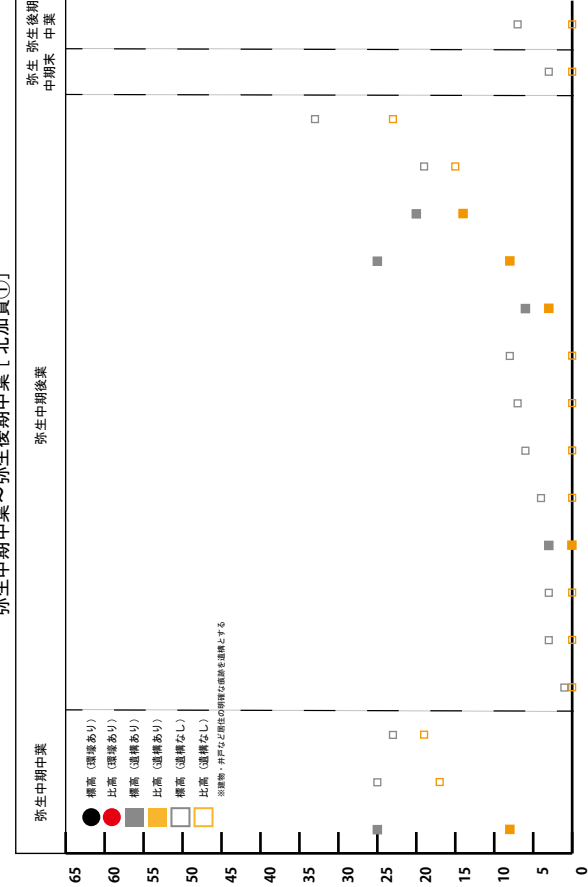
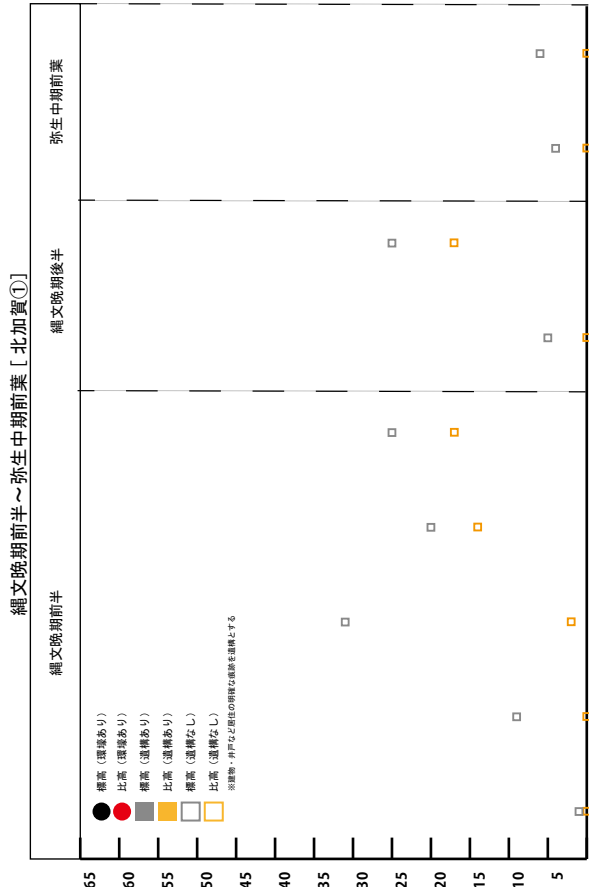


図2 標高・比高の相関関係と遺跡分布 [北加賀①]1

弥生後期後葉～古墳前期前葉 [北加賀①]

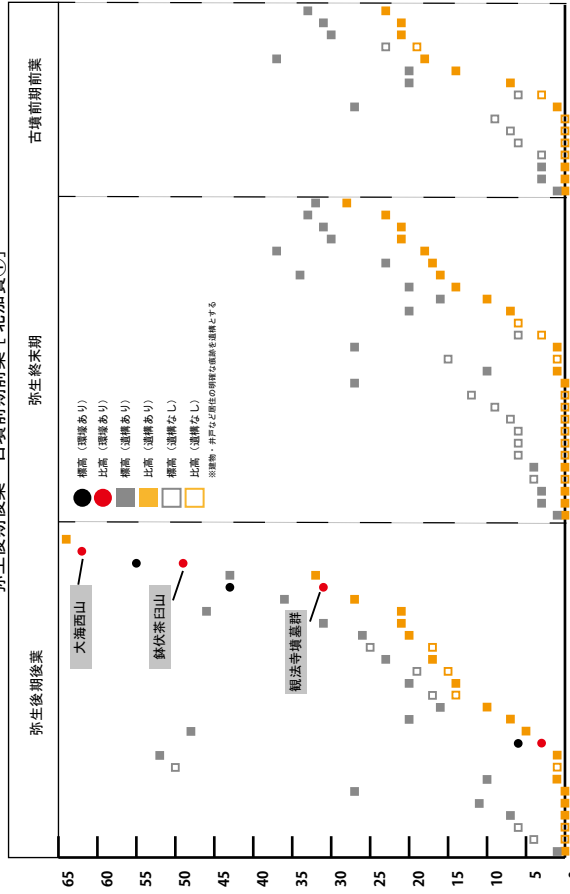


図3 標高・比高の相関関係と遺跡分布 [北加賀①]2

縄文晩期前半～弥生中期前葉 [南加賀]

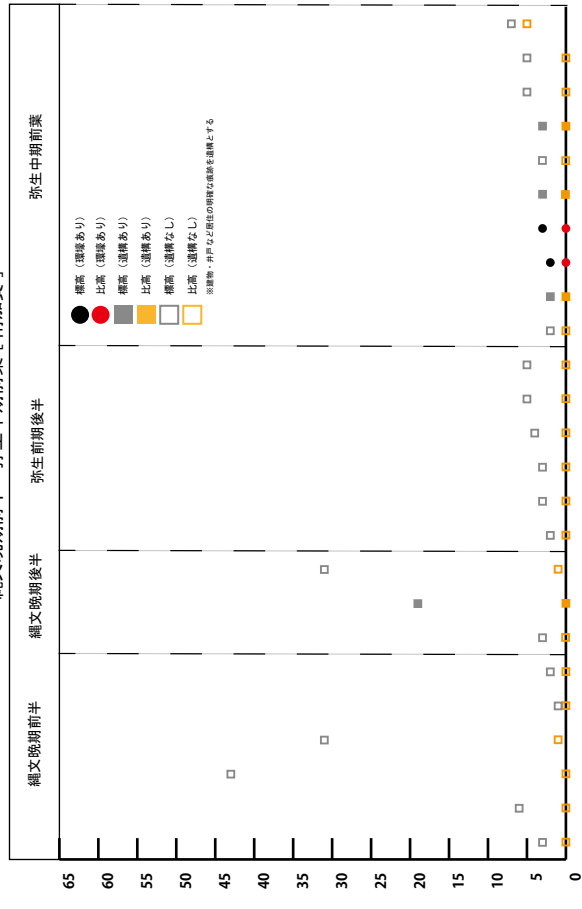
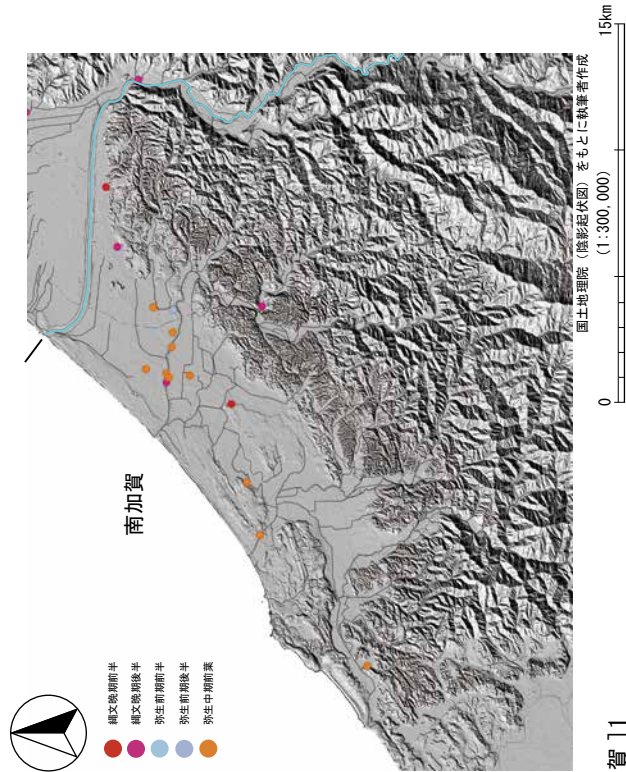
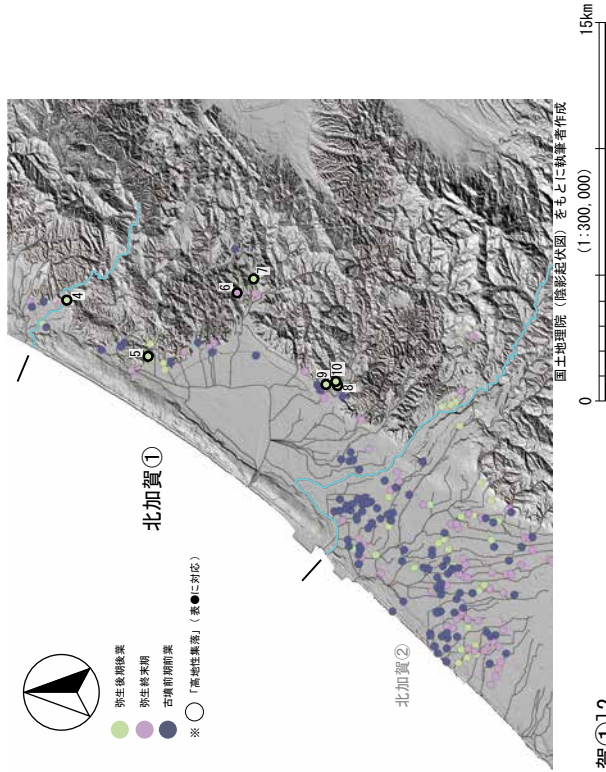
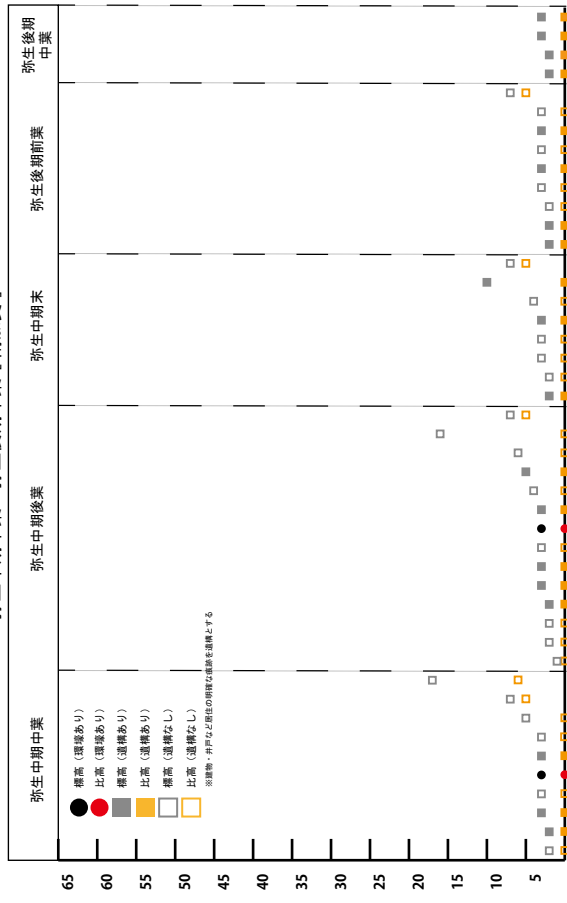


図4 標高・比高の相関関係と遺跡分布 [南加賀]1



弥生中期中葉～弥生後期中葉 [南加賀]



弥生後期後葉～古墳前期前葉 [南加賀]

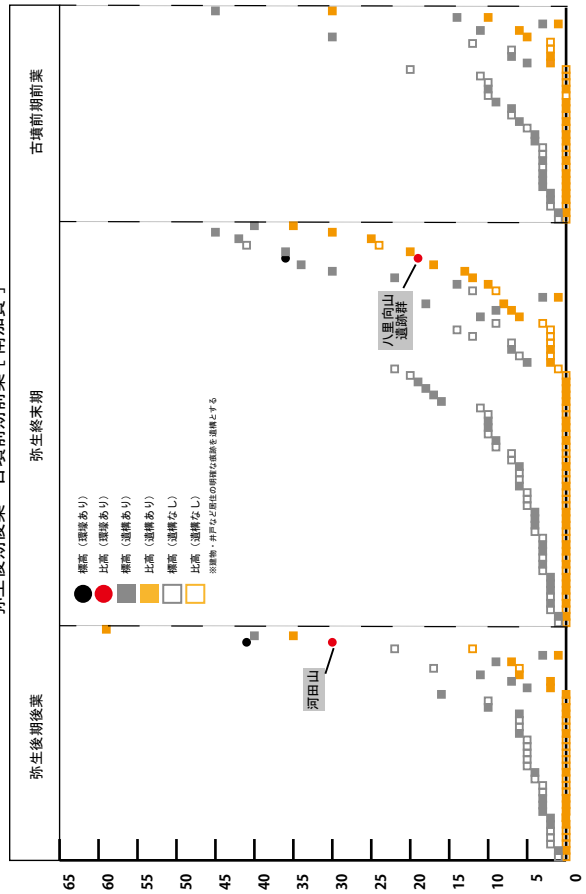
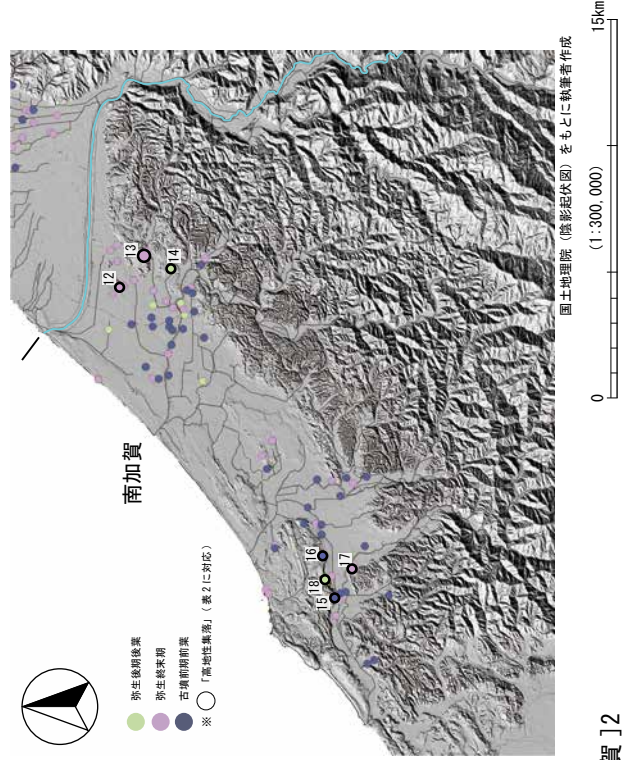
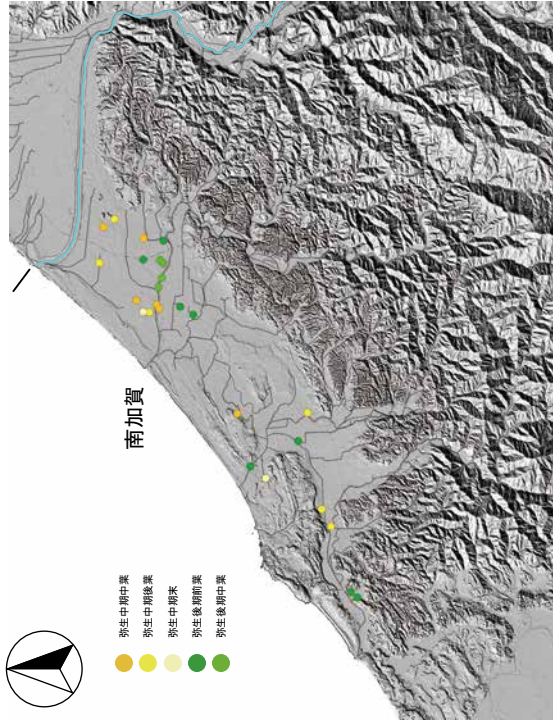


図5 標高・比高の相関関係と遺跡分布 [南加賀] 2



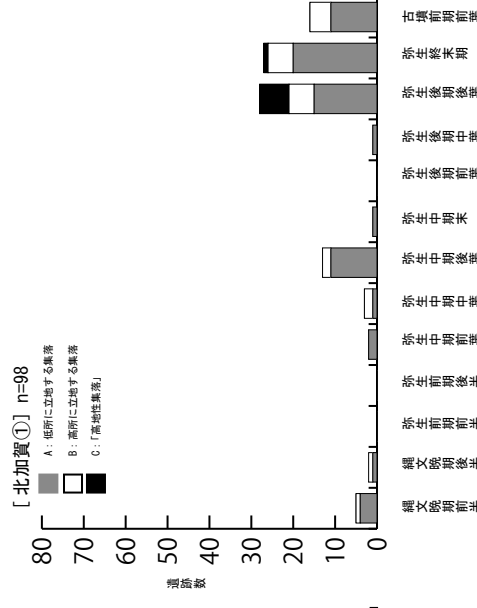
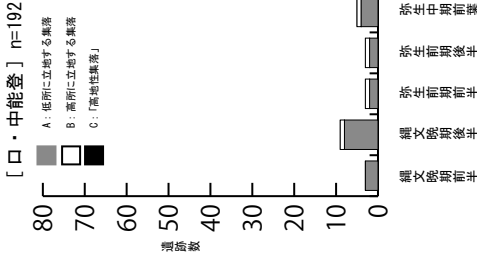
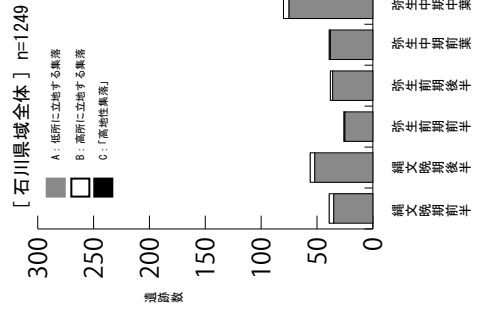


図6 時期ごとの遺跡数の変遷

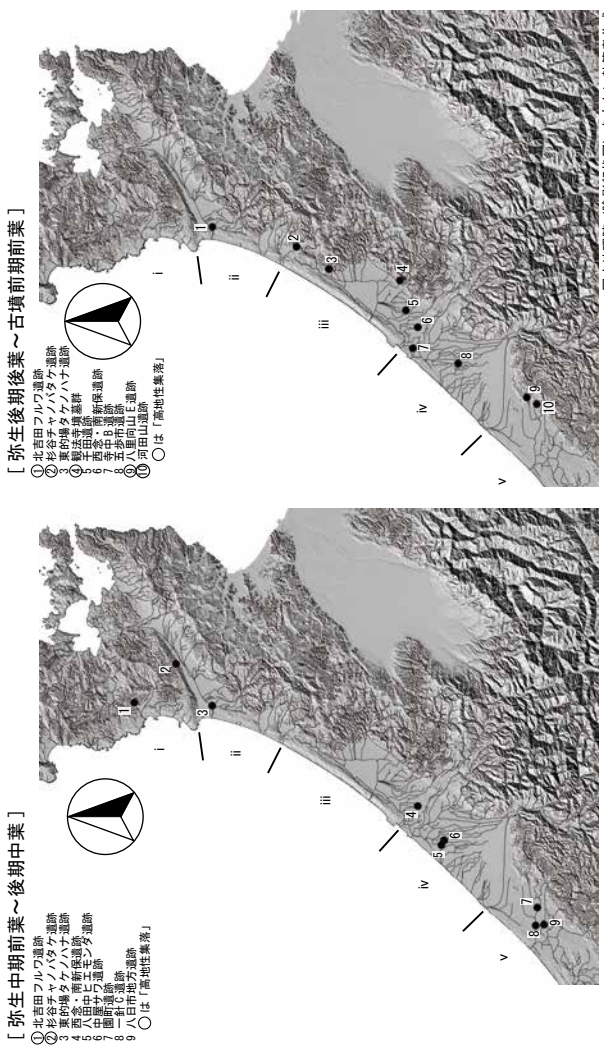


図7 環壕(濠)をもつ集落の分布

表2 鉢伏茶臼山遺跡と周辺遺跡の比較

	鉢伏茶臼山遺跡		鉢伏カクチ遺跡
	環壕内	環壕外	
比高(標高)	49m(55m)	36m(50m)	20m(26m)
建物	竪穴建物×15	竪穴建物×3	竪穴建物×1
環壕	○(断面V字)	×	×
その他の遺構	段状遺構、土坑	大型土坑	円筒土坑
出土遺物	土器 磨製石斧・石鏃 鉄器片・銅塊	土器	土器
備考	建物規模：主柱六間の距離で1.8～2.5m	未報告のため詳細不明	建物規模：主柱六間の距離で4.3m

富山県の弥生時代比高差のある集落と環濠のある集落について

細辻嘉門（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

富山県の概要

（１）集落遺跡の分布状況

- ア 弥生時代の遺跡総数 198 遺跡、このうち墳墓を除いた集落・散布地は 180 遺跡を対象とした。小矢部川右岸中流域、庄川左岸中流域、黒部川右岸は平野、高所とも空白地帯である。
- イ 弥生時代前期から終末期まで続く集落は皆無で、弥生時代を通じて遺物が確認できるのは大境洞窟だけである。
- ウ 縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては遺跡が減少する。一方で水田耕作に不向きと考えられる山間部で、弥生時代前期・中期の遺物が見つまっている（町田 2019）。
- エ 弥生時代中期中葉以降、平野に遺跡が増加する。
- オ 弥生時代後期前半に遺跡数が減少する。天王山系（東北系）の土器が確認される遺跡がある（藤田 2013）。
- カ 弥生時代後期後半から遺跡数が増加する。比高差 10 m 以上の高所にも集落が展開する。
- キ 弥生時代終末期に遺跡数はピークを迎える。平野に拠点集落があり、丘陵部に分村か。ただし千坊山遺跡のように比高差のある丘陵の大規模集落（竪穴建物 24 棟確認）もある。比高差の大きい集落は減少する。
- ク 古墳時代前期には集落遺跡数が減少し、40 m 以上の比高差のある集落も消滅する。

（２）比高差がある集落

- ア 平野から 10 m 以上の比高差がある立地の集落遺跡を 27 遺跡確認した。そのうち比高差が 40 m 以上ある立地の集落遺跡が 12 遺跡である。丘陵頂部や台地の舌状端部に立地する。
- イ 10 m 以上の比高差がある立地の集落でも、比高差 10 m から 27 m までと、比高差が 46 m 以上の立地に二分される。湯上 B 遺跡（標高 68 m、比高 49 m）より比高差の大きい集落の本発掘調査事例がなく、比高差の大きい立地の集落の性格や実態は不明である。
- ウ 比高差がある立地の遺跡は、ほとんどが竪穴建物 5 棟程度の小規模で存続期間が短い集落である。水害等から緊急避難する目的で営まれたか。
- エ 比高差が大きい集落では、武器や武具は現在のところ出土していない。

（３）環濠のある集落

- ア 環濠のある遺跡は、調査報告書で環濠と明記される 3 遺跡（白鳥城跡、日宮城跡、新堀西遺跡）のほか、規模や断面からみてその可能性が考えられる 12 遺跡を提示した。中期後葉に出現し、後期前半までは比高差のない遺跡にみられ、後期後半～終末期には比高差のある遺跡にも環濠が掘られる。
富山県は平野の中を急流河川が網の目のように流れるため流路を自然の環濠としている可能性がある。

（４）その他

- ア 盾出土が 2 遺跡、弓出土が 2 遺跡、短甲出土が 1 遺跡、鉄器出土が 3 遺跡、鏡出土が 4 遺跡である。平野や、比高差が小さい集落から出土する。
- イ 墓は、中期は集落付近の平野（石塚、千石町）に造られる。後期後半に集落と離れた比高差のある場所に方形周溝墓、大型墳丘墓（杉谷 A、王塚・千坊山遺跡群）が立地する。

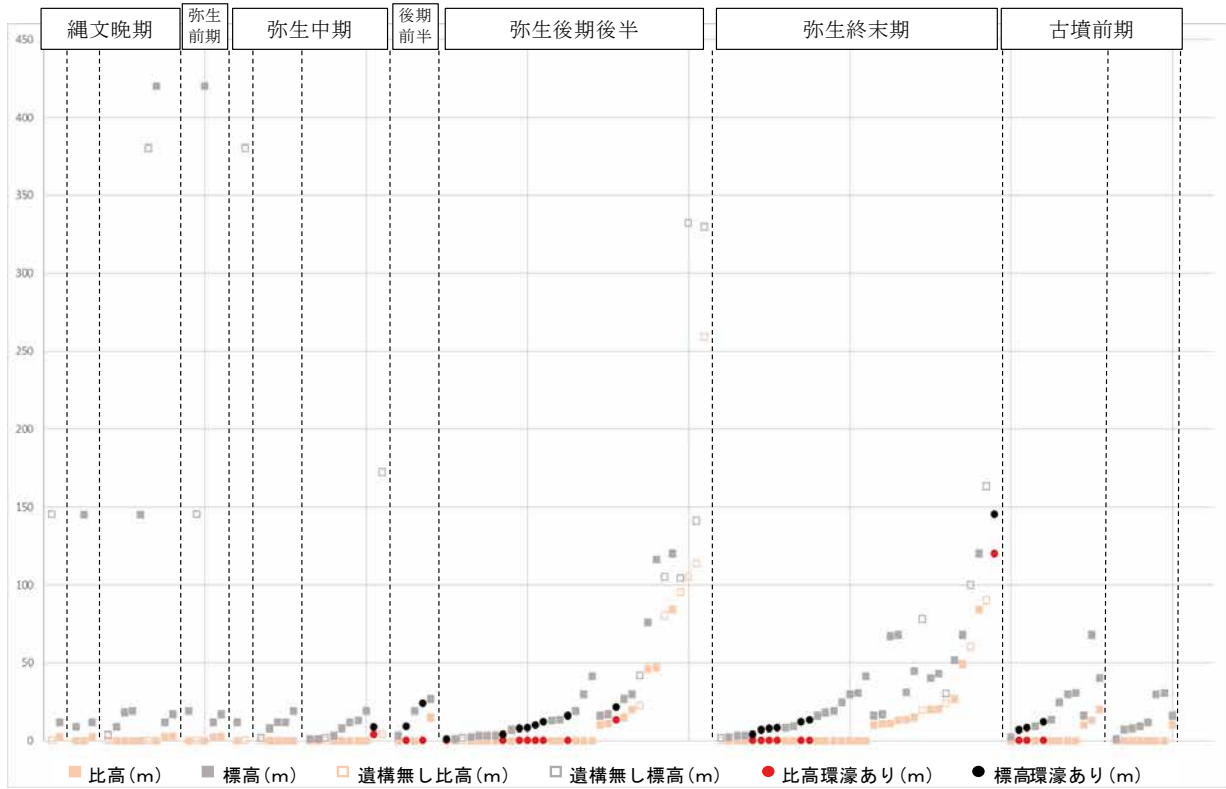


表1 富山県の弥生時代比高のある集落と環濠のある集落比高・標高

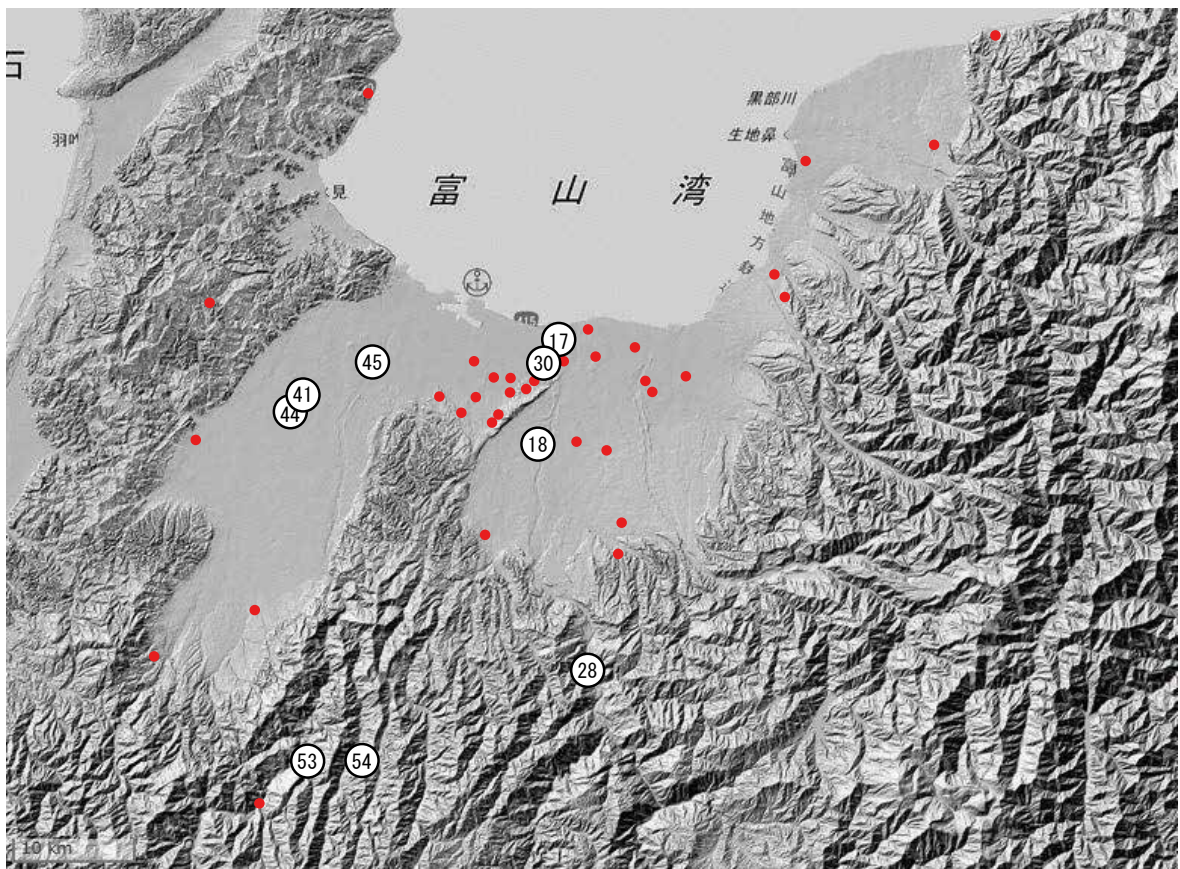


図1 富山県縄文時代晩期集落遺跡分布図 (国土地理院陰影起伏図を基に作成)

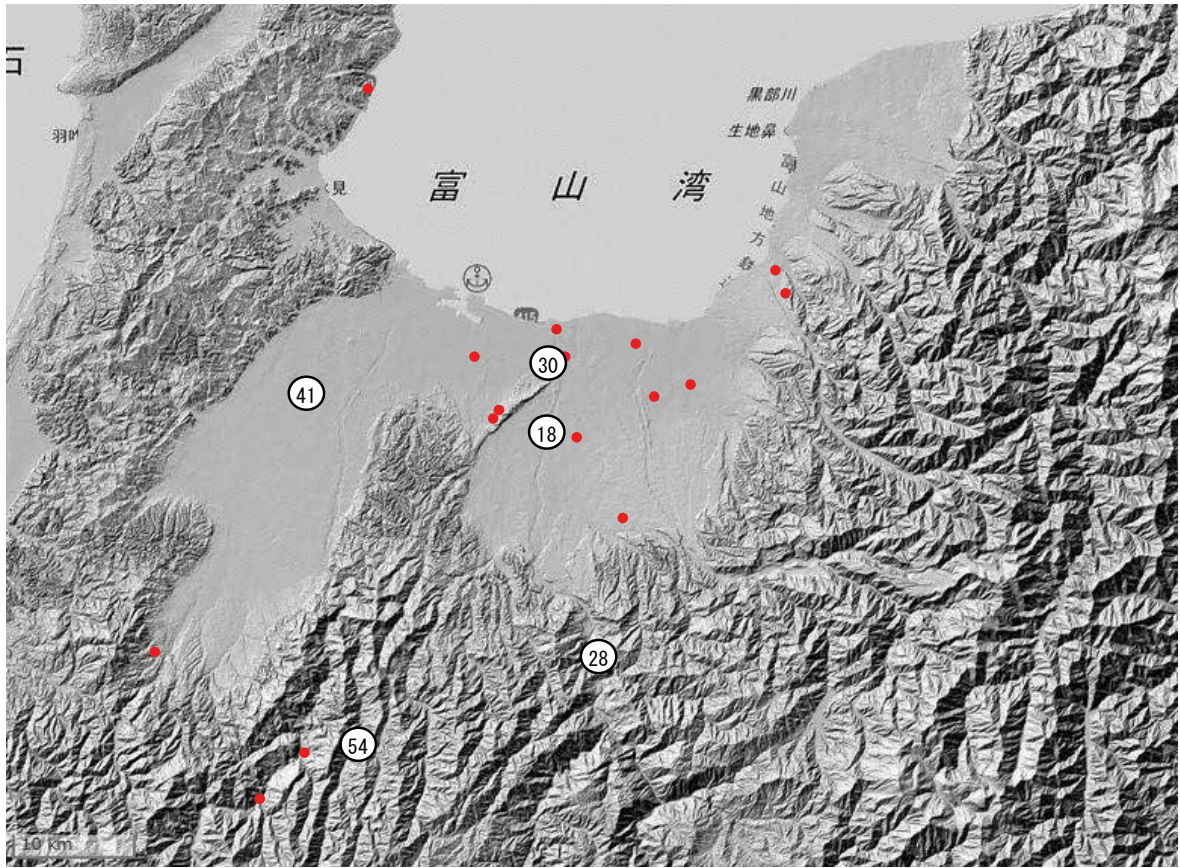


図2 富山県弥生時代前期集落遺跡分布図（国土地理院陰影起伏図を基に作成）

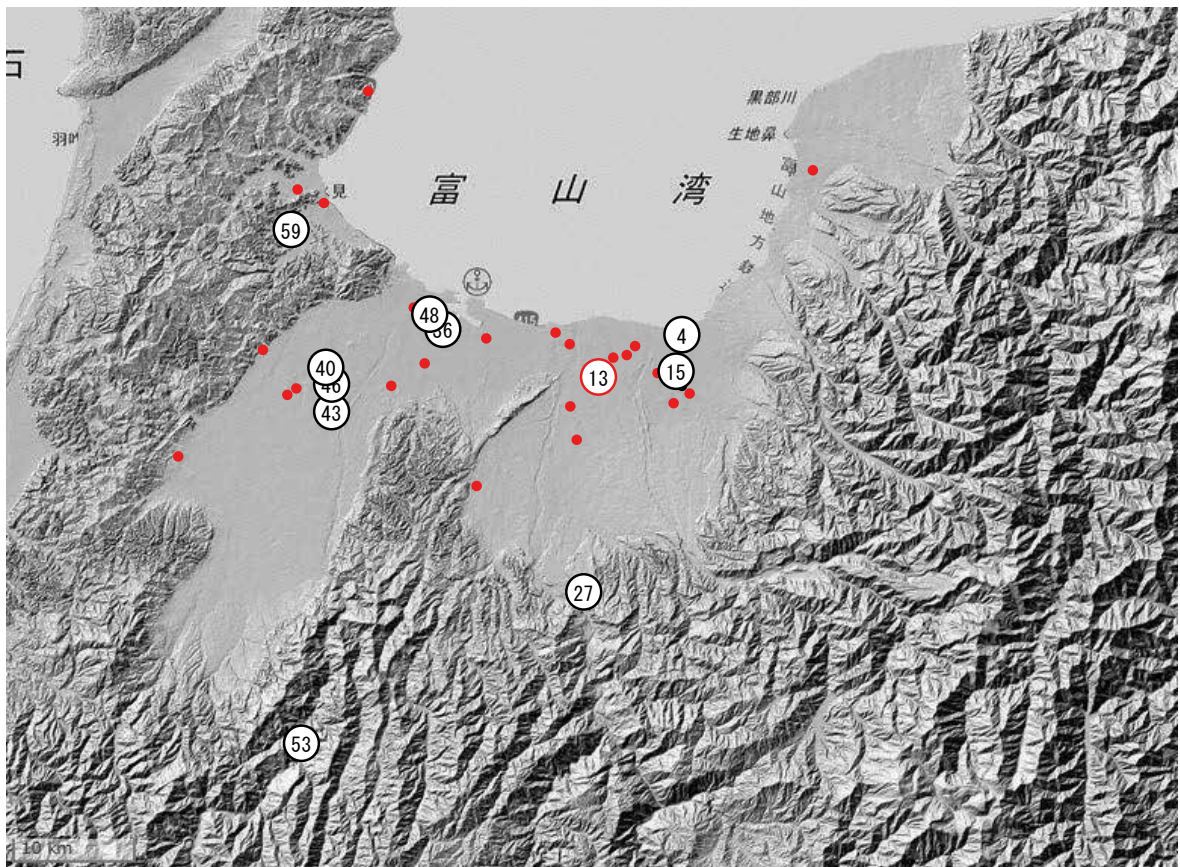


図3 富山県弥生時代中期集落遺跡分布図（国土地理院陰影起伏図を基に作成、赤丸は環濠のある集落）

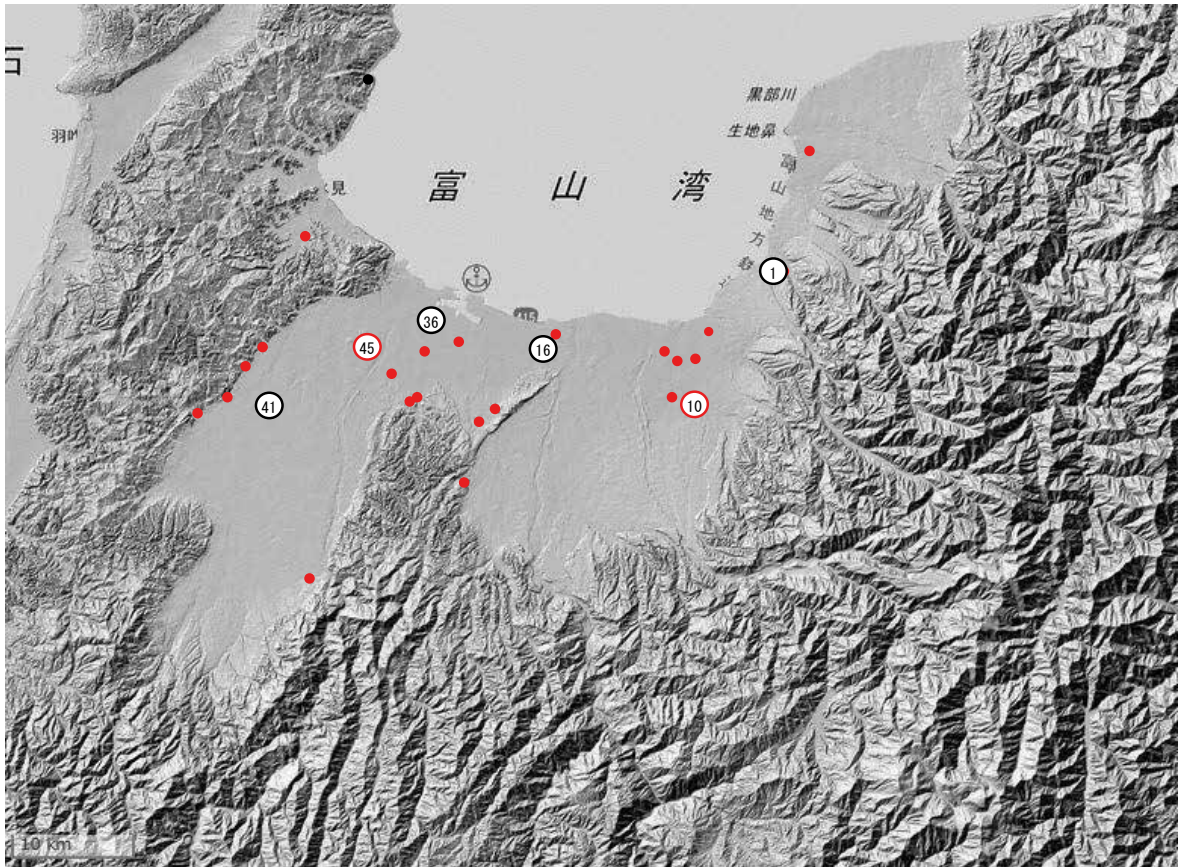


図4 富山県弥生時代後期前半集落遺跡分布図（国土地理院陰影起伏図を基に作成、赤丸は環濠のある集落）

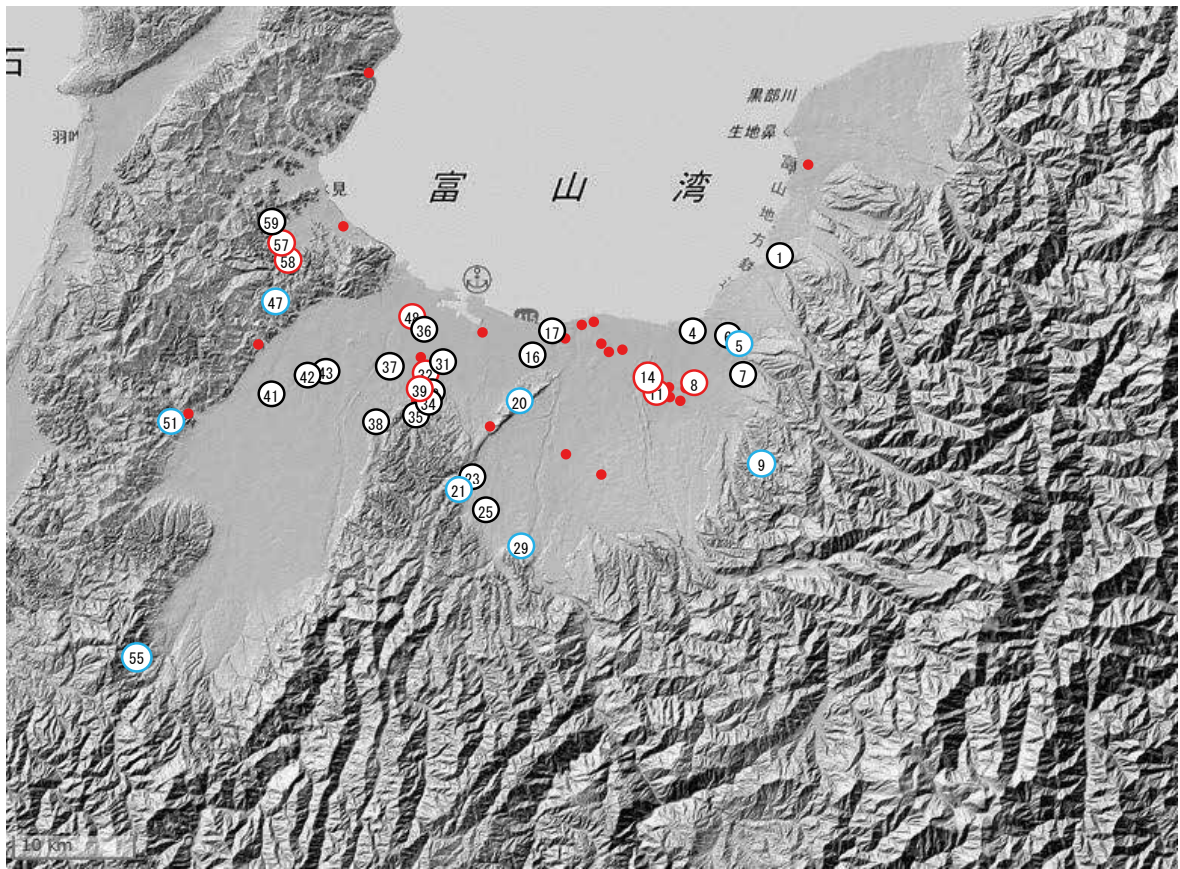


図5 富山県弥生時代後期後半集落遺跡分布図（国土地理院陰影起伏図を基に作成、青は比高差の大きい集落 赤は環濠）

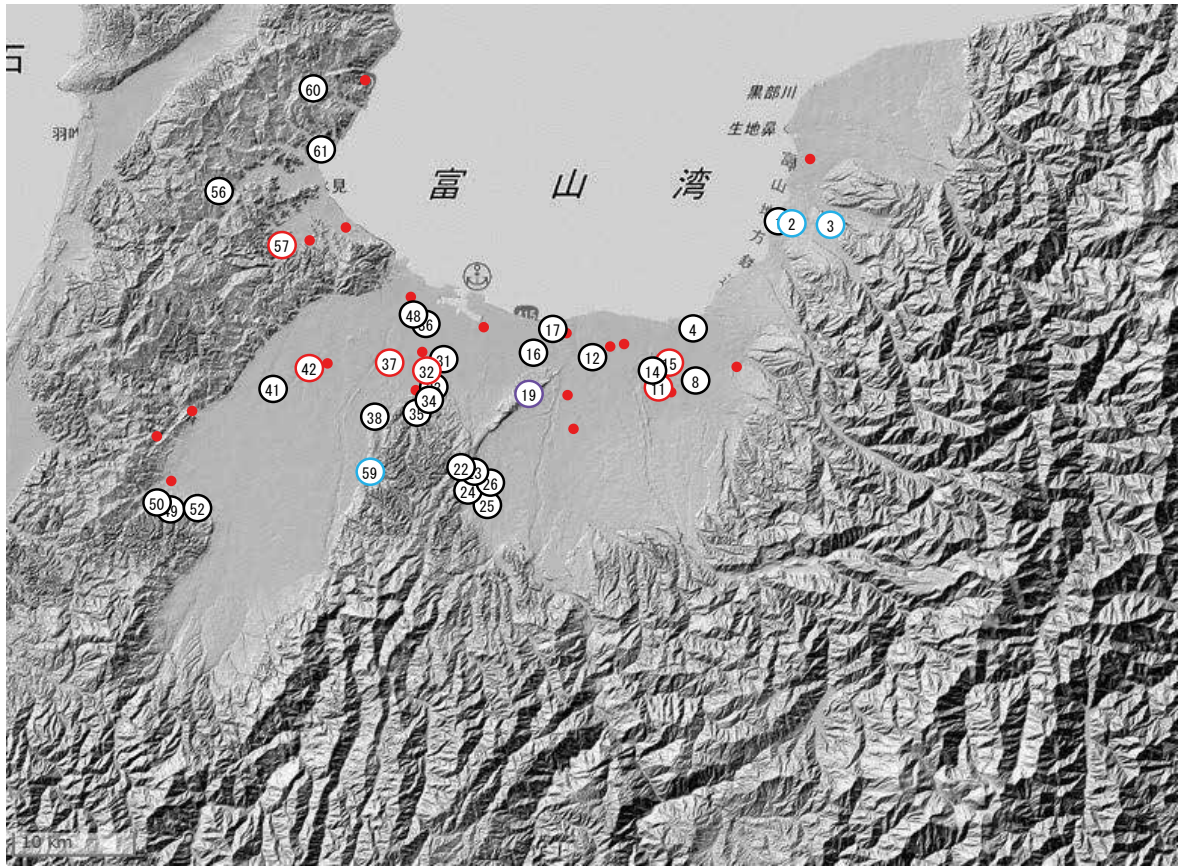


図6 富山県弥生時代終末期遺跡分布図（国土地理院陰影起伏図を基に作成、青は比高差の大きい、赤は環濠、紫は両方）

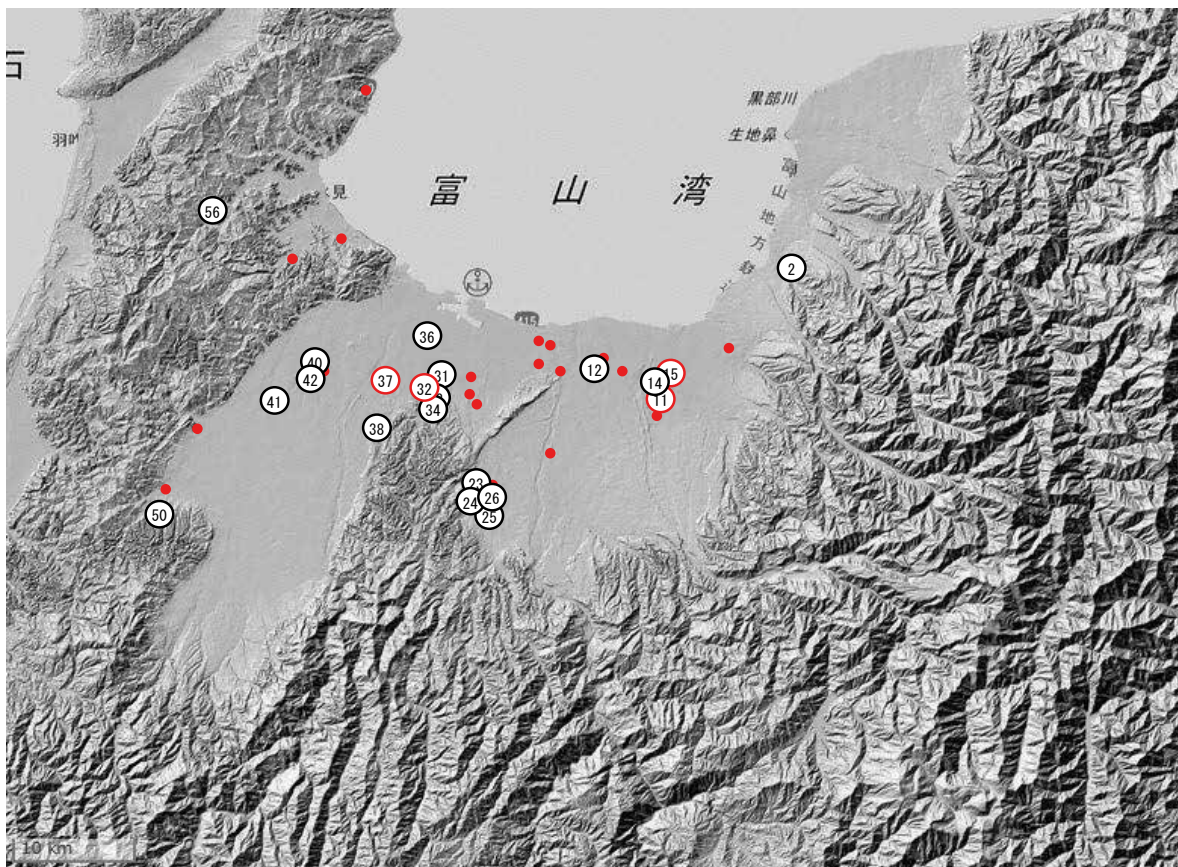


図7 富山県古墳時代前期集落遺跡分布図（国土地理院陰影起伏図を基に作成、赤丸は環濠のある集落）

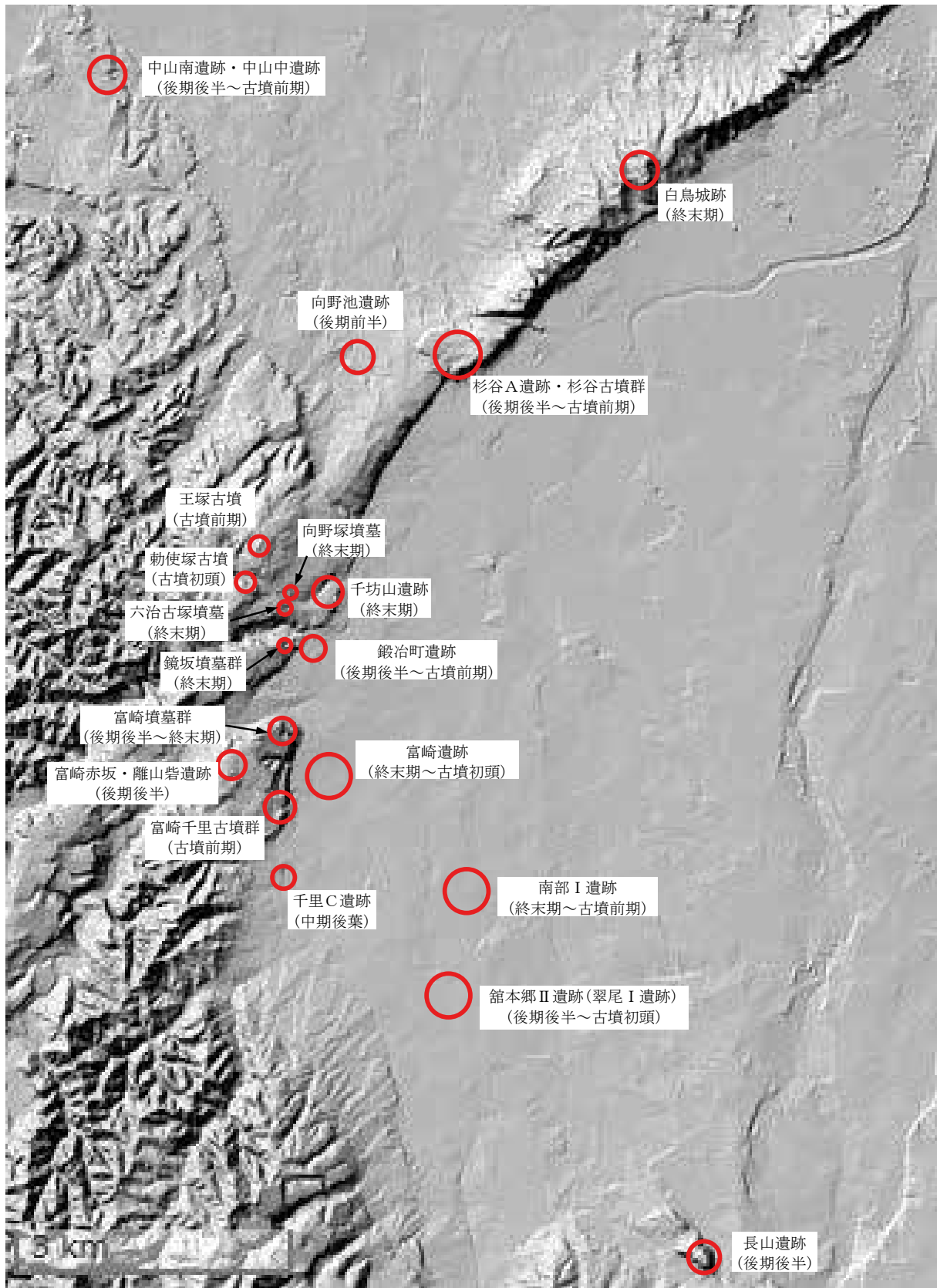


図8 婦負の弥生時代遺跡分布図

	遺跡名	所在地	時期	立地	標高(m)	比高(m)	遺構	環濠	墓域	備考	
1	佐伯	魚津市	弥生後期後半	台地	27	15	○	×	×	比高差のある集落	
2	湯上B		弥生終末期	台地	68	49	○	×	×	比高差のある集落	
3	天神山城		弥生終末期	山頂	163	90	×	×	×	高地性集落・山城	
4	魚飼	滑川市	弥生中期中葉～終末期	平野	2	0	×	×	×	拠点？手焙形土器	
5	本江扇平		弥生後期後半	台地	105	80	×	×	×	高地性集落？	
6	本江下石山		弥生後期後半	台地	41.7	22.4	×	×	×	比高差のある集落？	
7	砂林開北	上市町	弥生終末期	台地	43.2	20.4	○	×	×	比高差のある集落	
8	江上A		弥生後期前半～終末期	平野	16	0	○	○	○	拠点？環濠集落？仿製鏡(中小泉)・墓域(飯坂)	
9	大観峰	立山町	弥生後期後半	山頂	329.7	259	×	×	×	高地性集落？	
10	辻		弥生後期前半	平野	24	0	○	○	×	環濠？	
11	塚越 I	舟橋村	弥生後期後半～古墳前期初頭	平野	12	0	○	○	×	環濠？	
12	豊田大塚・中吉原	富山市	弥生終末期～古墳前期前半	平野	9.4	0	○	×	×	水辺祭祀？	
13	豊田		弥生中期後葉	台地	8.8	3.8	○	○	×	環濠？	
14	新堀西		弥生後期後半～終末期	平野	8.4	0	○	○	×	環濠集落	
15	水橋金広・中馬場		弥生中期中葉～中期後葉、終末期～古墳前期初頭	平野	8.2	0	○	○	×	環濠？	
16	小竹貝塚		弥生後期前半～終末期	平野	3.5	0	○	×	×	盾出土	
17	打出		弥生後期後半～終末期	平野	3.4	0	○	×	×	鉄器出土	
18	羽根下立		縄文晩期前葉～弥生前期	台地	12	2.5	○	×	×	縄文～弥生移行期	
19	白鳥城跡		弥生終末期	山頂	145.3	120	○	○	×	高地性集落、環濠、山城	
20	西金屋京平		弥生後期後半	丘陵	104	95	×	×	×	高地性集落？	
21	富崎赤坂・龍山砦		弥生後期後半	丘陵	120	84	○	×	○	高地性集落、宮崎墳墓群	
22	千坊山遺跡		弥生終末期	丘陵	51.8	26.7	○	×	○	比高差のある集落、六治古墳墳墓・向野塚墳墓	
23	磨治町		弥生後期後半～古墳前期前半	平野	30	0	○	×	○	拠点？鏡坂墳墓群	
24	富崎		弥生終末期～古墳前期初頭	平野	24.5	0	○	×	○	拠点？富崎墳墓群	
25	館本郷Ⅱ(翠尾Ⅰ)		弥生後期後半～弥生終末期	平野	41.6	0	○	×	×	拠点祭祀？	
26	南部Ⅰ		弥生終末期～古墳前期前半	平野	30.8	0	○	×	○	拠点？富崎千里古墳群？	
27	唐坂Ⅱ	弥生中期後葉	丘陵	172	3.9	×	×	×	ヤマ弥生		
28	布虎	縄文晩期前葉～弥生前期	山地	145	0	○	×	×	ヤマ弥生		
29	長山	弥生後期後半	山頂	116.4	47	○	×	×	高地性集落・山城		
30	北代	縄文晩期後葉～弥生前期	台地	17	3	○	×	○	弥生前期壺棺？		
31	愛宕	射水市	弥生後期後半～古墳前期初頭	平野	2.5	0	○	×	×	仿製鏡出土・井戸祭祀	
32	伊勢領		弥生後期後半～終末期	平野	4	0	○	○	×	環濠？	
33	中山中		弥生後期後半～古墳前期前半	平野	16	10	○	×	×	比高差のある集落	
34	中山南		弥生後期後半～終末期	平野	17	11	○	×	×	比高差のある集落	
35	上野		弥生後期後半	台地	30	20	○	×	×	比高差のある集落、内行花文鏡出土	
36	高島A		弥生中期後葉～古墳前期前半	平野	1.3	0	○	×	○？	中期拠点？集落＋墓？	
37	二口油免		弥生後期後半～古墳前期前半	平野	7	0	○	○	×	環濠	
38	串田新		弥生終末期～古墳前期前半	台地	45	15	○	×	○	比高差のある集落、墓＋集落	
39	白雲城跡		弥生後期後半	台地	21.5	13.5	○	○	×	比高差のある集落、環濠・中世城館	
40	石塚		高岡市	弥生中期前葉～中期後葉、古墳前期前半	平野	12	0	○	×	○	中期拠点、集落＋墓
41	下老子笹川			縄文晩期後葉～弥生前期、弥生中期中葉～古墳前期初頭	平野	19	0	○	×	×	中期後期拠点
42	鹿野町東			弥生後期後半～古墳前期初頭	平野	13.5	0	○	○	×	環濠？水辺祭祀？
43	園訪			弥生中期後葉、後期後半	平野	13	0	○	×	×	弓出土
44	江尻			縄文晩期後葉、弥生終末期	平野	18.5	0	○	×	×	短甲出土
45	井口本江			縄文晩期中葉、弥生後期前半	平野	9	0	○	○	×	環濠？
46	石名瀬A	弥生中期中葉		平野	12	0	○	×	○	集落＋墓	
47	柳田Ⅰ	弥生後期後半		丘陵	76	46	○	×	×	高地性集落？	
48	中宮根西	弥生中期後葉、後期後半		平野	1	0	○	○	×	環濠？	
49	杉谷内床ノ山	弥生終末期		台地	67	11	○	×	×	比高差のある集落、手焙形土器	
50	平塚川東	小矢部市		弥生終末期～古墳前期初頭	台地	68	13	○	×	○	比高差のある集落、集落＋墓
51	田川城跡(城ヶ峰遺跡)			弥生後期後半	丘陵	140.9	113.5	×	×	×	高地性集落？環濠？・城館
52	頭無Ⅱ	弥生終末期		台地	78.1	19.5	×	×	×	比高差のある集落	
53	東中江	南砺市		縄文晩期後葉、弥生中期前葉	山地	380	0	×	×	×	ヤマ弥生
54	矢張下島			縄文晩期後葉～弥生前期	山地	420	0	○	×	×	ヤマ弥生
55	ミズカミ谷		弥生時代後期後半	山地	332	105	×	×	×	高地性集落？	
56	小久米A	水見市	弥生終末期～古墳前期初頭	丘陵	40	20	○	×	×	比高差のある集落	
57	徳領浦之前		弥生後期後半～終末期	平野	8	0	○	○	×	環濠？盾出土	
58	徳領野原		弥生後期後半	平野	10	0	○	○	×	環濠？	
59	上久津呂中屋		弥生中期後葉、後期後半	平野	3.3	0	○	×	×	弓出土・仿製鏡出土・鉄刀出土	
60	宇波ウノ		弥生終末期	台地	31	13.5	○	×	○	比高差のある集落、集落＋墓？	
61	阿尾城跡		弥生終末期	台地	30	24	×	×	×	比高差のある集落・城館	
62	樽山城跡		弥生終末期	丘陵	100	60	×	×	×	高地性集落？山城	

表2 富山県弥生時代比高差のある集落・環濠のある集落ほか一覧(抽出) 青：比高差の大きい集落 赤：環濠のある集落、紫：比高差が大きく、環濠のある集落

遺跡名	市町村	標高(m)	比高(m)	縄文時代			弥生時代						古墳時代		備考			
				晩期前葉	晩期中葉	晩期後葉	前期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前半	後期後半	終末期	前期初頭		前期前半		
1 佐伯	魚津市	27	15														比高差のある集落	
2 蒲上B		68	49														比高差のある集落	
3 天神山城		163	90														高地性集落	
4 魚船	滑川市	2	0														拠点？ 手炬形土器	
5 本江扇平		105	80														高地性集落？	
6 本江下石山		42	22														比高差のある集落	
7 砂林朝北	上市町	43	20														比高差のある集落	
8 江上A		16	0														環濠集落？仿製鏡(中小泉)	
9 大観峰	立山町	329.7	259														高地性集落？	
10 辻		24	0														環濠？	
11 塚越 I	舟橋村	12	0														環濠？	
12 豊田大塚・中吉原	富山市	9.4	0														水辺祭祀？	
13 豊田		8.8	3.8															環濠？
14 新堀西		8.4	0															環濠
15 水鏡金広・中馬場		8.2	0															環濠？
16 小竹貝塚		3.5	0															盾出土
17 打出		3.4	0															鉄器出土
18 羽根下立		12	2.5															縄文～弥生
19 白鳥城跡		145	120															高地性集落
20 西金屋京平		104	95															高地性集落
21 高崎赤坂・離山替		120	84															高地性集落
22 千坊山遺跡		52	27															比高差のある集落
23 藤治町		30	0															拠点？
24 富崎		25	0															拠点？
25 部本郷Ⅱ(翠尾Ⅰ)		42	0															拠点祭祀？
26 南部Ⅰ		31	0															拠点？
27 直坂Ⅱ	172	3.9															ヤマ弥生	
28 布尻	145	0															ヤマ弥生	
29 長山	116	47															高地性集落	
30 北代	17	3															弥生前期 磨石？	
31 愛宕	射水市	2.5	0														仿製鏡出土・井戸祭祀	
32 伊勢嶺		4	0														環濠？	
33 中山中		16	10														比高差のある集落	
34 中山南		17	11														比高差のある集落	
35 上野		30	20														比高差のある集落 内行花文鏡出土	
36 高島A		1.3	0															区画溝？(環濠？)
37 二口油免		7	0															環濠
38 串田新		45	15															比高差のある集落 墓+集落
39 白宮城跡		22	14															環濠
40 石塚		12	0															中期拠点 集落+墓
41 下老子笹川	19	0															中期後期拠点	
42 蔵野町東	14	0															環濠？水辺祭祀？	
43 藤訪	13	0															弓出土	
44 江尻	19	0															短甲出土	
45 井口本江	9	0															環濠？	
46 石名瀬A	12	0															集落+墓	
47 明田Ⅰ	76	46															高地性集落？	
48 中曾根西	1	0															環濠？	
49 杉谷内床ノ山	67	11															比高差のある集落 手炬形土器	
50 平桜川東	小矢部市	68	13														比高差のある集落 集落+墓	
51 田川城跡(城ヶ峰)		140.9	113.5															高地性集落？
52 頭無Ⅱ	78	20															比高差のある集落	
53 東中江	380	0															ヤマ弥生	
54 矢張下島	420	0															ヤマ弥生	
55 ミズカミ谷	332	105															高地性集落？	
56 小久米A	40	20															比高差のある集落	
57 惣領浦之前	8	0															環濠？盾出土	
58 惣領野原	10	0															環濠？	
59 上久津呂中屋	3.3	0															弓・仿製鏡・鉄刀出土	
60 宇波ウツノ	31	14															比高差のある集落	
61 阿尾城跡	30	24															比高差のある集落	
62 増山城跡	砺波市	100	60														高地性集落？	

表3 富山県弥生時代集落遺跡消長(抽出) 青: 比高差の大きい集落
赤: 環濠のある集落、紫: 比高差が大きく環濠のある集落

■ 遺構なし
■ 遺構あり
■ 環濠(壕)あり

※発表後、西井龍儀氏、古川知明氏から新情報をご提供いただき反映した。記して感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

射水市教育委員会 2015『遺跡が語る弥生・古墳時代の射水』

大野英子 2007『日本の遺跡 18 王塚・千坊山遺跡群』同成社

金子玲子 1982「新遺跡紹介 西金屋京平遺跡」『富山市考古資料館報No.7』

久々忠義ほか 2010「特集 弥生時代前期・中期の遺跡」『大境 第28号』富山考古学会

高橋浩二 2005「富山県における高地性集落の解体と古墳の出現」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会

富山市教育委員会 2009『ムラの景観 一集落と墳墓一』

長瀬 出 2002「富山県における弥生集落の展開」『富山考古学研究 第5号』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

藤田慎一 2013「富山県出土の天王山式土器から見た越後、東北との交流」『大境第32号』富山考古学会

古川知明 2025「富山県における高地性集落の新資料—立山町史収集資料から—」『立山町歴史交流ステーション日なた研究紀要』第3号

麻柄一志 1982「北陸の高地性集落」『同志社大学考古学シリーズ I 考古学と古代史』

麻柄一志 1983「北陸の高地性集落とその評価 一天神山城跡と白鳥城跡—」『富山市考古資料館紀要 第2号』富山市考古資料館

麻柄一志 2000「倭国大乱と高地性集落 天神山城遺跡」「鉄器の使用」『図説魚津・黒部・下新川の歴史』郷土出版社

麻柄一志 2016「天神山城高地性集落と弥生の戦乱」『うもれ木 第44号』魚津埋没林博物館広報誌

町田賢一 2019「ヤマ弥生」『平成30年度埋蔵文化財年報』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課

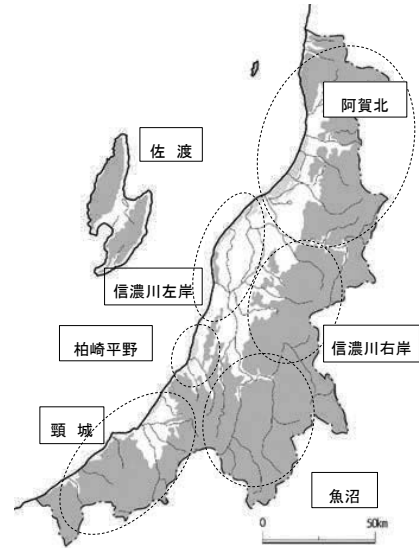
新潟県における弥生時代の集落について

滝沢規朗（新潟県観光文化スポーツ部文化課）

1 新潟県の概要と土器様相

(1) 概要

新潟県は本州日本海側のほぼ中央に位置し、本州側の旧国の越後と国内第4位の離島である旧国の佐渡からなる。本州側の海岸線の長さは約330kmと南北に長く、面積は12,594km²と全国第5位の規模を誇る。長野県に源を発する日本一の大河・信濃川に加え、福島県から日本海に注ぎ込む阿賀野川の内水面交通により、内陸地域との交流も活発である。北から山形県・福島県・群馬県・長野県・富山県と接し、北陸・関東甲信越など様々な地域に区分されることが多いが、その中心とはならない。地域性も豊かなため、過去に7地域に区分した名称で呼称する（第1図）。集落の状況を示す時期については、事務局から提示された区分に準拠しつつ一部異なるが、この点は後述する。



第1図 新潟県の地域区分

(2) 土器様相

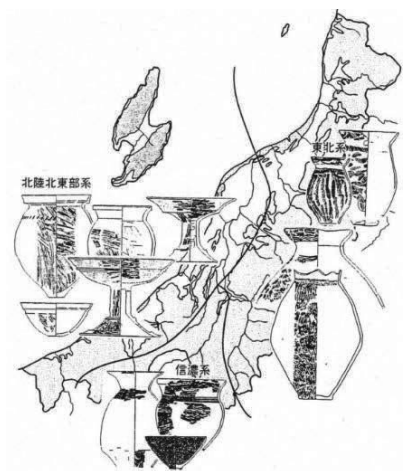
土器の地域性は生活形態（居住施設・墓・集落など）を反映している場合が多い。当県は単一の土器圏で包括されることが極めて稀で、本稿で対象とする縄文時代晩期から古墳時代前期の土器の地域色は、おおむね東北（南部）系・信濃系・北陸（北東部）系に区分され、時期毎に主体的な土器様相の範囲が伸縮している。

縄文晩期～弥生時代中期前半：縄文晩期は大きく2分され、阿賀北から信濃川下流域は晩期前半が東北系と連動した動きから晩期後半には東北南部や中部高地、関東地方と連動した土器圏である。信濃川中上流域から魚沼・頸城は中部高地・北陸系が顕著で（渡邊 2019a など）、地域毎で資料数に隔たりがある弥生前期～中期前半も、おおむねこの傾向が継続していると考えたい。

弥生時代中期後半：阿賀川以南の海岸平野部は北陸系、魚沼・頸城山間部は信濃系を主体に両者が混在する遺跡が多い。頸城・上越市吹上遺跡は、中期後半古段階で北陸系と信濃系の割合が8：2、中期後半新段階では北陸系より信濃系が多くなる（笹沢 2004）。阿賀北・新発田市山草荷遺跡では東北北部系、東北南部系、信濃系、北陸系の4系統からなり、東北北部系と北陸系が複合した一群が明瞭で、この傾向は阿賀北砂丘地帯と平野部の特徴となる（石川 2018）。

弥生時代後期：阿賀北と魚沼の魚野川流域は東北系、阿賀野川以南の海岸平野部は北陸系、頸城山間部から魚沼の信濃川流域では信濃系が主体となる（第2図 滝沢 2009b）。

古墳時代前期初頭～前期：地域性が徐々に解消され、前段階からの地位色を残しながらも、ほぼ北陸系（北東部系）となる。その後は徐々に東北南部や関東と共有する細別器種の組成頻度が高くなり、前期後半には北陸北東系土器圏から離脱する（滝沢 2008）。



第2図 新潟県における弥生時代後期後葉～末葉の土器の地域色（滝沢 2009）

2 新潟県における縄文時代晩期～古墳時代前期の遺跡の動向

事務局の時期区分・併行関係に準拠しつつ、一部改変した時代・時期区分とし（第1表）、必要に応じて「越後」の時期区分で補足して遺跡の立地や存続時期などを確認する。

（1）遺跡立地の変遷（第3図）

第3図には新潟県内における470遺跡の標高と周辺地域との比高を示した図を掲載した。○が比高、そのドットの標高を直上に示した。標高140mまでを□で示し、それ以上のものは割愛した。

縄文時代晩期～弥生時代後期前葉までは、比高20～30m付近で分布の断絶が認められる。最大の比高は縄文時代晩期で60m、弥生時代前期～後期前葉は40～50mとなる。弥生時代後期中葉～末葉では0～30m付近の断絶は緩やかで、比高30～80mの遺跡の比率が高くなる。古墳時代前期初頭は状況が大きく変化し、比高10m未満のものが多くなり、比高30m以上のものが激減する。この傾向は古墳時代前期前葉～末葉に更に拍車がかかり、比高30m以上のものは姿を消す。

縄文時代晩期～古墳時代前期までの様相を概観した結果、比高20～30mあたりで分布の断絶が確認でき

るが、細別時期毎で断絶の程度が異なる。古墳時代前期前葉以降に確認できなくなることから便宜的に比高30m以上を「高台の遺跡・村」として、次に集落を巡る環濠について確認する。

（2）環濠

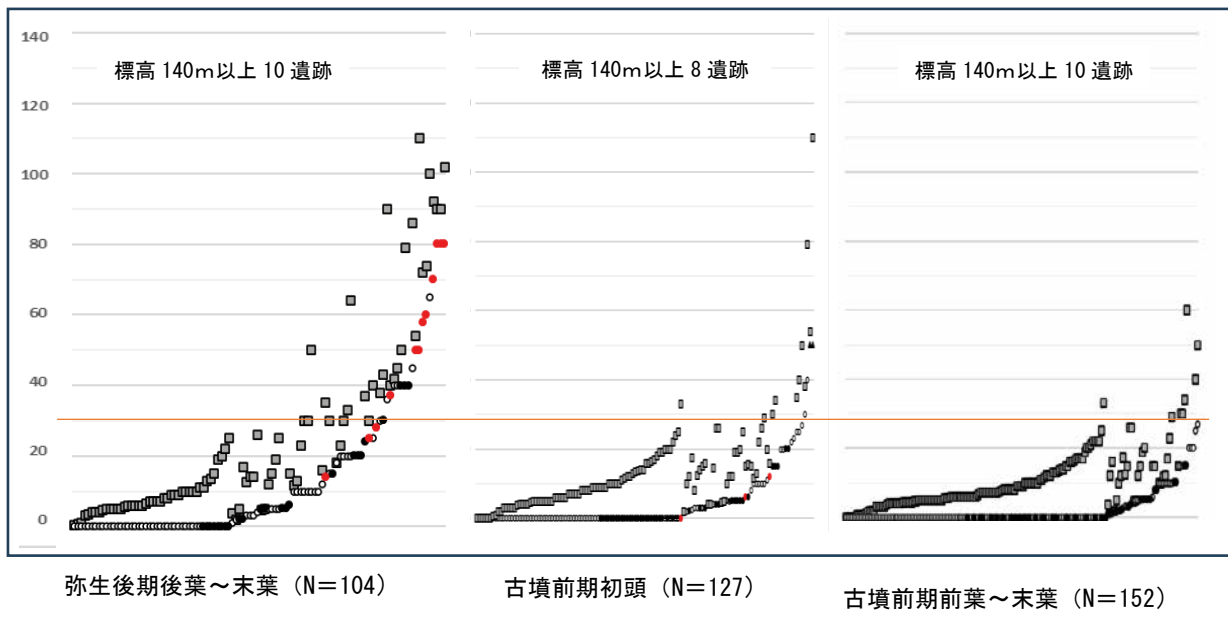
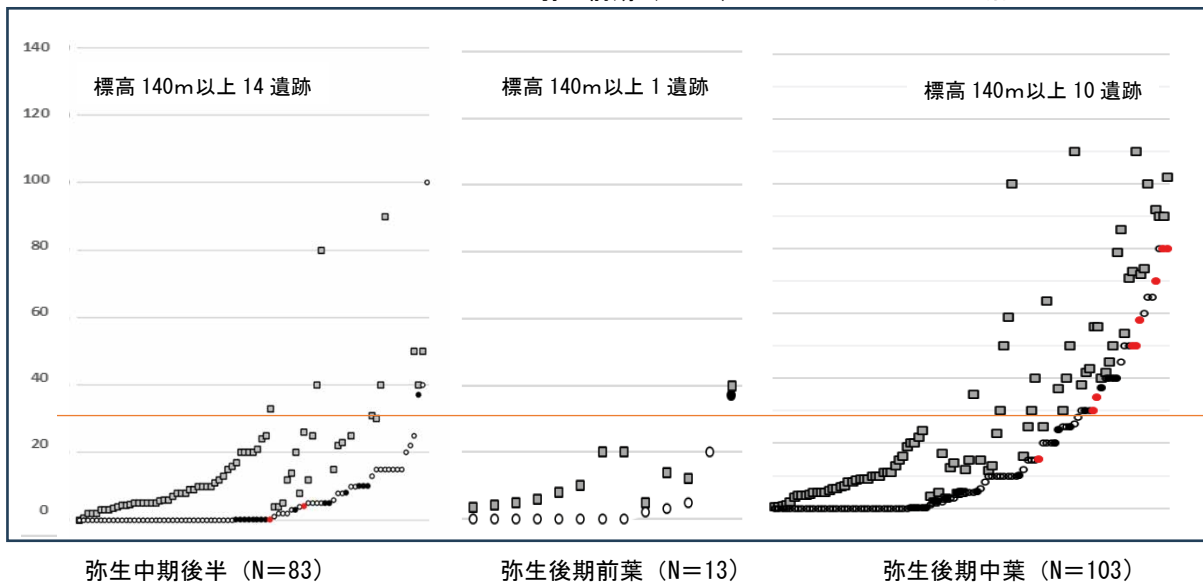
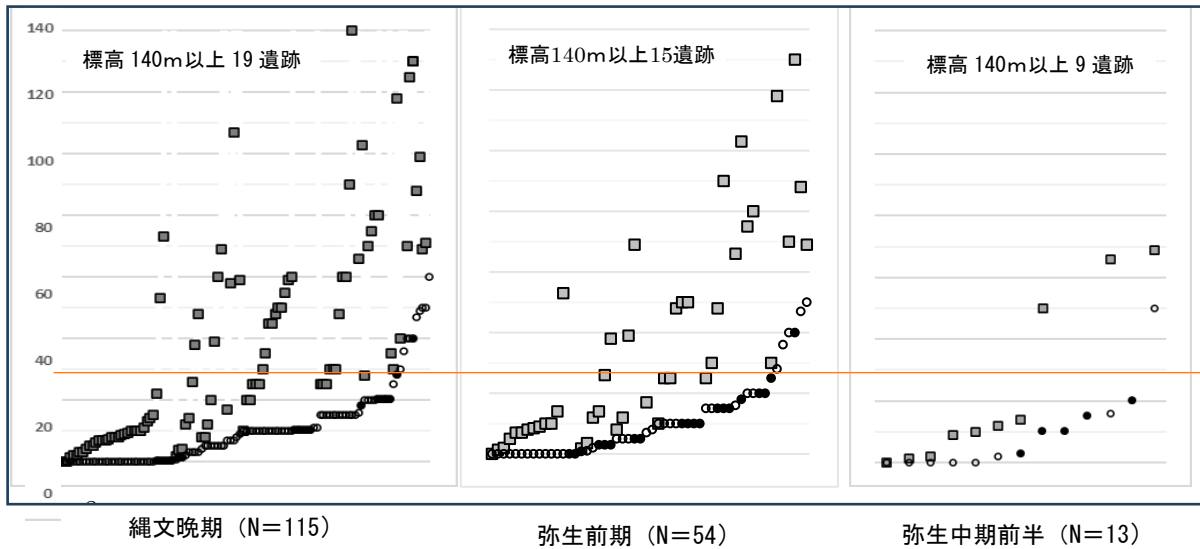
新潟県で環濠の可能性がある最古例は、中期後半の頸城・上越市吹上遺跡（上越市教委2006）と佐渡・佐渡市平田遺跡（県教委・県埋文事業団2000）である。いずれも部分的な検出にとどまることから判然としないが、比高がほとんどない立地である点で共通する。

後期中葉には確認数が激増する。多くが北陸南西部の法仏式（越後2期）で、比高30m以上の高台の村での掘削である。小規模のものと大規模なものがある。前者には頸城・上越市裏山遺跡（県教委・県埋文事業団2000）や東北系土器圏で初の確認例である阿賀北・村上市山元遺跡（県教委・県埋文事業団2009）など、後者は信濃川右岸・古津八幡山遺跡（新津市教委2001など）と頸城・妙高市斐太遺跡群（新井市教委ほか2005など）がある。分布は拡大するが、佐渡・魚沼では未確認である。第3図では越後2期と3期を一括して後期後葉～末葉としたが、同2期と3期の間には大きな画期があり、小規模は高台の環濠集落は越後2期で環濠が廃絶されるが、大規模な古津八幡山遺跡と斐太遺跡群は環濠の廃絶が越後3期と1小期であっても異なる点には注意を要する。

古墳時代初頭（越後4～5期）には、独立低丘陵上の信濃川右岸・長岡市横山遺跡（長岡市1992）と、平地の大規模な環濠集落である頸城・上越市釜蓋遺跡（上越市教委2021）が確認でき、越後5期で環濠が廃絶されている。環濠の掘削時期は不明なものの、廃絶時期が同じく5期の柏崎平野・刈羽村西

		事務局案			本稿		
時代	暦年代	石川県		越後	時代		
		型式名	小地域番号		縄文時代	弥生時代	
縄文時代	晩期			大洞B式～	縄文時代	晩期	
	前期	-550	長竹(古)		鳥屋1	弥生時代	前期
			長竹(新)		鳥屋2a		
		-400	柴山出村1	八日市地方1期	鳥屋2b		
			柴山出村2	八日市地方2期	緒立1		
			柴山出村3	八日市地方3期			
		-220	矢木ジワリ	八日市地方4期	緒立2		
				八日市地方5期			
		-200	小松式	八日市地方6期	+		
				八日市地方7期			
				八日市地方8期			
	-100	磯部運動公園	八日市地方9期	吹上I 下谷地(古)			
			専光寺 養魚場		八日市地方10期		
	0	戸水B		吹上II(新) 山草荷			
後期前葉	猫橋	V-1	1期				
		V-2					
		V-3					
	法仏	漆町2-1群	2-1期				
		漆町2-2群	2-2期 2-3期				
漆町3-1群	3期						
	漆町3-2群	4期					
漆町4群							
古墳時代	前期初頭	白江	漆町5群	5期	古墳時代	前期初頭	
			漆町6群	6期			
	前期前葉	古府クルビ	漆町7群	7期			前期前葉

第1表 時代・時期区分



第3図 新潟県における縄文時代晩期～古墳時代の遺跡の比高・標高
 (標高：■、比高：○遺構なし・●遺構あり、●環濠)

第2表 主な遺跡の消長表

遺跡名	所在地	比高 (m)	縄文時代		弥生時代										古墳時代			
			B~C 1	C2~A 古	鳥屋1~2	緒立 1	緒立 2	下谷地古	下谷地新	吹上II新	V1・2	V-3	2-1~3	3	4	5~6	7・8	9・10
			晩期前半	晩期後半	前期前半	前期後半	中期前葉	中期中葉	中期後葉	中期末	後期前葉	後期中葉	後期後葉	終末期	早期	前期前葉	前期中葉	前期後葉
元屋敷	阿賀北	0	■	■														
青田	阿賀北	0	■	■														
村尻	阿賀北	0	■	■														
山口野中	阿賀北	0	■	■														
大沢谷内	信濃川左岸	0	■	■														
藤平	信濃川右岸	0		■	■													
上野原	信濃川右岸	30	■	■														
上道下西	信濃川右岸	0	■	■														
耳取	信濃川右岸	50	■	■														
中道	信濃川右岸	10	■	■														
藤橋	信濃川右岸	20	■	■														
龍峰	頸城	10	■	■														
二又	阿賀北	0					■	■										
猫山	阿賀北	0				■	■	■										
山口	阿賀北	0				■	■	■										
西郷	信濃川右岸	0			■	■	■	■	■									
尾立	信濃川右岸	0				■	■	■										
砂山	阿賀北	0					■	■	■	■	■	■						
道端	阿賀北	0						■	■							■	■	
金屋	魚沼	0						■	■							■	■	
来清東	魚沼	0						■	■							■	■	
下谷地	柏崎平野	0					■	■										
水上	信濃川右岸	0					■	■										
城古	十日町市	0					■	■	■									
吹上	頸城	0					■	■	■							■	■	
平田	佐渡	0						■	■						■	■		
堂の前	阿賀北	0						■	■									
滝の前	阿賀北	40						■	■						■	■		
山元	阿賀北	37						■	■									
中曽根	阿賀北	0							■	■								
古津八幡山	信濃川右岸	50							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
大倉山	信濃川右岸	60							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
中店	信濃川右岸	55							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
二ツ山山頂	信濃川右岸	80							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
経塚山	信濃川右岸	60							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
大平城	信濃川右岸	80							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
高稲場	信濃川右岸	20						■	■									
岩沢	信濃川右岸	40						■	■									
横山	信濃川右岸	10						■	■						■	■		
藤ヶ森	信濃川右岸	10						■	■									
堅正寺	信濃川右岸	45						■	■									
阿部山	信濃川右岸	65						■	■									
大沢	信濃川左岸	30							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
山谷下層	信濃川左岸	30							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
稲場塚下層	信濃川左岸	30							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
大平	信濃川左岸	40							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
大慶寺御経塚	信濃川左岸	0							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
奈良崎	信濃川左岸	20							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
大武	信濃川左岸	0							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
赤坂	信濃川左岸	80							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
姥ヶ入南	信濃川左岸	40							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
内越	柏崎平野	20							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
西岩野	柏崎平野	27							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
西谷	柏崎平野	8							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
堰下	魚沼	0							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
裏山	頸城	70							■	■	■	■	■	■	■	■	■	
山畑	頸城	0						■	■									
下馬場	頸城	40						■	■									
子安	頸城	0						■	■									
釜蓋	頸城	0						■	■									
斐太	頸城	50						■	■									
後生山	頸城	40						■	■									
出崎	佐渡	0						■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
道崎	佐渡	0						■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
蔵王	佐渡	0						■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
東沢	佐渡	0						■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	

■ ■ ■ 遺構なし

■ ■ ■ 遺構あり

■ ■ ■ 環濠あり

谷遺跡（刈羽村教委 1992）がある。比高 30 m 未満の非高台の村で掘削された環濠は、越後 5 期に廃絶しており、以降は環濠が確認されていない。

3 時代・時期別にみた建物を含む集落の変遷

かつて触れた建物の変遷（滝沢 2009a）を踏まえ概観する。

縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前半：縄文時代後期前半には、各地で大型の柱穴からなる掘立柱建物が主体となる集落が登場し、一部弥生時代中期前半まで継続する。信濃川右岸・見附市耳取遺跡（見附市教委 2018）・三条市藤平 A 遺跡（下田村教委 1986）、阿賀北・阿賀野市猫山遺跡（京ヶ瀬村教委 2003）などは縄文時代以来の環状構造を意識したものと、阿賀北・新発田市青田遺跡（県教委・県埋文事業団 2004）のように環状構造が確認できないものがある（第 4 図）。

弥生時代中期後半：北陸系土器圏を中心に大型の柱穴を持つ掘立柱建物や環状構造の建物配置は消え、小型の柱穴で長方形を呈する掘立柱建物や、周囲に幅広い溝を持つ平地式建物が主体となるなど大きく変化する（第 5 図）。信濃系分布圏は判然としないが、小型の柱穴をもつ掘立柱建物は確認できる。東北系土器圏では確認例が極めて限られるが、狭溝式の平地式建物が主体になろうか。

弥生時代後期中葉～古墳時代前期初頭（越後 2 期～ 5 期頃）：高台の集落が多く、竪穴建物が主体となる。低地の集落では、小型の柱穴で方形に近い掘立柱建物がわずかに加わる。確認例は少ないが東北系土器圏も同様である。竪穴建物は、隅丸方形を主体に、頸城では長方形のものが混在し、前期初頭では床面積が 100 m² を越える特大サイズの竪穴建物が頸城・上越市釜蓋遺跡で確認されている（上越市教委 2021）。低地集落では広溝式の平地建物に加え、竪穴建物も確認できる。

古墳時代前期（越後 6 期以降）：低地集落が増大し、外周溝が伴う平地建物や竪穴建物のほか、竪穴建物も多い。特大型の竪穴建物は明確ではない。掘立柱建物は前段階と同様に方形系列のものが多い。これらの特徴に墓制を加えると第 3 表のようになる。

第 3 表 時代・時期・土器様相別の集落の動向

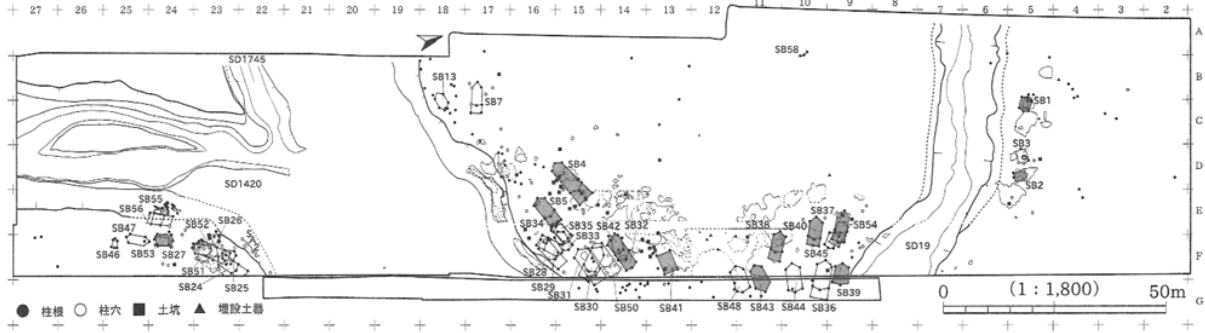
区分	土器	建物・環濠	墓	手工業
縄文晩期～ 弥生中期前半		縄文時代以来の大型柱穴の掘立柱建物主体（環状構造が一部で残存）	土坑墓、再葬墓	阿賀北・頸城で磨製石斧
弥生中期後半	東北系	狭小式平地建物	不明	不明
	北陸系	広溝式平地建物（竪穴建物）・小型柱穴の長方形掘立柱建物、環濠集落	方形周溝墓	玉作
	信濃系	竪穴建物・小型柱穴の長方形掘立柱建物	方形周溝墓	玉作
弥生後期～ 古墳初頭	東北系	竪穴建物・小型柱穴の方形掘立柱建物、環濠集落小	土坑墓	不明
	北陸系	竪穴建物・小型柱穴の方形掘立柱建物。環濠集落多	方形周溝墓・円形周溝墓	玉作・鉄？
	信濃系	竪穴建物。環濠未確認	不明	不明
古墳前期		竪穴建物・広溝式平地建物（竪穴建物）、小型柱穴の方形掘立柱建物、環濠は消失か	方・円形周溝墓、前期前半～前方後円墳・前方後方墳	玉作 鉄

4 高地性集落・環濠集落

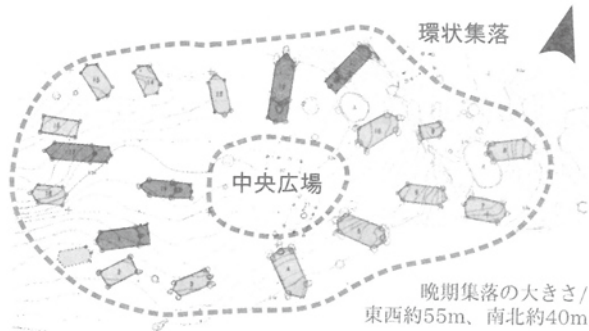
戦いを反映したものか否かで様々な見解が提示されている。戦いを証拠立てる項目を上げた佐原真氏の見解（佐原 1999）をもとに、かつて県内の状況を概観したが（滝沢 2013）、その時から大きく状況は変化していない。高地性集落は、戦乱を意図した防御の村とされているが、柴田昌児氏の「山住の集落」（柴田 2004）が提示されており、「高台の村」等と呼称を改めることも一案と考える。

環濠集落については、何を囲ったか、濠の内部の状況を加味することが不可欠であろう。当県で環濠集落としているものは、そのほとんどが建物を配置された集落を囲っている。武器と想定される遺

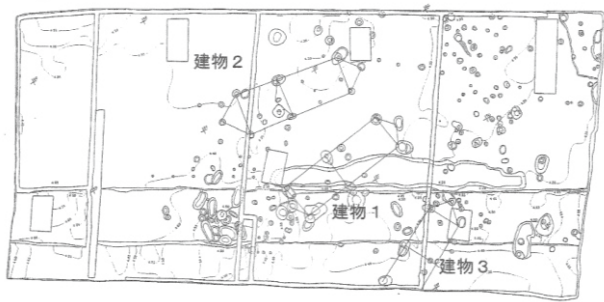
S4~S3層期



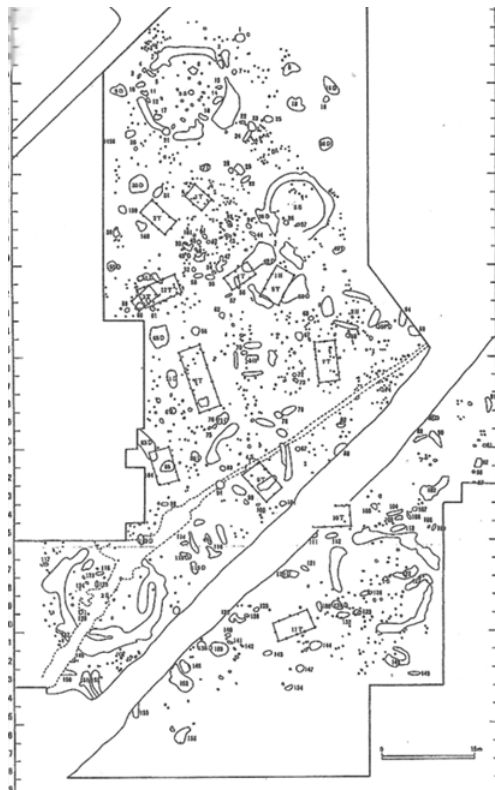
阿賀北・新発田市青田遺跡



信濃川右岸・藤平A遺跡



阿賀北・猫山遺跡



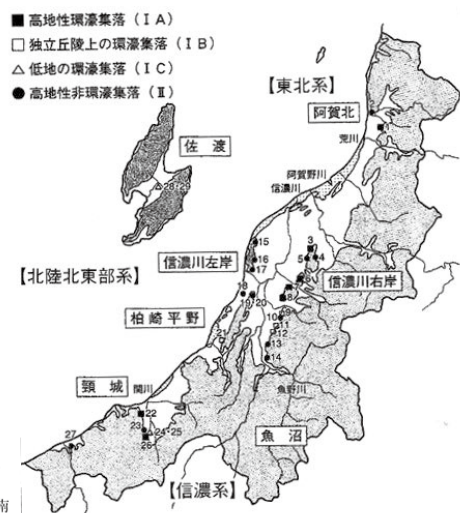
柏崎平野・下谷地遺跡

1 山元、2 滝ノ前、3 古津八幡山、4 大倉山、5 中店、6 ニツ山山頂、7 経塚山、8 大平城、9 高稲場、10 岩沢、11 横山、12 原山、13 堅正寺、14 阿部山、15 大沢、16 山谷下扇、17 稲場塚下扇、18 大平、19 赤坂、20 姥ヶ入南、21 西谷、22 裏山、23 下馬場、24 吹上、25 釜蓋、26 斐太、27 後生山、28 平田、29 蔵王

新潟県における弥生時代後期環濠集落の存続時期

遺跡名	立地	規模	中期	1	2	3	4	5
山元	高地	小規模	…	…	■	■	■	■
古津八幡山	高地	大規模			■	■	■	■
大平城	高地	小規模		…				
経塚山	高地	小規模			■	■	■	■
裏山	高地	小規模						
百両山	高地				■	■	■	■
上ノ平・矢代山A	高地	大規模				?	?	…
矢代山B	高地							
横山	低丘陵	小規模			■	■	■	■
西谷	低丘陵	小規模						
釜蓋	低地	大規模						

… 土器・若干の遺構有り。
■ 主体時期

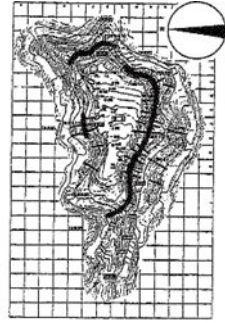


新潟県の環濠集落・高地性集落 (滝沢 2009a から)

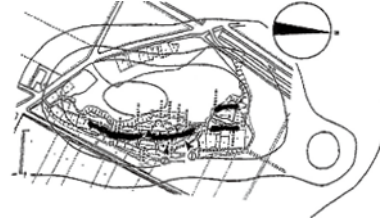
第4図 新潟県の集落 (1)



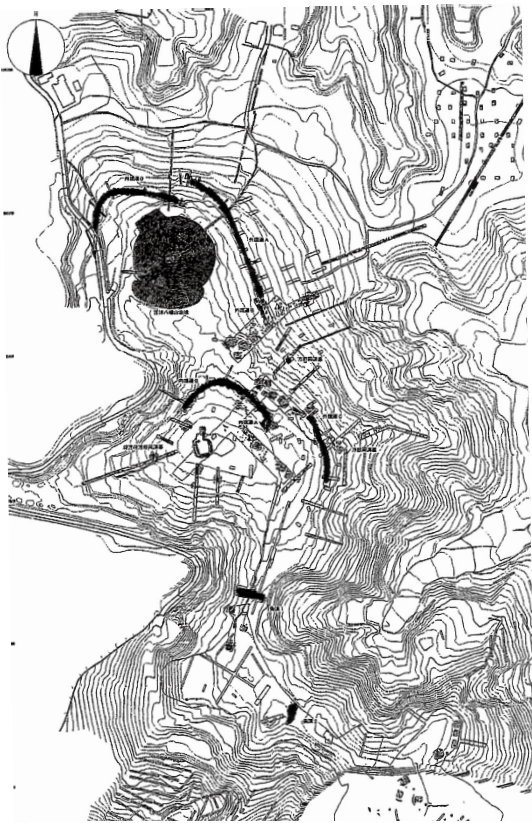
阿賀北・山元遺跡



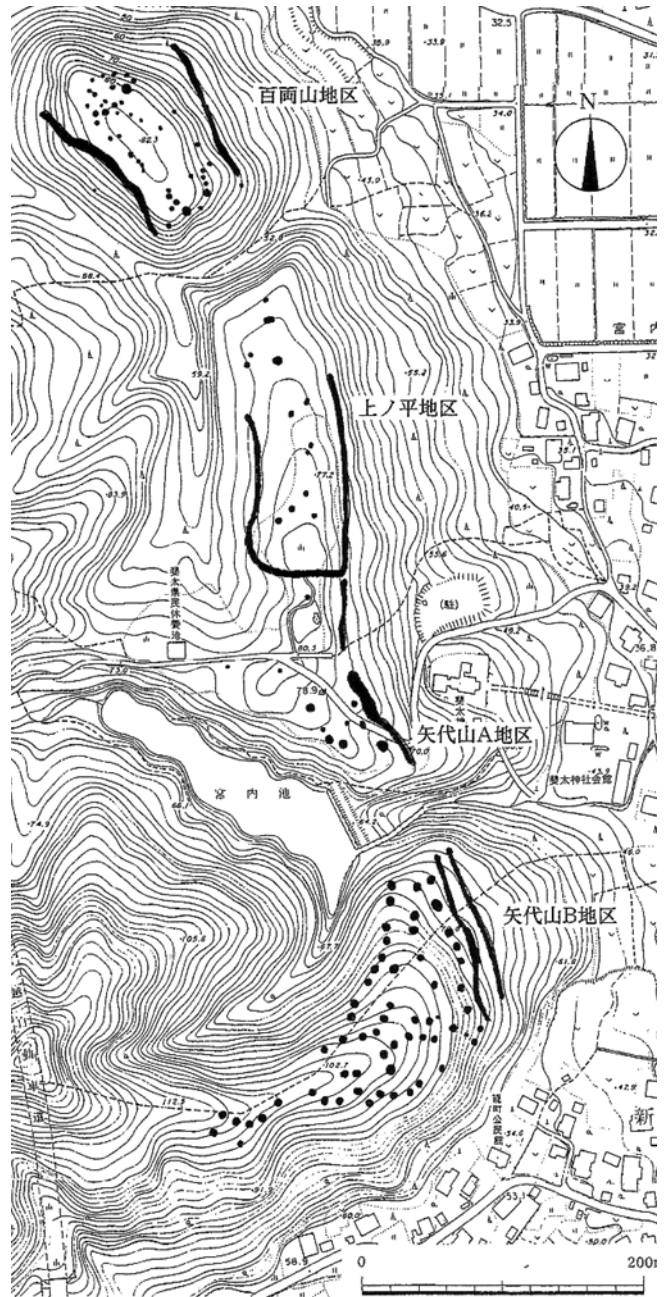
頸城・裏山遺跡



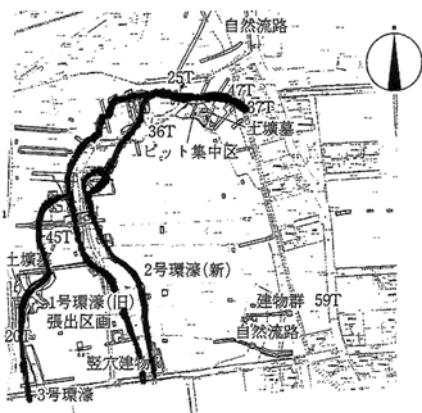
信濃川右岸・横山遺跡



信濃川右岸・古津八幡山遺跡



頸城・斐太遺跡群



頸城・釜蓋遺跡

第5図 新潟県の集落(2) S = 1/5,000

物は、頸城・上越市裏山遺跡（県教委・県埋文事業団 2000）の竪穴建物内出土の「つぶて」の可能性がある自然礫に加え、小規模で短期間の環濠集落内から鉄製品が数多く出土している（滝沢 2015）。かつて、川村浩司氏が指摘したように、地域内での開発拠点・政治的拠点・防衛拠点・交易基地など複合的な性格を備えていた可能性もあろう（川村 1996）。戦いに備えたムラであり、特別な意味を持った村と考えたい。県内で環濠集落が盛行・廃絶する時期の土器を含むモノの流れも重要と考える。

【引用参考文献】（発掘調査報告書は本文に引用したもののみとした）

- 石川日出志 2018「第三章 東日本における山草荷遺跡の位置付け」『山草荷遺跡出土の弥生土器』 新発田市教育委員会
- 川村浩司 1996『越の土器と古墳の展開』『越と古代の北陸』 名著出版
- 刈羽村教委 1992『西谷遺跡発掘調査報告書』
- 京ヶ瀬村教育委員会 2003『大割遺跡・猫山遺跡・大曲川端遺跡』
- 笹沢正史 2015「分布圏北縁の動向－新潟県内の高地性環濠集落の素描」『環濠集落の諸問題 2015』《環濠（壕）論集》刊行委員会
- 笹沢 浩 2004「第3章第2節2 吹上遺跡と玉作」『上越市史』通史編1 上越市
- 佐原 真 1999「日本・世界の戦争の起源」『戦いの進化と国家の生成』 東洋書林
- 下田村教育委員会 1986『藤平遺跡発掘調査報告書』
- 柴田昌児 2004「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観 遺構編』 小学館
- 上越市教育委員会 2006『吹上遺跡発掘調査報告書』
- 上越市教育委員会 2007『吹上遺跡範囲確認調査報告書』
- 上越市教育委員会 2021『釜蓋遺跡確認調査報告書（総括編1）』
- 滝沢規朗 1995「古墳出現前後における集落の動向－越後の集落を考える上での基礎整理として」－『研究紀要』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2008「旧紫雲寺型周辺の西川内南遺跡出土土器について－阿賀北における古墳時代前期の土器検討－」『三面川流域の考古学』第6号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2009a「新潟県における弥生時代の建物について」『三面川流域の考古学』第7号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2009b「第七章2 B県内における高知性集落・環濠集落」『山元遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 第199集
- 滝沢規朗 2013「特論 高地性集落・環濠集落」『弥生時代の新潟』新潟県立歴史博物館
- 滝沢規朗 2015b「越後・佐渡における鉄器と青銅器－伝来の系譜と性格－」『古代文化』66巻4号
- 滝沢規朗 2019b「第4章第2節第1項 土器、第3節第1項 遺跡の立地と集落の消長・第2項建物」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 田嶋明人 1986「考察 漆町遺跡出土土器の考察」『漆町遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2006「『白江式』再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房
- 新潟県教育委員会 1979『下谷地遺跡』
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000『平田遺跡』
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000『裏山遺跡』
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000『青田遺跡』
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『山元遺跡』
- 新津市教育委員会 2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』
- 新津市教育委員会 2004『八幡山遺跡発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査』
- 長岡市 1992「横山遺跡」『長岡市史』資料編1
- 斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会 2005『斐太歴史の里確認調査報告書』
- 見附市教育委員会 2018『耳取遺跡』
- 村上市教育委員会 2013『山元遺跡』
- 渡邊裕之 2019a「第2章第2節第6項 晩期」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会
- 渡邊裕之 2019b「第3章第2節第1項 前期」『新潟県の考古学Ⅲ』新潟県考古学会

令和6年度 環日本海文化交流史調査研究集会

『高地性集落～日本海沿岸地域を中心として～』 討論の記録

◎研究集会の視座と特徴

今回の研究集会のテーマである、弥生高地性集落論の学史は長い。古墳時代は列島規模の政治的社会的広域統合の時代と考えられている。その統合過程に生じた戦乱の反映としての高地性集落（環濠集落も）が認められるという枠組みが一般的な説明体系である。加えて、AD 2世紀後半～3世紀初頭のイベントとして記載された後漢書「倭国乱」・魏書「倭国大乱」も重要な要素だった（小野編 1953、佐原・田辺 1966、小林・佐原 1964 など）。この認識は、現在の教科書にも記載される。

発掘調査成果の蓄積が進んだ1970年代後半以後は、現在に至るまで多くの研究者がこの「通説」を再検討してきた。高地性集落が社会的緊張関係時に狼煙台などの情報伝達機能を備え、前期古墳群につながる農業共同体の連携において機能する着想（都出 1974）や、六甲山麓における弥生遺跡動態の一部に対する高地性集落の評価（森岡 1981・1982）などである。また、中西部瀬戸内海沿岸島嶼部の高地性集落を航路監視と通行船舶に対する攻撃などの拠点と考える視点（伊藤 1991）も示される。交流路などとの相関で説明を試みたといえよう。いまでは、瀬戸内地方では丘陵中腹付近に位置する「山住みの集落」から、航路監視やルート上のランドマーク機能を果たす集落が現れ、典型的な高地性集落が形成されたという見解（柴田 2004）が支持を集める。近年は、「倭国乱」を反映した軍事的集落の抽出あるいは古墳時代につながる地域間勢力論が語られることは少なく、弥生中期中葉以後の社会ネットワークの発達やそれに呼応する地域社会モデルとしての高地性集落が論じられる（福家 2021、信里 2022 ほか）。この理解の変化は教科書や一般市民向けにはあまり広報されていない。

また、2010年代後半からは、森岡秀人を中心とした科研費事業で高地性集落共同研究が行われた。ここでは、GIS分析を利用した高地性集落からの視認範囲や分布傾向が分析され、瀬戸内海において洋上から高地性集落に向けた視認と高地性集落から船への視認の間にギャップがあることなどが指摘された（柴田 2024）。年輪酸素同位体比分析から激しい気候変動が指摘されるAD2世紀に集落の移動頻度が高まり、その際に丘陵・段丘上の遺跡増加が加速されて近畿では高地性集落増加の背景となることも指摘された（若林 2022）。さらに、そもそも何を高地性集落と呼ぶかについての根源的疑問も出された。高地性集落を論じることは、高地性集落の定義や理解に多様性あるいは分節状況をもたらしながら、一方では各地域での弥生時代集落論に新たな視点をもたらして、研究を活性化させている。

今回の日本海をめぐる弥生高地性集落論もこの研究動向の一部と理解している。実際、何人かは森岡の共同研究のメンバーでもある。また、今回各発表者の共通作業となった地域・時期ごとに遺跡立地を標高と平地からの比高差順にプロットするグラフ作成は、森岡共同研究の中で荒木幸治が提案した分析形態（荒木 2021）を参考とした。今回の研究は、上記研究動向の日本海沿岸版である。それは、上記議論の縮小版ということではない。論じる地域が明示されていることは重要である。これまで瀬戸内・近畿中心だった高地性集落論の外側からの視座がある点で、むしろ既往の議論を越えていく可能性をもつ。森岡科研で提示された課題を共有しつつ、総花的に過ぎて何のための高地性集落論かがぼやけてしまっていた方向性への批判的検証になっている。当日の発表と、その後の討論の内容は、それを反映したものだとして、振り返ってみて特に感じる。

なお、本記録は討論のコーディネーターを担当した若林邦彦と林大智が分担で執筆し、担当部分の文末に氏名を記した（若林邦彦）。

討論では、前年度の研究集会で課題とされた相互に関連する6つの主題を柱に据え、議論を進めた。

以下で主題ごとに討論の概要をまとめる。



討論の様子

◎ “高所立地集落”は弥生時代に特有の集落形態なのか

今回の研究集会で対象とした弥生時代の日本海沿岸地域には、多数の高所立地集落が確認できる。これらの高所立地集落は、古墳時代前期以降に土地利用をほとんど行わない高所（比高 20～30 m 超）に居住施設などを展開させることから、弥生時代に特有の現象として捉えることが可能で、水稻耕作を生業とする弥生時代以降の集落のなかで極めて特異な立地を示すことが研究集会で追認された。

従来の高地性集落研究では、その特異な立地が示す隔絶性や防御的な側面が強調されることで、軍事的緊張関係を実証的に示す遺構群として高地性集落が認識されてきた。一方、高所立地集落では多量の武器・武具保有や柵などの防御施設が示す軍事的機能を見出しがたい。



加藤晴彦氏

北近畿地域の資料をまとめた加藤晴彦は、高地性集落＝防御的側面を備えた施設群という認識を前提とするが、集落構造などの点で低所立地集落と大きく異なっておらず、高所立地集落と“山城・砦”を比較するなかで、（山城が備える）戦い・防御に特化した要素が高所立地集落に希薄であることを指摘した。



滝沢規朗氏

同様に滝沢規朗は、分析対象とした新潟県域の高所立地集落、なかでも高地性環壕集落にみられる特異な立地や、環壕の規模とその造営労力を考えたとき、防御的な要素を否定することは難しいという考えを示した。ただし、出土遺物などから“戦い”の痕跡を見出すことは困難で、玉作などの手工業生産に関わる痕跡、貯蔵施設の存在などにより、環壕を伴わない高所立地集落については防御的な側面を見出しがたいことを指摘した。なお、高地性環壕集落には小規模なものと、大規模なものが存在しており、小規模集落は存続時期が短期間で壕の埋没も早く、大規模集落は長期間継続して環壕を維持するものが多く、壕の掘削に社会的な意義が存在し、環壕の継続時期と遺跡の動態に相関関係が認められる可能性を示した。

これらの防御的要素を備えた高地性集落に対して、社会的な緊張状態以外の成立要因が推測される高所立地集落も存在しており、その代表例として福岡県三国丘陵所在の遺跡群をあげることができる。

北部九州地域では、弥生時代前半期に丘陵ないし段丘上に進出する多数の集落が確認できる。なかでも三国丘陵は、高所立地の傾向が顕著にみられ、前期末から中期初頭にかけて丘陵上の集落が増加



山崎頼人氏

し、中期後半以降に急減する現象を確認できる。山崎頼人はこれらの集落群で比重が高く耐久性に優れた玄武岩製の今山型太形蛤刃石斧（伐採斧）や石庖丁が多数出土することから、水田経営と森林資源の獲得を両立させる目的で、比高 20～30 m を越える丘陵上に多数の集落が進出した可能性を指摘した。また、今山型の太形蛤刃石斧は、弥生時代前期に福岡平野周辺で消費量が多く、次第に三国丘陵へと主要な供給先が推移する傾向を見出せるため、弥生時代前期末～中期初頭までに福岡平野の周辺で大径材が枯渇したことにより、森林資源獲得に特化した集落群が三国丘陵に進出した可能性を示した。



鈴木静華氏

このことは、周囲の“高所立地集落”より高所に立地し、遺物組成などに違いを見出せる集落が、防御性・緊張状態とは異なる理由（資源の獲得・利用）で丘陵上を選択した可能性を示す。

資源利用に関わる遺物組成差は、防御的側面が強調される狭義の高地性環壕集落でも垣間見ることができる。石川県域の資料をまとめた鈴木静華は、鉢伏茶臼山遺跡や大海西山遺跡などの典型的な高地性環壕集落の内外に、竪穴建物や円筒土坑（貯蔵穴）などで構成される等質的な居住域が展開する一方で、環壕内外から出土する石器の器種構成に差異が確認でき、環壕内で磨製石斧や石鎌が顕著にみられることを指摘した。このことは、高所立地の「複合的集落（濱田 2006）」を構成する高地性環壕集落が、山林資源の獲得・加工などの役割を担っていた可能性を示す。



濱田竜彦氏

さらに山陰地域を対象とした濱田竜彦は、丘陵上に大規模集住することで形成された弥生時代後期の「複合的集落（鳥取県妻木晩田遺跡群など）」で、周辺地域と比べて鉄器出土量が突出して多い特徴を指摘した。妻木晩田遺跡群では、ピーク時の 2 世紀後半に 3 棟～5 棟の竪穴建物主体で構成された 20～25 単位程度の居住単位が集住しており、竪穴建物などの建て替えや修繕に際しては、直径 15～20 cm 程度のクリもしくはスダジイの柱や、屋根を支える骨組みに用いる多量の木材（広葉樹）資源が必要となる。そのため、高所立地で大規模集住をなし得た集落は、周辺環境から多量の木材調達が可能で丘陵上を選択し、木材の効率的加工を可能にする木工具の鉄器化を達成していたと判断した。その点で、弥生時代中期頃に高所に生活の場を求めた小規模な移住とは、質の差異が存在していたことを推測できる。さらに、些細なきっかけで争いが発生しやすい社会になっていたと想定される弥生時代後期には、高所への大規模集住が地勢による防御的な機能を前提的に備えており、大人数が集住することでさらなる防御力の向上が期待された可能性を推測した。一方、山間部には低地と異なる資源が内在しており、高所立地の集落が増加する時期には、資源利用のあり方を大きく変化させた可能性が高いことを指摘した。



深川義之氏

弥生時代後期における資源利用の変化は、木材利用の観点からも推測

することができる。参加者の楠正勝によると北陸地域では、弥生時代後期後半頃に井戸杵（割り抜き桶転用）などの木製品で直径1mを超えるような針葉樹（主にスギ）の大径材が頻繁に利用されており、終末期以降は大径材の利用が徐々に減少し、樹種も多様化する。大径材利用の顕著な弥生時代後期後半は“高地性集落”の盛行期と対応しており、集落動態と資源利用の変化が相関する可能性を指摘できる。

なお、実証困難な高所進出の要因に関しては、深川義之が民俗学を援用した多角的なアプローチが有効となる可能性を提示した（林 大智）。

◎遺跡動態との関係



田畑直彦氏

上述した議論の中で、複数のパネラーから断片的には指摘されていたことがある。全体の遺跡動態の中で、高所立地集落の動きをみると、その増加期がすべての地域で一致するわけではないということである。田畑直彦はこの問題を明確に取り上げて発言をした。北部九州、山口県域（とくに関門地域）では、弥生時代中期前葉～中葉が遺跡増加のピークにあたり、北陸以東では弥生時代後期中葉～後葉がピークとなる。これを受けて各地域の状況確認の中で、地域内で遺跡が急増する時期にいわゆる“高地性集落”が増加する見通しを示した。瀬戸内地域は中期後葉に、近畿地域以東は後期に高所立地集落が増加する傾向も指摘された。ただ、高所立地集落の単純な増加期の差異ではなく、その後の展開に違いがあることも確認された。また、各地域のなかで全域が同様の変化を示すのか、小地域性はあるのかも問題となった。

これについて、石川県域の詳細なデータ集成を行った鈴木は、石川県のほぼ全域で後期後葉～古墳時代前期前葉に集落数の増加傾向がみられるものの山地・丘陵地が多く、狭い平野部が海岸沿いに偏在する能登、北加賀①は、後期後葉に集落数のピークがあるとした。また、平野部が比較的広い北加賀②、南加賀は、後期後葉より終末期に集落数のピークが確認できるという。つまり平野部が少ない地域のほうが集落増に応じた高所立地集落の形成が早くなる傾向を指摘した。

◎集落数増加と人口増

この集落数の増加が人口増加と相関するののかについても意見交換された。パネラーからは、北部九州・山口では、先行（早い時期）する人口増に対応して高所立地集落も増加する一方、山陰以東では人口増が遅れて生じるという見方が、集落数の増減から指摘された。また、濱田も山陰地域が後期に遺跡数増加（低地の人口増を丘陵上で吸収して大規模集住化）したのは、移動頻度増加というよりも居住地点の増加とみた。一方で、出雲平野（平野内で自然堤防が発達している）では、低地内で居住域増加（人口増）を受け止めて、大規模な集住を実現した可能性があるという。これに対して、田畑は人口増加がその時期における小地域内のキャパシティーを越える増加を示す際に、高所立地集落の形成が進行する可能性に言及した。これに関して石川県域では、弥生後期後半～古墳時代前期に集落が海側に進出している可能性も検討の必要性があるとした。これは、中期以前の変化とは全く異なる性質のものという評価である。

ここまででは、集落動態だけからの評価であったが、この人口増減の問題を鉄器導入の変化に結びつける指摘が、林からなされた。北陸地域では、弥生時代後期以降に集落出土鉄器の増加が認められ、なかでも小型木工具の急激な増加は、木器製作や木材加工の発達と生産力の向上を示す可能性が高く、

濱田からも同様の指摘がなされた。さらに林は、同時期の北陸地域では、小型木工具と鉄製農耕具の増加が特徴的で、特に鉄製農耕具は乾いた丘陵上の開墾に効力を発揮し、丘陵部への集落進出の拡大と鉄器増加が相関する可能性を言及した。

◎高所立地の集落＝水田適地との距離の拡大について



細辻嘉門氏

次に、高所立地の集落増加は水田適地との距離の拡大傾向を示すというコーディネーターの若林の視点についても議論された。これについて田畑は、山口県域の例では低地が狭小であることもあり、高所立地集落と水田との距離が比較的近いことを指摘する。この点に関しては、低地の広さにより状況が大きく変わっている可能性を指摘する。また、丹後地域を軸とした分析を例に、加藤は狭い谷の中に集落と水田が併存しており、必然的に両者の距離は近くなるという。また、細辻嘉門は、富山県の例では丘陵上に居住域と墳墓を計画的に配置しているとする。パッケージ的に、直径2km圏内程度がそのような遺跡群配置の単位となるという。居住域を核として水田や墓域などの地域社会形成の単位がどのよ

うな地理的広がりなのかを考える上で興味深い。

◎気候変動と集落動態

次の話題として気候変動と高所立地集落形成の相関／非相関も取り上げられた。現在の年輪酸素同位体比分析の成果では、弥生時代中期（紀元前4～2世紀）は乾燥温暖傾向が続き、中期後半の最終段階の紀元前1世紀頃に多雨冷涼化するという。また、弥生時代後期末～古墳時代初頭の紀元後2世紀頃が、降水量変動の非常に激しい時期であることがわかっている。

これについて、富山県の例を中心に、細辻は湿潤寒冷化した弥生後期前半は集落が減少する時期であるとともに、天王山式土器の出土遺跡が散見されるという。つまり環境変化後の限定された時期に東からの影響が顕著なことに注目した。また、参加者の一人である久田正弘は、北陸地域で出土する“天王山式土器”は東北地方で典型的な“天王山式土器”よりも古い段階が主体となることを指摘した。北陸地域との共伴関係ではV-3（後期中葉）が下限だという。これは細辻のいう「時期が限定される」という指摘と一致している。また、濱田から鈴木への指摘で、温暖で乾燥状態な紀元前4～2世紀（中期前葉～後葉）に北陸地域で遺跡数が増加して、多雨冷涼化する紀元前1世紀（中期末）に遺跡数が減少した後、後期以降に遺跡数が徐々に増加し、後期後葉に急増するという構図は、山陰地域の大山山麓と類似するという。両地域にみられる共時的な集落数の変動は、気候変動に連動する動きとなる可能性があるだろう。

◎遺跡数の増加（人口増）と他地域との交流関係

ここまでは、各地域内の集団間にみられる内的関係の変化のみを議論してきたが、実際には広域な人的移動を集落変化の背景に考えることも重要である。このことについて山崎は、福岡県域で丘陵上に集落が進出する時期には、ほぼ同時期に韓半島から土器や金属器の流入が確認でき、韓半島からのインパクトと人口増加を示す丘陵上への集落進出が対応する可能性を示す。また、前期末・中期初頭の無文土器が多く出土する地点は拠点集落の周辺域が多い。例えば、福岡平野では板付遺跡（拠点集落）の周辺丘陵に位置する諸岡遺跡で無文土器が多く出土し、三国丘陵においても拠点集落である一ノ口遺跡の周縁域に渡来系文物が顕著にみられるという。外部からの移住が人口増加に結びつ



若林邦彦氏



林 大智氏

くのか、あるいは、人口増加期は移住者を多く呼び込む社会変化が起きているとみるべきか。いずれにしても各地域の内的変化と、地域間関係という外的要因が相関することは留意すべきであろう。

以上のように、いわゆる高地性集落の出現や増加の背景となる高所立地集落の動態には、地域内・地域間の様々な要素が関与していることが予想される。ただ、同じような社会変化は古墳時代や古代・中世にも発生したはずである。それが、なぜ弥生時代にはいわゆる「高地性集落」の増加という形（しかもすべてで同時に起こるわけではない）で現れるのか。そこには私たちが弥生時代と呼んでいる時期の独特の特性が反映していると考えられるだろう。高地性集落論は決定的な結論をもたらさないものの、つねに弥生社会分析の深化を促進する。今回もそのことをおおきく感じる議論となった。

ただ、一つだけ言える重要なことがある。それは、このような研究が、全国で多数行われている開発に対応する記録保存調査の膨大な集積の上に成立しているということである。いわば、遺跡動態論は埋蔵文化財を調査している価値の最大の成果といえる。ただし、調査情報を盲目的に集めただけではそこに解や議論の発展はない。高地性集落論のように、「どのような問いだて」が私たちの生み出す膨大な遺跡情報を生かすうえで有効かという意識は必要だろう。幸いにして、この意識は共有され

ており、九州前方後円墳研究会や古代学研究会をはじめ、多くの研究者グループがこのような研究に取り組んでいる。また、古気候学者からも人口動態や集落立地変化については強い関心が寄せられている。この状況が進展するかどうかは、「問い立て」の有効性いかんであろう。筆者はこの点に関して楽観的であることを記して、結びとしたい（若林邦彦）。

参考文献

- 小野忠熙編 1953 『烏田川－周防烏田川流域の遺跡調査研究報告』、山口大学烏田川遺跡学術調査団
佐原眞・田辺昭三 1966 「弥生文化の発展と地域性－近畿」『日本の考古学Ⅲ弥生時代』、河出書房
小林行雄・佐原眞 1964 『紫雲出－香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究－』、詫間町文化財保護委員会
都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号、考古学研究会
伊藤実 1991 「瀬戸内の環濠集落と高地性集落」『古文化論叢－児嶋隆人先生喜寿記念論集』、児嶋隆人先生喜寿記念事業会
柴田昌見 2004 「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観10 弥生・古墳遺跡遺構』、小学館
中塚武・若林邦彦・樋上昇編 2020 『気候変動から読みなおす日本史第3巻先史・古代の気候と社会変化』、臨川書店
濱田竜彦 2006 「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態－大山山麓・中海東岸地域を中心に－」『古代文化』第58巻第2号、古代学協会
森岡秀人 1981 「東六甲の高地性集落－上－」『古代学研究』第96号・1982 「東六甲の高地性集落－中－」『古代学研究』第97号、古代学研究会
荒木幸治 2021 「高地性集落」の意味と基礎分析」『季刊考古学 高地性集落論の新しい動き』第157号、雄山閣
福家 恭 2021 「淀川水系における研究の進展」『季刊考古学 高地性集落論の新しい動き』第157号、雄山閣
若林邦彦 2021 『弥生地域社会構造論』、同成社
信里芳紀 2022 「備讃瀬戸における高地性集落とその背景」『古代文化』第74巻2号、古代学協会
若林邦彦 2022 「大阪平野における弥生時代以後の集落移動頻度の検証」『古代文化』第74巻2号、古代学協会
柴田昌見 2024 「海上アクティビティと高地性集落－双方向視認検証予備実験を経て－」『「高地性集落」論のいま－半世紀ぶりの研究プロジェクトの成果と課題－』科学研究費助成事業成果報告・普及シンポジウム発表要旨集

木製塔婆造立文化の基礎的研究

調査部 垣内光次郎

はじめに

「卒塔婆」は、釈迦の遺骨を納めた仏塔を意味する古代インドの梵語の「ストゥーパ」が音写された言葉で、仏教と共に伝来した日本では、五重塔など古代寺院の建築物として広まり、時代と用材により多様な塔婆が造立された歴史がある。また卒塔婆は、現代においては主に死者の供養や墓標として立てた木製の板木などを指すものとされるが、その歴史に関わる遺物が能登で発見された。

それは2007年、当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した珠洲市の野々江本江寺遺跡で出土した木製板碑や木製笠塔婆である。2011年に刊行された報告書では、出土品の検討委員を務めた時枝務氏が「木製板碑について」、狭川真一氏が「木製笠塔婆の検討」を論考したことで、それまでは絵巻物の『餓鬼草紙』とわずかな史料で説明されていた木製板碑と木製笠塔婆が、考古資料として広く認識されるようになった⁽¹⁾。また同年10月には、当センターで環日本海文化交流史研究集会「中世日本海域の墓標－その出現と展開－」が開催され、鳥根県山持遺跡の大型卒塔婆と鳥取県吉谷亀尾前遺跡の木製板碑が、山陰の木製塔婆として報告されたものの、近隣の富山県や福井県では木製板碑や木製笠塔婆が報告されず⁽²⁾、能登や加賀で出土を確認した木製塔婆は地域的な遺物のようになり、その研究は進展しなかった。

この状況が大きく変化したのは、金沢市埋蔵文化センターが2019年に発表した千田北遺跡の木製塔婆である。とくに金箔を施した額と額縁の出土で、木製笠塔婆に揭示された扁額の構造が判明したことが大きい⁽³⁾。さらに2023年になると、富山県立埋蔵文化センターが保管する木製品に木製板碑と木製笠塔婆の額縁があることを新たに確認し、福井県教育庁埋蔵文化調査センターでも六角木幢の垂れ飾りである風招を確認した。翌年には富山県小矢部市で六角木幢の笠を調査する機会があり⁽⁴⁾、それらを通して古代末の北陸地方では、卒塔婆と木製板碑、六角木幢と木製笠塔婆の4種の木製塔婆が、各所で造立されたことを確認した。

このため本稿では、北陸で出土している木製塔婆の遺物を取り上げることで、板材を成形した卒塔婆と板碑、加工部材を組み上げた笠塔婆と六角木幢の存在を明らかにすることで、古代末に展開した木製塔婆造立文化の概要を明らかにしたい。ただ六角木幢と木製笠塔婆は、部材が出土するも塔形の復元にはいまだ問題を残しており、今回は出土品の分析に注力することにした。また能登の仏像がもつ胎内銘文と『医心方』の紙背文書にみられる細工所に着目すると、能登や加賀の国衙が管理した木工施設が、この木製塔婆の造塔に関与した可能性があり、それについても説明を加えたい。

1 北陸出土の木製塔婆

北陸西部に位置する富山県、石川県、福井県の三県は、旧国では越中、能登と加賀、越前と若狭の五カ国に該当し、その領域で古代末から中世初期に造立されたことが見込める木製塔婆は、一覧表に示した能登6遺跡、加賀9遺跡、越中4遺跡、越前1遺跡の20遺跡を数える。さらにこれらを俯瞰的に捉えると、北陸の木製塔婆は古代後半の小型卒塔婆から始まり、古代の末頃には六角木幢や木製笠塔婆と呼べる大型の木製塔婆が造立されるまでに発展し、野々江本江寺遺跡で知られたように木製笠塔婆と木製板碑が、同時に造立される場面もあったのである。

(1) 能登の木製塔婆

能登半島先端に位置する珠洲市の野々江本江寺遺跡は、古代の末頃に造立された木製塔婆が、一括出土したことで注目された。これらは国衙領であった正院地区の西側を流れる金川に沿った低湿地へ廃棄された新旧2基の木製笠塔婆と1基の木製板碑、門柱とみられる竿状木製品などで、近隣の墓地で造立されていたものが、ここへ運び込まれたと報告されている。

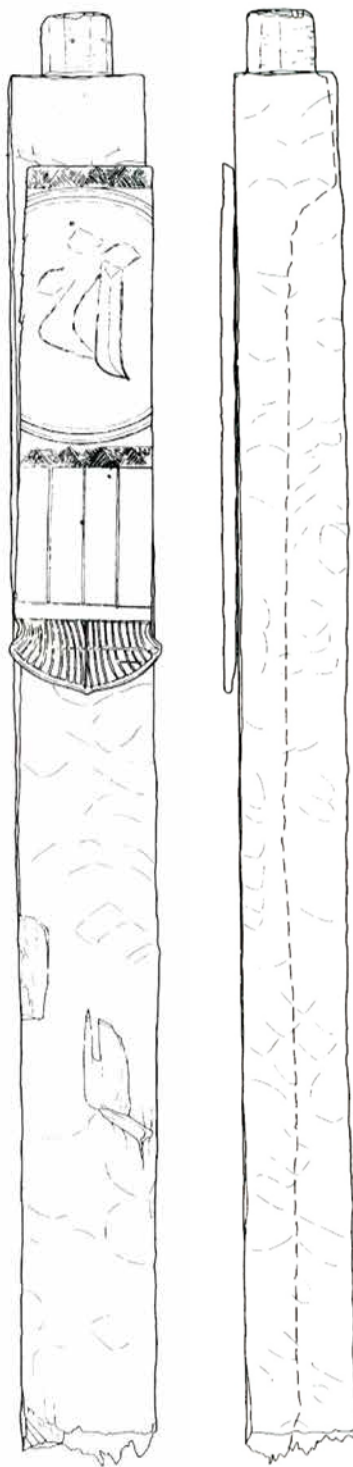
2基の木製笠塔婆は、スギの角材を竿に整えたもので、笠塔婆1(第1図1)の上端に作り出された径9cmの円柱ホゾに、別材の笠を差し込んだ時の痕跡が残り、竿の前面に残る釘穴からはアスナロ材の額を固定したことが確認された。また2基の竿は、背面に「内挟り」と報告された溝状の挟り込みを持ち、木質の腐朽度合いからやや小型の笠塔婆2が古いことが見込めた。このため古代末の木製笠塔婆は、笠塔婆2から笠塔婆1へと造立され、その期間に竿幅が15.7cmから17.9cmへと広がり、笠塔婆の規格が大型化した可能性がある⁽⁵⁾。

木製板碑(第1図2)は幅30.5cm、厚さ12cmのヒノキの厚板を成形したもので、下端に残る切断痕から本来の長さは3~4mと考えられている。上端の頂部は三角錐に近く、二段の羽刻みも立体的な作りから、時枝務氏は「特論1 木製板碑について」のなかで、「木製板碑は石製板碑に先行し、野々江本江寺遺跡と後者の間には少なくとも数型式以上のヒアタス(中断)がある」としている⁽⁶⁾。また板碑の腐食度合いは、笠塔婆1と似ており、両塔は同時期に造立された可能性が高い。

ただ報告書では、「板碑は在地にないヒノキを用いているので珠洲で製作することはできず、京からの搬入品と考えられる。一方笠塔婆の額はアスナロ材なので地元で作られたと考えられる。」⁽⁷⁾と板碑を畿内から搬入品と解説する。組立式の笠塔婆が、能登で自生するアスナロとスギを加工することで造塔されたなら、ヒノキの厚板を削り出した木製板碑も、木工技術の観点からすると能登で造塔されたと理解するのが自然であるが、ヒノキの厚板利用から搬入品と考えられたのである。

北陸の木製塔婆出土遺跡一覧表

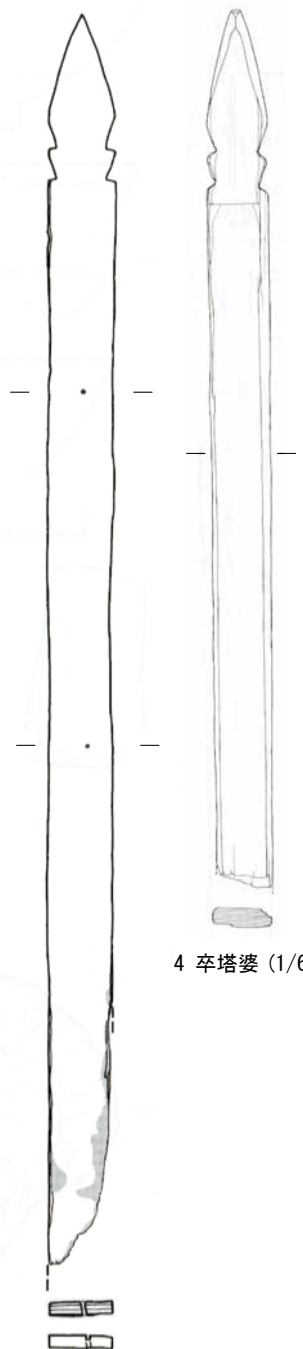
	旧国	遺跡名	所在地	卒塔婆	板碑	笠塔婆・六角木櫃				
						宝珠	笠	垂れ飾り	額	竿
1	能登	野々江本江寺遺跡	珠洲市		1				1	2
2		国分B遺跡	七尾市	1						
3		小島西遺跡	七尾市	1						
4		三室オンド遺跡	七尾市					1		
5		太田A遺跡	羽咋市					1		
6		中沼コノダン遺跡	かほく市					1		
7	加賀	梅田B遺跡	金沢市				1(四角)			
8		木越コウタイジン遺跡	金沢市					2		
9		千田北遺跡	金沢市	2		1	1(六角)	4	11	
10		大友西遺跡	金沢市	3				1		
11		畝田・寺中遺跡	金沢市						2	
12		豊穂遺跡	金沢市	1						
13		上荒屋遺跡	金沢市					1		
14		千代・能美遺跡	小松市				1(四角)			
15		浄水寺跡	小松市	1		1				
16	越中	埴生南遺跡	小矢部市				1(六角)			
17		岩坪岡田島遺跡	高岡市						2	
18		中名VI遺跡	富山市		1					
19		堀切遺跡	黒部市	8						
20	越前	太田・小矢戸遺跡	大野市					1		
4ヶ国で20遺跡				17	2	2	4	12	16	2



1 木製笠塔婆の額と竿 (1/10)

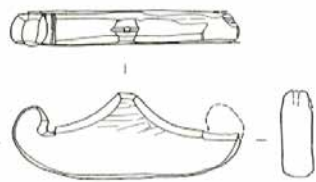


2 木製板碑 (1/10)



4 卒塔婆 (1/6)

3 卒塔婆 (1/6)



5 六角木幢の風招 (1/3)



6 六角木幢の風招 (1/3)

- 1 野々江本江寺遺跡 (珠洲市)
- 2 同上
- 3 国分B遺跡 (七尾市)
- 4 小島西遺跡 (七尾市)
- 5 三室オンド遺跡 (七尾市)
- 6 中沼コノダン遺跡 (かほく市)

第1図 能登出土の木製塔婆

そのため能登の中世集落遺跡を俯瞰すると、建築材の多くがスギとクリで占められヒノキは小型の器物など少ない。ただ加賀で木製笠塔婆が出土した金沢市の梅田B遺跡や小松市の千代・能美遺跡では、ヒノキ柱の部分利用がみられ、加賀市南部の直下遺跡では、8世紀中頃から9世紀の掘立柱建物にヒノキ材の柱や礎盤が多用され⁽⁸⁾、加賀の丘陵地にヒノキが自生した可能性がある。また保元三年(1158)、能登で造仏となった七尾市海門寺の千手観音像の胎内墨書を見ると、能登では霊木のヒノキ材を集め置いた「阿修羅処」があり、千手観音像の造仏には能登や各地の霊木が使用されている⁽⁹⁾。

このため木製塔婆の製作を担った木工施設が能登の国衙近くに所在したと推考すると、野々江本江寺遺跡の木製板碑も「阿修羅処」が保管したヒノキの厚板を使い、木製笠塔婆と共に造塔された可能性があり、それらが国衙領であったの正院の有力者の元へ運ばれたと考えている。

七尾市の国分B遺跡と小島西遺跡は、能登国分寺跡の西側を流れる御祓川の下流左岸と河口付近にあり、共にスギ板を加工した古代末の卒塔婆が出土している。国分B遺跡の卒塔婆(第1図3)は長さ1m以上が見込め、白磁碗Ⅱ類が共伴する11世紀末頃の溝から出土したもので、2箇所釘穴から堀や柱に掲示された可能性が高い。また小島西遺跡の卒塔婆(第1図4)は浜地の祭祀地区で出土した長さ70cm以上、幅5cmの卒塔婆で、供伴する土師器から11世紀後半と報告される。国分B遺跡よりも小型であるが、縦長の頭部は丁寧に削り出され、羽刻みの下には低い額部が認められる。

これら2点の卒塔婆は、野々江本江寺遺跡の木製板碑に比べて小型で立体性に欠けるが、縦長の頭部形は木製板碑よりも古相を呈する木製塔婆である⁽¹⁰⁾。その七尾市から羽咋市の周辺では、長野県の社宮司遺跡で判明した六角木幢に付随する垂れ飾りが3遺跡で出土している。笠や塔身など大型の部材には欠けるが、能登にも多くの六角木幢が造立されたと理解している。

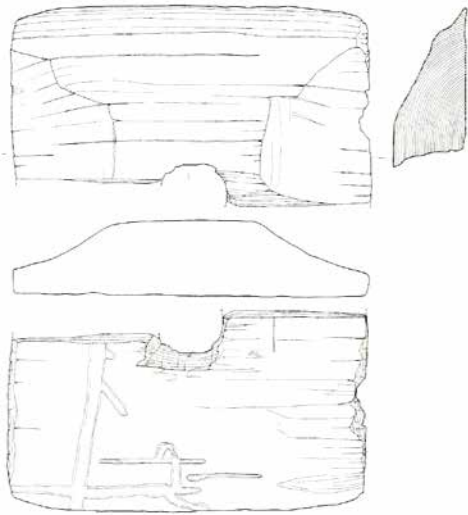
七尾市の三室オンド遺跡は七尾南湾に面した三室町で、御堂が転化したとされる「オンド」の呼称地にあり、長さ12.3cmの蝶形の木製品(第1図5)は六角木幢の風招と報告されている。またかほく市北部の中沼コノダン遺跡にも蝶形の木製品(第1図6)があり、形状と頂部の木釘痕から六角木幢の風招と推定している⁽¹¹⁾。さらに沖積地の集落遺跡である羽咋市の太田A遺跡でも、12世紀後半の珠洲焼や白磁製品が供伴する溝から風招形の木製品が出土している。これは猪目と呼べる「ハート型の透かし」を持ち、長さ18.4cm、高さ10.2cmの寸法をみると、軒下の垂れ飾りとしては大きく、六角木幢以外の飾り具であった可能性がある。

このように能登で確認した木製塔婆と部材をみると、卒塔婆や風招などの小型品の出土が多く、野々江本江遺跡のような大型品は少なく六角木幢の塔形も不明瞭である。他方、小島西遺跡の卒塔婆と野々江本江寺遺跡の木製板碑は、形態面から関連性が推定され、その系譜を探る必要がある。木製笠塔婆2から1へと大型化した笠塔婆も、加賀の千田北遺跡などと資料検討する必要がある。

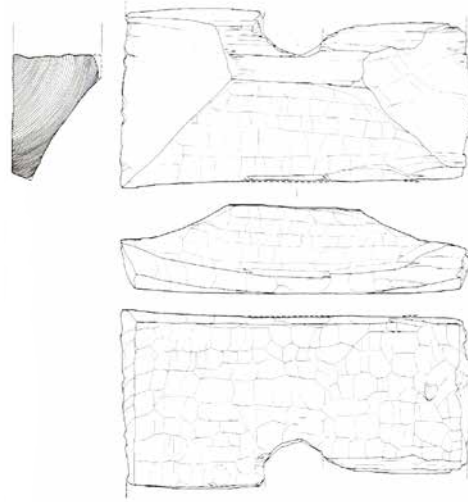
(2) 加賀の木製塔婆

石川県南部の加賀では、9遺跡で木製塔婆の出土を確認している。種別をみると木製笠塔婆に装着された笠と額が、金沢市の梅田B遺跡と千田北遺跡にあり、六角木幢の垂れ飾りに比定できる風鐸と風招が、市内の沖積地に位置する古代後半から中世の集落遺跡で見られる。

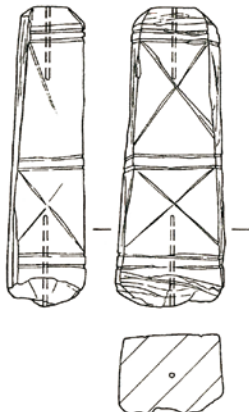
梅田B遺跡は、金沢市の北部に所在する大規模な集落遺跡である。南北に通過した古代の北陸道を遺跡の西側で検出したほか、第3次調査区の中世の道路遺構からは、木製笠塔婆の笠(第2図7)が路面の窪地から出土している。これはスギの厚板を横長の屋根に整えたもので、軒幅45.7cmを測る。中央に設けられた円孔は直径8.8cmを測り、野々江本江寺遺跡の笠塔婆1に接続するような寸法を呈している。また軒裏には蕨手や風鐸の接合痕が無いことから、加賀の木製笠塔婆には、垂れ飾りなどの装飾品が付かないと理解している。その梅田B遺跡の西方約4kmの沖積低地には、木製笠塔婆の額



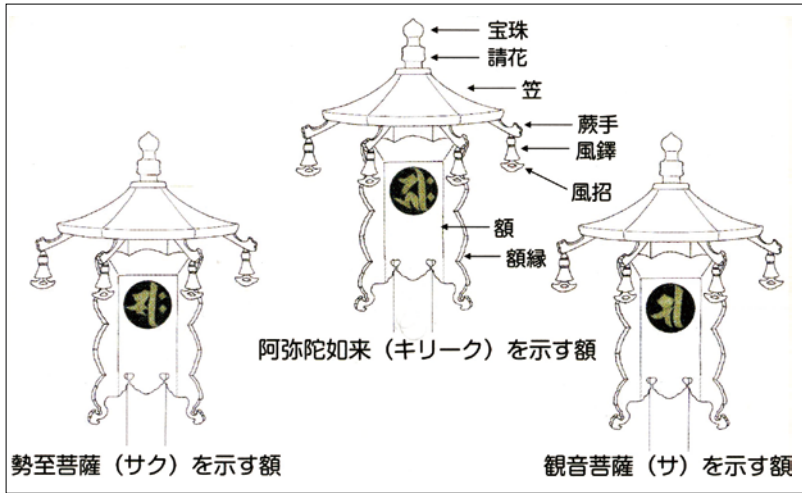
7 木製笠塔婆の笠 (1/10)



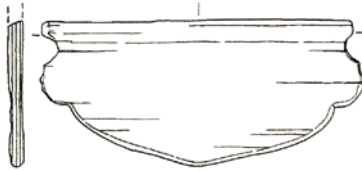
8 木製笠塔婆の笠 (1/10)



9 六角木幢の風鐸 (1/3)



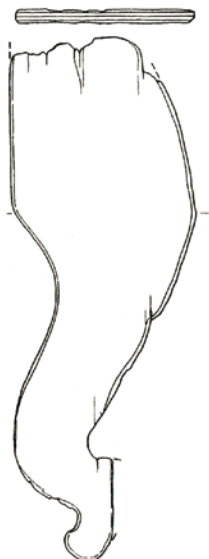
千代北遺跡出土笠塔婆の推定復元図 (出典、註(3)文献)



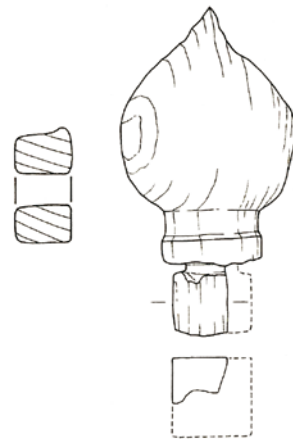
10 木製笠塔婆の額 (1/6)



12 六角木幢の風招 (1/3)



11 木製笠塔婆の額縁 (1/6)



13 木製塔婆の宝珠 (1/3)

7 梅田B遺跡 (金沢市)

8 千代・能美遺跡 (小松市)

9 大友西遺跡 (金沢市)

10 畝田・寺中遺跡 (金沢市)

11 畝田・寺中遺跡 (金沢市)

12 上荒屋遺跡 (金沢市)

13 浄水寺跡 (小松市)

第2図 加賀出土の木製塔婆

が一括出土したことで知られた千田北遺跡があり、両遺跡の中間に位置する木越コウタイジン遺跡でも、六角木幢に付けられた可能性がある蕨手や風招の破片が報告されている⁽¹²⁾。

その千田北遺跡は、金沢市の浅野川下流に広がる沖積低地に設営された弥生時代から中世の複合遺跡で、居館の堀割とみられる区画溝からは木製塔婆と部材が出土した。なかでも木製笠塔婆に掲示された三面の額は、円相内に「キリーク（阿弥陀如来）」・「サ（観音菩薩）」・「サク（勢至菩薩）」の種字を刻んだもので、種字に残る金箔から『吾妻鏡』文治五年九月十七日条にある「其路一町別立笠率都婆、其面図絵金色阿弥陀像」の記述を裏付ける木製笠塔婆と発表された⁽¹³⁾。またこれらの額と額縁は全てスギの板材を加工したもので、外縁に刻まれた花先形の装飾は、古代寺院の門や仏堂に掲示された扁額の装飾形態に近似することから、その影響が考えられている。

調査を担当した向井裕知氏は、木製笠塔婆は「十二世紀中頃までには建立され、十三世紀中頃までには廃棄されたと考えられる」と年代を示し、三面の種字から「三基一体で阿弥陀三尊を示すもの」と捉え、「阿弥陀信仰に基づく先祖供養や自己の作善による浄土を目指して建立された」と解説している⁽¹⁴⁾。また千代北遺跡の発表資料から額の大きさを確認すると、額の長さは68.5 cmと70 cmで、円相径は約32 cmとれている。これは野々江本江寺遺跡の笠塔婆1の額長69.5 cm、円相径32.5 cmに極めて近く、下端に刻まれた花先形と両側に刻み込まれた猪目もほぼ同形である。

このため、千田北遺跡と野々江本江寺遺跡の木製笠塔婆は、出土が加賀と能登、用材がスギとアスナロと異なり、額面の鋸歯文装飾や銘文区画の有無などに違いがあっても、近似する寸法と基本形の背後には、同じ設計規格が存在した可能性がある。

なお発表資料では、この額と額縁に加えて、南側区画の池から宝珠や笠、蕨手、風鐸、風招などの部材が出土したことから、竿（塔身）の上に平面六角形の笠が載り、軒先に蕨手と風鐸などの垂れ飾りが付いた「千田北遺跡出土笠塔婆の推定復元図」を示している。

この復元図については、当初は妥当なものとして受け止めていたが、梅田B遺跡や小松市の千代・能美遺跡の笠が、平面長方形で軒裏に接合痕が無いこと、また富山県小矢部市で見学した六角木幢の笠と千田北遺跡の笠には、軒裏に蟻型追い込み形状の接合部を持つことから、復元図にある宝珠や笠、軒先の垂れ飾りの部分は六角木幢と考えられる。どうも千田北遺跡では、阿弥陀三蔵の木製笠塔婆が造立される以前に、六角木幢の造立されたことが推測され、それらに関しては、今後刊行される報告書で整理・検討されると期待している。

金沢市の西部で発掘調査が実施された集落遺跡のなかで、古代後半から中世前半の遺構から六角木幢や木製笠塔婆の部材が散発的に出土している。ただこれらの発掘調査は、能登で木製塔婆の造立が確認される以前であったことから、取り上げた木製品は器種不明や飾板の名称で報告されている。

石川県庁の北に位置する大友西遺跡もその一つで、東調査区で北宋後半の白磁皿と珠洲焼が出土した東SD205の「不明木器」（第2図9）は、社宮司遺跡の風鐸と同形品である。高さ11.7 cmの製品は、2本1単位の線刻が側面の上・中・下に巡り、溝間には「×」の線刻が入る。さらに両端の中央には接合用と考えられる小孔が確認されている。

出土地の東SD205の付近は、並走する溝から道路の敷設が推測されるも、この南北方向のSD205は、近くの総柱建物とも方位が揃うことから、宅地の区画溝の可能性が高い。またこの大友西遺跡では、平安前期から中期の斎串が出土しており、平安後期と鎌倉期前期の溝にある3点の斎串は、幅2.5 cmと3.6 cmの寸法と頭部形状から斎串から除外し卒塔婆とするのが適正であろう。

金沢西部遺跡群を構成する畝田・寺中遺跡は、古墳時代から中世の大規模な集落遺跡で、木製笠塔婆の額と額縁と見込まれる木製品が、小河川のSD240とそこへ接続する溝SD222から出土している。

SD222の「飾板」(第2図10)は、花先形と左右に刻まれた猪目から額中央の下垂部であり、SD240の「不明品」(第2図11)は額縁側面の下方に付いた脚状の飾りである。共に厚さ1.2cmの板材で、樹種は針葉樹とあることから、千田北遺跡のようにスギ材から製作されたことが考えられ、用水的な溝SD222の付近に千田北遺跡のような木製笠塔婆が造立されたことが見込まれる。

白山市に隣接する上荒屋遺跡は、東大寺領横江荘遺跡の北部を占める古代の荘園遺跡で、「綾庄」「東庄」などの墨書土器が大量に出土した河川SD40の上層、10・11世紀代の遺物に風招とみられる木製品(第2図12)がある。これは長さ14.1cmの飾りで、内部が中空となる大きな窓をもつ。市内木越コウタイジン遺跡でも中空の風招があり、千田北遺跡の発表資料をみても風招は中空と中実の2種類があることが説明されている。加賀の六角木幢に付けられた飾り具の風招は、その形状から2種類があり、能登南部の風招とは少し異なっていた可能性がある。

なお、金沢市の豊穂遺跡では、中世の用水的な溝SD031から「永和元年(1375)五月」の墨書銘をもつ卒塔婆が出土している。これは長さ66.8cm、径3.9cmの丸木の端部に五輪塔を作り出し、その下に五大種子菩提門の「ケン・カラ・ラン・バン・アン」の種字を墨書したものである。南北朝期の紀年銘と五輪塔形から、本論で扱う古代末の木製塔婆群とは区別されるものである。

加賀南部の小松市では、古墳前期の首長居館であることが判明した千代・能美遺跡の川跡に設けられた平安後期の堰状遺構から、木製笠塔婆の笠が出土しており、丘陵地の浄水寺跡からは、平安末期の整地層で宝珠形の木製品が発掘されている。

千代・能美遺跡の笠(第2図8)は、ヒノキの半割材を屋根形に加工したもので、軒幅は46.2cmを測り、反り上がる軒先や降棟の反りは、平安末頃の寺院建築にみられる屋根を模している可能性が指摘されている⁽¹⁵⁾。表面にはヤリガンナとみられる工具痕が残り、笠の基本寸法と円孔は、金沢市の梅田B遺跡の笠とも近似している。またこれらの笠をみると、円孔の部分で折れていることからその平面形は方形のように感じられるが、木取りと年輪から元の形状を考えると、笠の奥行は33cm前後が見込め、平面形は横に長い長方形であったと推定される。さらに、これらは竿の上端に載り、その軒下に信仰標識の扁額が装着された塔形を思い起こすと、扁額の庇となる部分を確保する必要から、笠の奥行が短くても、竿のホゾが接合する円孔は、笠の奥側に寄っていたと理解される。

山間寺院の浄水寺跡で出土した宝珠(第2図13)は、下部のホゾから組立式の木製塔婆に装着されたものと判断されるも、その塔形は六角木幢か木製笠塔婆になるか判然としない。高さ10.2cmの宝珠は、直径が7cmと小形で、木質の腐食が進んでいても用材はヒノキとみられる。出土地点のⅡ-3・4テラスは、墨書土器が大量廃棄された平安前期の沢地形が、平安の末頃に埋め立てられ支院のような建物が整備された平坦地である。宝珠の出土点の上方には、径11.2cmの八角柱が単体で立つことから、加賀ではこのような八角柱が、木製笠塔婆の竿であった可能性もある。

このように、加賀の8遺跡で確認した木製塔婆をみると、平安後期から鎌倉初期の期間に組立式の木製笠塔婆と六角木幢が造立されたことは明らかである。またこれらの塔婆が造立される以前には、小型の卒塔婆がみられることも留意する必要がある。その加賀の木製塔婆は、北部の金沢市域に集中するようにみられるが、これは沖積地における発掘調査の密度が、大きく反映した結果と理解している。加賀北部では木製笠塔婆・六角木幢ともスギ材を多用するが、南部の小松市域ではヒノキ材の利用もみられ、塔形の細部をみても違いがある。このため加賀の木製塔婆を製作した木工施設は、用材と塔形の違いから加賀国内で2ヵ所以上の施設が存在したと考えられる。

(3) 越中と越前の木製塔婆

越中や越前の木製塔婆は、出土地一覧表にあるように少ない。それは越中の場合、木製笠塔婆や木

製板碑が出土した大規模遺跡の発掘調査が、能登で木製板碑が発見された2007年以前の出来事であり、『餓鬼草紙』にみられるような木製塔婆が、古代末の出土木製品に混在することが、考古学関係者に認識されていなかったことが要因とみられる。またこのことから、小矢部市出土の六角木幢が考古学関係者に紹介されながらも、研究の俎上に乗らなかったのである。

その六角木幢が出土した小矢部市の埴生田南遺跡は、俱利伽羅峠を越えた中世の北陸道が通過した埴生田地区の水田に広がる遺跡で、1962年ごろの水田の区画整理で六角木幢の笠（第3図14）が出土している。発見者宅で保管されるこの笠を確認した西井龍儀氏は、2014年に「木造六角宝幢天蓋笠」の名称を冠して、出土地の埴生保が石清水八幡宮の荘園であったことに関連させ、長野県の社宮司遺跡のように六角木幢が屋外の荘厳具として造立された歴史を紹介している⁽¹⁶⁾。

また笠はスギとみられる針葉樹の大木を四分割した用材を使い、六角形の頂部から下る六面の屋根を削り作り出したものである。高さは23.8cmを測り、腐食で三面の軒先を失うも、軒の平面形は楕円形が復元され、その長径は58cmが見込める⁽¹⁷⁾。社宮司遺跡の笠と比べて高さが3cm程高いものの、平面形と復元長径が近似することから、塔形は社宮司塔に近いものが推定される。

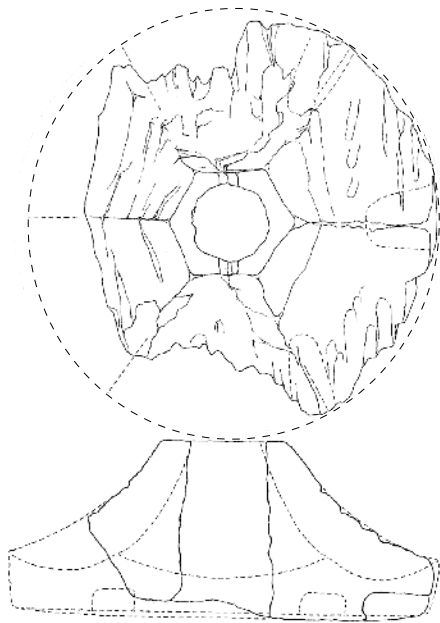
笠の中央には径10.2cmの直孔が開き、弱い反り上がりを見せる。軒裏をみると、3ヶ所の蟻型の追い込み構造のホゾ孔が残り、六筋の降棟の先には社宮司塔と同じ蕨手が装着されていた六角木幢と考えられる。加えて加賀の千田北遺跡で出土している大型の笠も、寸法で大きな違いをみせるが、平面の六角形と軒下の接合構造が一致することを重視すると、これも六角木幢の笠であろう。

次に高岡市の岩坪岡田島遺跡は、小矢部川の下流左岸に所在する縄文・古代・中世の複合遺跡で、調査区南部で小矢部川方向へ流下した小河川（SD11）から木製笠塔婆の額縁が出土している。ただその額縁形状は加賀で知られた額縁と違いがあり、越中の木製笠塔婆に装着された額縁は、加賀とは加飾の点で異なることを確認した⁽¹⁸⁾。この遺跡の発掘調査は1999年で、小河川の北岸域に総柱建物などから構成される平安末期の集落展開が確認されたことから、小河川の南岸で出土した額縁は、集落の住人が南側の空地で木製笠塔婆を造立したことを示している。

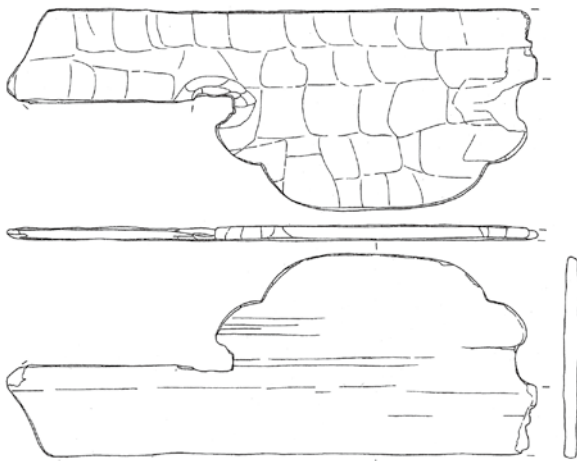
その木製笠塔婆に装着された額縁（第3図15・16）は、厚さ1.3cmのスギの柾目板を加工したもので、小河川の肩で3片が重なるように出土したことから廃棄された可能性がある。またヤリガンナ状の加工痕を残す面は、額の裏面とみられた。見学時の観察では、15は額に上辺に付く額縁、16は額に左辺に接合した額縁の上部片と判断したが、2点とも花先形の両側に加賀の額縁にはみられない猪目が刻まれていた。報告書は「(15は)如意頭文形の部分の両側は裏面からハート形の抉りが入れている」と、その形状を具体的に説明している⁽¹⁹⁾。越中の木製笠塔婆に装着された額縁には、花先形の間に猪目を配した加飾が採用され、加賀とは装飾の意匠が少し異なっていたのである。また報告書では、額縁を「懸魚または枠にはめ込み固定する建具類」と考えて、中世の社殿建築との関連を推定したが、調査が木製塔婆の出土以前であることから容認される。

富山市南郊の扇状地に位置する中名VI遺跡からは、北陸で2例目となる木製板碑が出土している。遺跡の発掘調査は岩坪岡田島遺跡と同じ1999年で、形状は木製板碑でありながらも建築関係の遺物と判断され「板状木製品」と報告されている。

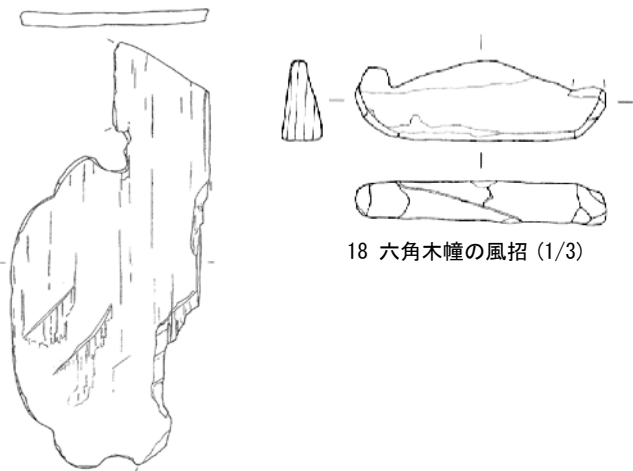
富山県埋蔵文化財センターが保管する木製板碑（第3図17）は、保存処理で黒色を帯びて頂部から額部にかけては、出土後の収縮と細かい割れがあり、右側面には欠損箇所もみられた。ヒノキの厚板から正三角形の頂部と2段の羽刻みを作り出し、頭部の下に額部と碑面を整えたその姿は、初発期の武蔵型板碑そのもので、頭部の形状から野々江本江寺遺跡より後出とみられた。また板碑の寸法は、横幅が26.3cm、額部の厚さ10.6cmを測り、167.6cmと報告された長さは下端の切断痕と碑面の裂けから、



14 六角木幢の笠 (1/10)



15 木製笠塔婆の額縁 (1/6)



18 六角木幢の風招 (1/3)

16 木製笠塔婆の額縁 (1/6)



17 木製板碑 (1/10)

- 14 埴生南遺跡 (小矢部市)
- 15 岩坪岡田島遺跡 (高岡市)
- 16 岩坪岡田島遺跡 (高岡市)
- 17 中名VI遺跡 (富山市)
- 18 太田・小矢戸遺跡 (大野市)

第3図 越中・越前出土の木製塔婆

本来の長さは3 mほどが見込まれた。

出土地のSD02は調査区を蛇行した古代から中世の自然流路で、幅14.5 m、深さ1.2 m、延長80 mの規模を持ち、内部から古代の須恵器や土師器、中世の土器や陶磁器に加えて、多くの木製品が出土したことが報告されている。厚さが10 cmを越えるヒノキの厚板を成形した板碑は、その形状から注意されるも、報告書では頭部を「装飾」と捉えて「装飾性をもった何らかの建築部材」としたことは惜しまれるが、保存処理の実施で形状を留めたことで、野々江本江寺遺跡の木製板碑と共に古代末の仏教文化を探る造形資料に位置づけられ、越中における木製塔婆の造立活動を裏付ける出土品として貴重である。

なお、中名VI遺跡で木製板碑が出土した小河川SD02の平面図をみると、修羅を推定させる7 m規模の又木があり、下流部の「治水・利水関係の構築物」としたSX01は、位置と規模からして河川の取水堰とみられるなど注目される成果がある。なかでもSX01の構築に利用された割材杭に注目すると、板状杭の31点が全てスギ材であるのに対して、棒状杭55点のなかにヒノキ8点、サワラ10点が混入している。どうも中名VI遺跡では、スギの丸太などを割り、クレ材を製材したような木材加工が行われ可能性が高く、この木製板碑もそのような加工施設で造塔されたとも考えられる。

このように越中の木製塔婆は、六角木幢や木製笠塔婆、さらに木製板碑が確認される内容から、出土の点数が少なくとも、越中国内にその造立文化が展開したことを裏付けており、古代末の仏教文化の一様相を示す造形遺物と評価できる。

他方、北陸南部の福井県をみると、大野市の太田・小矢戸遺跡で六角木幢に付く風招を確認したことから、木製塔婆の造立は越前の大野盆地にも及んでいる。

太田・小矢戸遺跡は大野市の市街地北部に所在する古代集落で、掘立柱建物の計画的な配置がみられると共に、縄文時代から室町時代の集落が複合したことが報告されている。六角木幢の風招と認定した木製品（第3図18）は、自然流路のようなSR01から出土した「異形木製品」で、アスナロ属の小板を削り出したものである。長さ10 cm、厚さ1.8 cmの風招は山形の頂部が剥落するも⁽²⁰⁾、基本形と両端の突起や寸法は、社宮司遺跡の「風招A・B」⁽²¹⁾とも近似しており、社宮司塔のような六角木幢が遺跡の自然流路SR01沿いに造立された可能性が高い。また福井市を中心とする越前盆地では、平安後期の波寄三宅田遺跡において小型の卒塔婆出土がみられることから、今後、古代末頃の出土木製品から木製笠塔婆や木製板碑が確認されると考えている。

2 木製塔婆の特質と特徴

北陸の木製塔婆として19遺跡の木製品を取り上げ、平安末期から鎌倉初期に造立された卒塔婆と木製板碑、六角木幢と木製笠塔婆の存在を説明したが、千田北遺跡の遺物編が未刊行の現段階は、組立式の六角木幢と木製笠塔婆については、掲載資料の不足から造立された塔形の復元が困難な状況にある。このため木製塔婆の製作技術と樹種を確認したうえで、一木造りで塔形が検討できる木製板碑について、その特徴などを整理することで研究の一助としたい。

(1) 木製塔婆の製作技術

北陸地方なかでも能登、加賀、越中、越前の四カ国で確認した木製塔婆は、古代の末頃に造立された卒塔婆と木製板碑、六角木幢と木製笠塔婆の4種で、いずれも当時の仏教文化を背景に造塔と供養が進められた木製の信仰標識である。またこれらは、部材や部品であっても、その用材と加工と仕上げの度合いをみると、製作は木工に手慣れた職人が、所要の木材に加工を加えて作り上げた造形物で、造立者の意図する土地へ運ばれたのち、屋外の標識として建立されたものである。

その木製塔婆を木工技術の観点⁽²²⁾から確認すると、卒塔婆と木製板碑が一木の板材から削り出した板状の塔婆であるのに対して、六角木幢や木製笠塔婆の笠や竿(塔身)は大きな分割材から削り出し、宝珠や多くの垂れ飾りは小型の角材や板材で作り出されている。また木製笠塔婆に装着された額と額縁は、ヤリガンナで仕上げた板材に規範性がある花先形と猪目を加飾として作り出し、額面に刻まれた種字と円相は、塗装と箔押で仕上げられた扁額で、工芸品の一つである。

そして組立式の両塔は、造立地へ搬送された宝珠、笠、竿がホゾを使い組み上げられ、六角木幢は軒下の蕨手に垂れ飾りが接続され、木製笠塔婆では額と額縁が鉄釘で組立てられ、竿へ装着されたことが出土部材の特徴から復元できる。立体的な屋根を持つ両塔を小型の建築物と認定すると、造塔の場である木工施設では、六角木幢と木製笠塔婆の立面図が存在したと考えられ、塗装や金箔の利用を考えると、製作に関与した職人は佛師に近い人物像が考えられる。

他方、能登と越中で出土している木製板碑は、ヒノキの厚板を削り出した塔婆で、頂部と羽刻みに類型性があるものの、横幅と厚みは用材の大きさを反映した形状を呈する。つまり木製板碑はヒノキの用材に沿った形で頭部や額部が成形されたもので、造塔の場では平面観は意識されるも設計図のようなものは存在しなかったと考えている。木製板碑の用材がヒノキに偏り用材を重視した造塔なら、用材のヒノキは霊木として特性を帯びたことで神聖視された可能性が高まり、霊木の験力に期待した造塔とも解釈されるが、それには木製板碑の資料蓄積と検討が必要である。

(2) 木製塔婆の年代と樹種

北陸出土の木製塔婆は、紀年銘の確認が少ないことから、共伴する土器・陶磁器の編年と用材に使用された木材の放射性炭素年代測定法から導かれた年代により、造立年代を推定している。報告書にある年代を総合すると、北陸の木製塔婆は11世紀中頃の卒塔婆から始まり、2世紀以内の造立期間が見込める。時代的には平安時代後期から鎌倉時代前期で、日本の仏教文化が大きく拡大発展する時期とも重なるが、大型塔の六角木幢と木製笠塔婆は、中世の造形物として存続しない。それは野々江本江寺遺跡と千田北遺跡で確認された木製塔婆を一括廃棄する現象が大きく関係するも、時期と成因が不明で、小型の卒塔婆の利用が13世紀以降も存続する点も併せて不明の点が多い。

このため前項の木工技術に関連して、一覧表に上げた20遺跡の部材と樹種を確認したい。それは木製板碑がヒノキの限定利用のように見え、木製塔婆の樹種利用に問題を認識したことによる。

北陸四カ国で木製塔婆と認定した部材と樹種は次の内容で、⁽²³⁾基本はスギ、ヒノキ、アスナロの針葉樹3種に限られるも、地域により樹種利用に相違がある。また社宮司遺跡のような広葉樹の利用は確認されない。

〔能登〕 卒塔婆(スギ)、板碑(ヒノキ)、額(アスナロ)、竿(スギ)、風招(スギ)

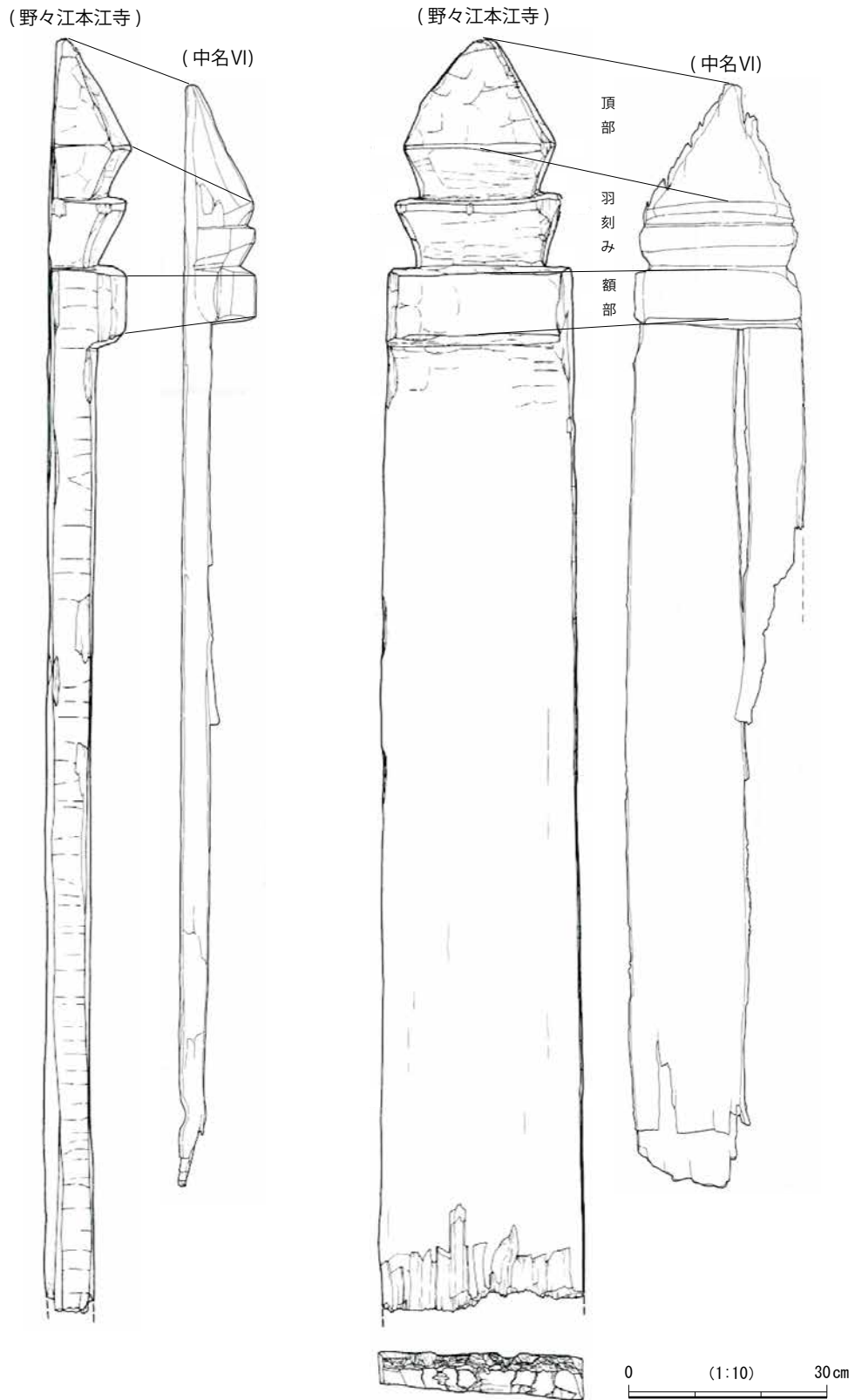
〔加賀〕 卒塔婆(スギ)、宝珠(スギ・ヒノキ)、四角笠(スギ・ヒノキ)、額(スギ)

額縁(スギ)、蕨手(スギ)、風鐸(スギ)、風招(スギ)

〔越中〕 卒塔婆(スギ)、板碑(ヒノキ)、六角笠(スギ)、額縁(スギ)

〔越前〕 風招(アスナロ)

北陸ではスギが木製塔婆の用材として多用されるが、これは古代の建築と容器にスギが多用された実体を反映したと理解され、地域と塔婆によりヒノキとアスナロの利用が加わる。板碑は、能登でも越中でもヒノキが利用され特別である。六角木幢はスギを基本とするも、越前大野でアスナロの利用がある。笠塔婆もスギを主体としながら、能登でアスナロの額、南加賀ではヒノキの笠がみられるなど地域と部材でバラツキがある。そしてこれらは、造塔を担った各国の木工施設の事情が関係すると考えられが、ヒノキ利用の板碑は、希少性と用材の宗教的特性を認識する必要がある。



第4図 木製板碑比較図

(3) 木製板碑の特徴

木製塔婆にスギが多用されるなか、能登と越中でヒノキの木製板碑が造塔されたことは、古代の木工品生産からも異質であり、その選定と利用には特別な意味あったと考えられる。このため野々江本江寺遺跡の説明では、能登で造仏された仏像の胎内銘文にある「阿修羅處」を参考に木製板碑が能登で造塔され可能性を提示した。また中名Ⅵ遺跡では木製板碑を後出品に位置づけた。

その木製板碑は共にヒノキの厚板から成形したもので、丸太の中心部に近い板目材を使い、樹木の幹の付近を碑身に当て頭部を樹冠方向に配している。このため塔身の下端から頂部に向かつて、横幅が狭くなる特徴をもち、木表に削り出された塔形は類型性をもつ。

このため両塔の頭部を見比べると、三角形の頂部は高さ 16 cm と 18 cm で変化は少ない。野々江本江寺遺跡で高さ 18 cm を測る二段の羽刻みは、中名Ⅵ遺跡では 10 cm ほどに縮小しており、立体的であった羽刻みは、中名Ⅵ遺跡では押し潰されたように縮小している。上段の羽刻みにおいては立体性を失い、溝のような形状を呈する。また額部も高さが 12 cm から 8 cm へと縮小するが、これは中名Ⅵ遺跡の木製板碑が野々江本江寺遺跡よりも、小規模の厚板を利用したことが成因と考えられ、塔身部の厚みが減るのもこれに関係したものであろう。

能登と越中の木製板碑が形態面の類型性を持ち、共にヒノキの厚板から造塔されたことは、両塔が規範性を備えた木工施設で製作された可能性を示すもので、中名Ⅵ遺跡の造立時期が野々江本江寺遺跡よりも後出であることは、多くの武蔵型板碑の研究と時枝務氏の特論が語るところである。

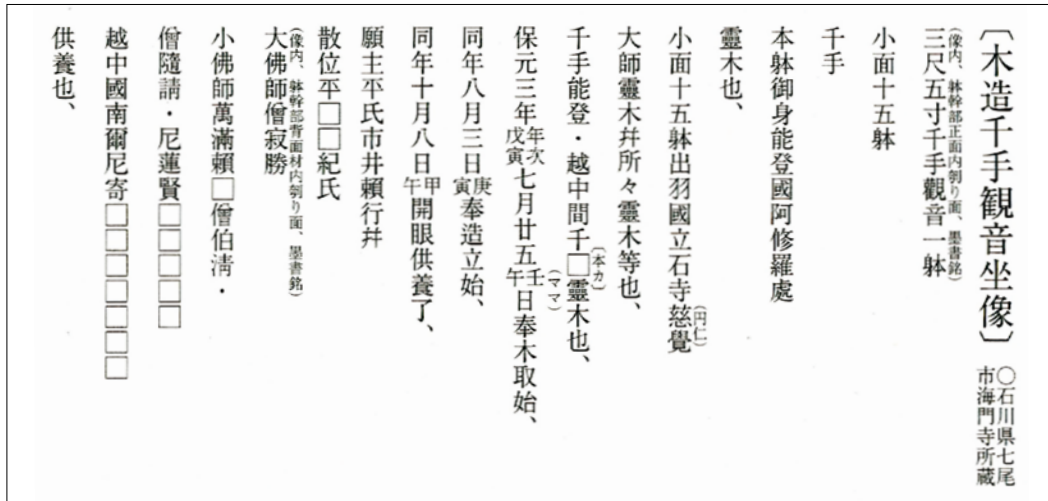
これまで野々江本江寺遺跡の木製板碑は、石製板碑に先行する板碑と評価⁽²⁴⁾されながらも、単体的な出土から検討が限られ、時枝氏が指摘する石製板碑との間にある数型式以上の中絶も内容が不明であった。今回確認した中名Ⅵ遺跡の木製板碑が、野々江本江寺遺跡の後出品に位置づけられることは、北陸の木製板碑が造立の期間中に型式的変化を生じていたことの証左となり、これに千田北遺跡の報告が加わると、木製塔婆の研究は大きく進展すると考えている。

3 史料にみえる古代の木工所

石川県立図書館が編纂した『加能史料』には、加賀と能登の史料が活字化されている。その中に能登と加賀で古代末と中世初頭の木工所を窺せる史料があることから参考として取り上げたい。

(1) 木造千手観音坐像の墨書銘

七尾市太田町の海門寺が所蔵する千手観音坐像はヒノキの寄木造りで、2006 年の修理に際して保元三年（1158）の墨書⁽²⁵⁾が胎内から発見され、能登の国衙周辺が造像と安置の舞台と考えられている。



製笠塔婆と小型化した板碑の造立、終末は野々江本江寺遺跡と千代北遺跡で確認された木製塔婆の一括廃棄が物語る廃仏的な活動で造立文化は終焉したことが考えられる。また造立の主体は北陸の在地官人や在郷の有力者とみられ、国衙の管理下におかれた木工の細工所で、これら木製塔婆の造塔を指示し、関係する故地や水辺に造立したことが推定されるが、今後もその裏付を深める必要がある。それは経塚造営が本格化する以前の北陸で、阿弥陀如来や大日如来の輝く種字を標識とした塔婆を拝した人々は、これらをどのように受け止めていったのか興味が尽きないからである。

付記

本稿は2023年12月に開催された石川考古学研究会と富山考古学会の合同例会会で発表した「北陸における木製塔婆造立」の内容に、西井龍儀氏から提供を受けた埴生南遺跡の六角木幢を加えることで成稿したもので、資料調査と見学に際しては、次の方々にお世話になっております。

越前慎子、木越祐馨、西井龍儀、村上茂治、向井裕知

註

- (1) 野々江本江寺遺跡では、板碑が出土した直後の検討会から時枝務氏と狭川真一氏にはお世話になり、「木製板碑」「木製笠塔婆」の呼称もその検討会で決定したもので、経過は報告書の「第1章調査にいたる経緯と経過」にある。
- (2) 三浦純夫ほか「環日本海文化交流史研究集会の記録」『石川県埋蔵文化財情報』第27号2012に詳しい。
- (3) 金沢市埋蔵文化センター記者発表資料「千代北遺跡で発掘された木製笠塔婆について」2019のほか、解説プリント「千代北遺跡木製笠塔婆説明会資料」2019などがある。
- (4) 小矢部市埴生南遺跡で出土した六角木幢については、西井龍儀氏からの情報提供と仲介で、2024年3月に村上茂治氏のご自宅で出土品を見学した。また西井氏からは実測図の提供があり、その学恩には深く感謝している。
- (5) 野々江本江寺遺跡の報告書では、木製笠塔婆に対して詳しい説明を加えるが、2本の竿を比較する記述は無い。竿に笠が載せられ、額が装着されたことを考えると、竿幅の増大は規格の大型化として捉える必要がある。
- (6) 時枝氏は木製板碑と石製板碑は形式学的な関係にあり、両者の差異が顕著な部分は頭部の形態としている。
- (7) 伊藤雅文「第6章 考察 木製塔婆の歴史的位置づけについて」『珠洲市野々江本江寺遺跡』2011。
- (8) 西田育乃ほか『加賀市直下遺跡』2003。
- (9) 木越祐馨「霊像千手観音坐像の出現」『新修七尾市史14 通史編（原始・古代・中世）』2011。
- (10) 小島西遺跡の卒塔婆を見学した時枝務氏は、頭部の形状から木製板碑より古相である旨の意見を披露された。
- (11) 垣内光次郎「経塚から村堂の造営」『図説かほく市の歴史と文化』かほく市史図説編2025。
- (12) 新出敬子「木越コウタイジン遺跡」『木越光徳寺跡・木越コウタイジン遺跡（遺物編）』2023。
- (13) 金沢市埋蔵文化センター記者発表資料「千代北遺跡で発掘された木製笠塔婆について」2019。
- (14) 向井裕知「千代北遺跡にみる中世の信仰」『いしかわの霊場』石川県立歴史博物館2023。
- (15) 千代・能美遺跡の笠を見学した狭川真一氏は、棟と軒の反りから平安後期の寺院建築の模倣を指摘された。
- (16) 西井龍儀氏は富山考古学会平成26年度総会で「藤森栄一賞をいただき」と題する記念講演をおこない、京田良志氏より示唆を受けた埴生南遺跡の六角木幢を「木造六角宝幢天蓋笠」と紹介している。講演の概要は『富山考古学会連絡紙236』にあり、実測図が提示されている。
- (17) 西井龍儀氏は六角木幢の形状は「平面円形 推定長径約56cm」と紹介するも、見学した笠の計測からすると、その平面形は楕円が見込め、実測図の復元破線も修正している。
- (18) 富山県埋蔵文化センターで岩坪岡田島遺跡の木製笠塔婆と中名VI遺跡の木製板碑を見学した。これには越前慎子氏の情報提供のよところが大きく、額縁の部位比定は、同席した向井裕知氏の見解に依拠している。
- (19) 越前慎子「遺物」『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道遺跡発掘調査報告』2007。
- (20) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで出土品を実見し、頂部の欠損や突起の削り出しを確認した。
- (21) 町田勝則・豊田義幸「六角木幢」『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財調査報告書1 社宮司遺跡ほか』2006。

- (22) 日本の木工史をみると、平安後期は木彫仏や調度品など増加する時代で、木製塔婆の出現と普及はその一脈とみている。
- (23) 千田北遺跡の樹種は記者発表資料からで、報告書で変動する可能性がある。また肉眼意見には「カ」を付した。
- (24) 埼玉県立嵐山史跡の博物館『板碑が語る中世－造立とその背景－』2008 など。
- (25) 史料の出典は、石川県『加能史料 補遺Ⅰ』2020 で、15・16 頁を複写。
- (26) 東四柳史明「海門寺千手観音坐像をめぐって」『木彫 千手観音坐像保存修理事業報告書』2005。
- (27) 瀬戸薫「半井家本『医心方』紙背文書とその周辺」『加能資料研究』第4号1989。
- (28) 史料の出典は、石川県『加能史料 平安Ⅳ』1989 で、806・807 頁を複写。

参考・引用文献

- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『加賀市直下遺跡』2003
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『金沢市梅田B遺跡Ⅱ』2004
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『七尾市三室オンド遺跡・三室堂ヶ谷内遺跡』2005
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『七尾市小島西遺跡』2008
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『小松市浄水寺跡』2008
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『珠洲市野々江本江寺遺跡』2011
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『羽咋市太田A遺跡・太田B遺跡・太田ツツミダ遺跡』2011
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『七尾市国分遺跡・国分B遺跡』2014
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター『小松市千代・能美遺跡』2012
- 三浦純夫ほか「環日本海文化交流史研究集会の記録」(財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報第27号』2012
- 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財センター『上荒屋遺跡Ⅳ』2000
- 金沢市・金沢市埋蔵文化財センター『石川県金沢市大友西遺跡Ⅱ』2002
- 金沢市・金沢市埋蔵文化財センター『石川県金沢市大友西遺跡Ⅲ』2003
- 金沢市・金沢市埋蔵文化財センター『石川県金沢市畝田・寺中遺跡Ⅸ－木曳野遺跡群Ⅶ－』2014
- 金沢市埋蔵文化財センター記者提供資料「千田北遺跡で発掘された木製笠塔婆について」2019
- 金沢市埋蔵文化財センター「千田北遺跡木製笠塔婆説明会資料」2019
- 金沢市・金沢市埋蔵文化財センター『木越光徳寺跡・木越コウタイジ遺跡(遺物編)』2023
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』2005
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道遺跡発掘調査報告』2007
- 西井龍儀「藤森栄一賞をいただいて」『富山考古学会連絡紙236』2014
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『太田・小矢戸遺跡』2015
- 石川県立歴史博物館『いしかわの霊場』令和5年度夏季特別展図録、2023
- かほく市『図説 かほく市の歴史と文化』かほく市史図説編、2025
- 国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター『一般国道18号(坂城更埴バイパス)埋蔵文化財調査報告書1 社宮司遺跡ほか』2006
- 七尾市『新修七尾市史14 通史編(原始・古代・中世)』2011
- 成田壽一郎『木工諸職双書 指物』理工社、1996

石川県埋蔵文化財情報

第 53 号

発行日 2025（令和 7）年 10 月 31 日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒 920-1336 石川県金沢市中戸町 18 番地 1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
URL <https://www.ishikawa-maibun.or.jp>
E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 前田印刷(株)

©（公財）石川県埋蔵文化財センター

